

〈資料紹介〉

在米日本人初期移民史 (上)

—— 鷺津尺魔 『吾輩の米國生活』 ——

The early history of Japanese immigrants in the United States (I):
Washizu Shakuma, Wagahai no beikoku seikatsu

片山 一義

資料の解説

本資料は、戦前期アメリカ合衆国において、日本語新聞の発行・編集に携わる文筆家であり、同時に、在米日本人移民に関する歴史家でもあった鷺津尺魔が、邦字日刊紙『日米』（英語名『The Japanese American News』）紙上に一九二四年七月十日から一九二五年四月二十七日までの間、「吾輩の米國生活」のタイトルのもとに計百四十三回に亘って連載した記事を纏めたものである。

鷺津尺魔が『日米』紙上に載せた連載記事は、日本仏教と僧侶の渡米を扱った「会堂の歴史的考察」（全三回）、ユタ州の農

業に関する視察記録である「南部ユタ州より啓上」（全八回）「鹽湖より啓上」（全五回）、更には、一九〇三年十二月から約二十年間加州に滞在した総領事大山卯次郎の事蹟を扱った「歴史的総領事大山卯次郎君の事」（全五回）あるいは「國語学校に関する在米邦人の諸観点」（全六回）、「史的日本人の面影」（全二十回）など多数にのぼるが、それらの中で一つの体系として纏め史料的价值が高いのは「歴史湮滅の嘆」（全九十九回）であり、もう一つは本稿で紹介する「吾輩の米國生活」である。

在米日本人一世の歴史を扱った「歴史湮滅の嘆」の資料的意義については、本誌前号¹⁾でやや詳しく触れたので、ここでは繰り返さない。ここで取りあげる「吾輩の米國生活」は、その夕

イトルからして、著者鷺津尺魔（本名鷺頭文三）本人の米國生活を綴った連載物のように思われるが、その主題と内容は基本的に異なる。この連載記事は「歴史湮滅の嘆」と同じように、何よりも日本人の渡米とアメリカ合衆国における移民社会の歴史を丹念に掘り起こし記録したものである。ただ、前者と異なっているのは、「吾輩の米國生活」は、後述する新聞記事の見出し一覧を見てもわかるように、幕末から始まる渡米者（長澤鼎や高橋是清）や移住者（田中鶴吉）、更には一八九〇年代半ば以降本格化する出稼労働移民のいわば前史にあたる水夫や学生（通称「出稼書生」あるいは「半書生」）が主体となる時期（鷺津はこれらの時期を「水夫時代」「書生時代」などと表現している）の日本人移民社会について、かなり詳しく扱っている点である。水夫が太平洋沿岸各地に連れて来た売春婦の実態、それに関連した娼娼運動の出来事、あるいは邦字新聞や雑誌業界、そこで働く記者生活の内情を明らかにした記事などは初期の移民社会を知る上で大変興味深い。新聞記者を職業とした鷺津ならではの記事内容でもある。しかし、「吾輩の米國生活」においても私が最も評価したい点は、日本人移民社会の形成期において「出稼書生」の果たした役割について実証しているところにある。

ユウジ・イチオカは、移民社会の黎明期、すなわち一八八〇年代半ばから一八九〇年代末まで在留邦人の主流を占めた「出稼書生」の歴史的意義について、「その限られた教育的成果にあ

るのではなく、かれらが日本人移民社会の土台を築いたこと、そしてその中心のかかりの人が人夫請負人や移民指導者となったことにある」と論じたが、「吾輩の米國生活」は正にそうした意義、「出稼書生」の果たした役割を数多くの個人の事蹟を踏まえて明らかにしたところに資料としての価値がある。そして、その焦点は美山貫一など移民史で有名な福音会を中心とした宗教関係者や愛国同盟を結成した菅原伝、巨理篤治、日向輝武といった政治的亡命者などの若者ではなく、何よりも農業分野において移民社会発展の土台を築いた「書生」「半書生」であり、彼らの事業であった。

「吾輩の米國生活」は第一回目から在米日本人史の前史とも言える長澤鼎の事蹟を丹念に調べあげ、計二十回に亘って連載し、続いて田中鶴吉（全七回）、吉池寛（全四回）を取りあげて連載したのも農業における彼らの功績を評価したがゆえだと思われる。さらに、鷺津は一八八四、五年（明治十七、八年）頃から始まる「學生大渡航」時代において、米國に渡った学生について、それぞれの渡航目的にも触れつつ約九十人程の氏名を列挙し、全体を次のように評価した。⁵⁾

「今日世に成功者として謡はる、は多くは明治三十年以後に渡りしもの、中に見ゆるやうだ。併し是等の成功者を出すには其れ以前に澤山の犠牲者があつた。前記人物は其生活の大半を犠牲に供しと言ひ得る。

何事によらず人類の事業は急速に成功するものではない。成功に達するまでには惨澹たる犠牲者を多く出すものである。而して其犠牲者となる者は自ら其犠牲者たることを自覺せずして卒先開拓の業を進めたのであった。恰も兒を持てる母親が其兒の犠牲たることを自覺せずして人間愛の止むに止まれぬ本能から其兒を育てあげると同じき趣である。

斯く考へて見るとき、我等は其の先人に對して無限の尊敬が湧く。而して其の事蹟はあくまでも正確なるものを書き遺す必要があると信ずるものである。」

農業分野における「先人」「卒先者」であり、「書き遺す」必要があると考えた「書生」とその事蹟について、鷺津は一八八〇年代末から一八九〇年代前半の時期と、その後労働移民の「大渡米」時期に分けて明らかにしている。まず前者の時期では、和歌山県から若くして渡米した堂本譽之進と兼太郎兄弟が挙げられる。彼らは、植木、草花栽培を手がけ、サンフランシスコ近郊における花卉産業の先駆者であった。また、ワシントン湖畔の土地を購入し日本人の中で最初に開墾事業を手がけたとする伊東米次郎と廣田克己である。廣田はこの企てのために、一八八八年高知県を中心に若者十一名をシアトルに連れて来た。更に、鷺津は「書生が開いた農園」と題して、一八八〇年代末カリフォルニア州の菓物摘取仕事において初めて日本人労働者の供給契約を獲得した馬場小三郎(熊本県人)、及び同様に農

園事業に進出した「書生」たち、例えば在米日本人農業者の発祥地ともいべきソノマ郡バカビル (Vacaville)、ウインターズ (Winters)、ウッドランド (Woodland) 地方における菓物園進出の魁をなした西亀之助や堂本元之進、竹崎犀吉、西博夫、野田音三郎を取り挙げている。鷺津は、これら「書生」の「農園ボス」たる事業活動について、次のように纏めている。⁽⁷⁾

「明治二十一年、馬場小三郎がウインタース村、ジョージ・セツセルの下に数名の學生を働かしてより同年各方面から書生連が此方面に集まり農園開拓の卒先をしたことは前節に述べたが明治廿一、二年にかけて書生連が田舎に活動を始めた事蹟は實に目のまはるほど歴史家を繁殺せしめる。實に此時代の事蹟を記録することは加州に於ける同胞發展史の第一頁にしてこの事實が即ちわが農業史の開幕である。」

(註) 明治二十一年五月馬場小三郎數人の學生を率いてウインタース菓物摘取に従事す。

同年六月堂本元之進六名の同志と共にバカビルに入る。

同年六月、竹崎犀吉ウッドランド村マーチン園に毎摘取のために赴く。

同年牛島謹爾渡米、翌二十二年三月コルマ市キラハン氏のポテト園に働く。

二十二年九月、大和正夫、石坂公歴等ニューポープのハップス摘取仕事に十數人をひきいて到る。牛島も同時にニューポープに入る。

明治二十一年八月、馬場小三郎ウィントースの仕事を終り桑港に
出で、阿部屠龍と小川亭に會し中原の飛躍を高唱す。

同年十月、馬場小三郎ソノ郡フリストンの山林に伐木の仕事を
請負ふ。西博夫、高尾庄太郎等、之に加はる。

明治二十二年、佐賀縣人野田音三郎渡米、ワードランド村に至り竹
崎犀吉と會しマーチン園に苜摘みに働く。

以上は最初農園に活動せる書生連の目録である。是等の人々が或
は合し或は離れて加州の農園に活動せる様はさながら一幅の畫だ。」

更に、一八九〇年代末以降の「移民の大渡米」時代において
も、鷺津は「學生ボスの企て」あるいは「學生ボスの大同団結」
と表現し「書生」が果たした移民社会の中での役割を明らかに
した。すなわち、一九〇二年十月日本人勸業社（一九〇四年に
株式会社化し日米勸業社と改名）の設立である。この結社の設
立メンバーは、理事の中畑六郎、社員の子久太郎、秋元正
規、海部梅太郎、犬丸政一、相川民之丞、峰島儀一、鷺津文三、
瀬尾八郎、寺澤六之助の十名である。

日本勸業社の理念は、アメリカ社会の強まる日本人排斥に抗
して、労働移民をして「土着永住せしむる」ことにあった。そ
のために、出稼氣質を変えするための啓蒙活動、賭博の常習など
農園にはびこる弊風の一掃、そして何よりも実業の勸奨、及び
「土地を所有せしむる運動」を起こした。日本勸業社は土地家
屋売買貸借、農産物委託販売を営業種目としたが、まず手始め

に実施したことは、日本人への土地斡旋であった。また、一九
〇三年にはユタ製糖会社及びアイダホ製糖会社への人夫供給事
業を請け負い、日本人労働者の活動の場を山中部⁸⁾において拡げ
た。

鷺津は「吾輩の米國生活」のなかで、日本勸業社の設立に至
る経緯に係わり、カリフォルニア州各地域における日本人の農
業を調査し「書生」の活動を紹介している。また、「勸業社理想
の一端を知るには明治三十六年桑港小川亭に於いて催された」
演説会（研究会）の記録を見ることが必要であると述べて、各
演題と講師について詳述している。そこには、櫻府金融社の創
立者、日米銀行頭取、三井物産桑港支店長、新世界新聞社主、
東洋汽船会社支店長、横浜正金銀行支店長、桑港駐在帝國領事
など当時の移民社会の名士が招待され、「本會の如きは未だ嘗
て見ざる有益の會合」と評価している。

以上のように日米勸業社の発足とその後の大和植民地建設に
繋がる農業及び移民社会の事情について、ベンチュラ郡の「オ
クスナード労働紛擾」の詳細な経緯と結末も含め、「労働時代よ
り借地時代へ」「借地時代より土着永住時代へ」と副題を付けて
計二十三回に亘って連載した記事内容は、在米日本人史、特に
初期移民史研究にとって貴重な一次資料としての価値を有する
と考える。

「吾輩の米國生活」は、最初に述べたように一九二四年七月十
日から一九二五年四月二十七日までの間、『日米』において計百

四十三回に亘り連載されたものである。したがって、その概観を知るためには、サブタイトル全体を鳥瞰することが望ましい。そこで(一)から始まる「見出し」のみを以下に並べてみた。順序とサブタイトルは、次のような構成になっている。

(一)	はしがき 長澤鼎君の事(イ)	(十八)	長澤鼎君の事(ソ) 長澤氏の家庭
(二)	長澤鼎君の事(ロ)	(十九)	鼎君後記(1) 小長澤の事Ⅱ上
(三)	長澤鼎君の事(ハ)	(二十)	鼎君後記(2) 小長澤の事Ⅱ下
(四)	長澤鼎君の事(ニ)	(廿一)	歴史的北加
(五)	長澤鼎君の事(ホ)	(廿二)	ロシアン川の雑感……(1)
(六)	長澤鼎君の事(ヘ)	(廿三)	ロシアン川の雑感……(2)
(七)	長澤鼎君の事(ト)	(廿四)	ロシアン川の雑感……(3)
(八)	長澤鼎君の事(チ)	(廿五)	田中鶴吉君の事……(一) 國出發の事情
(九)	長澤鼎君の事(リ)	(廿六)	田中鶴吉君の事……(二) 布哇に於ける一年
(十)	長澤鼎君の事(ヌ)	(廿七)	田中鶴吉君の事……(三) 米國へ上陸す
(十一)	長澤鼎君の事(ル)	(廿八)	田中鶴吉君の事……(四) 岩倉大使の諭示
(十二)	長澤鼎君の事(ヲ)	(廿九)	田中鶴吉君の事……(五) 十六年目の歸朝
(十三)	長澤鼎君の事(ワ)	(三〇)	田中鶴吉君の事……(六) 再び米國へ渡る
(十四)	長澤鼎君の事(カ)	(卅一)	鶴吉君餘録 食堂の談笑
(十五)	長澤鼎君の事(キ)	(卅二)	高橋是清君の事……(一) 附たり富田鐵之助
(十六)	長澤鼎君の事(ク)	(卅三)	高木三郎 勝小鹿 鈴木知雄
(十七)	長澤鼎君の事(ケ)	(卅四)	高橋是清君の事……(二) 奴隸に賣られたのだ
(十八)	長澤鼎君の事(コ)	(卅五)	高橋是清君の事……(三) 遂に脱走す
(十九)	長澤鼎君の事(カ)	(卅六)	是清君後記(一) 奴隸的移民時代
(二十)	長澤鼎君の事(キ)	(卅七)	是清君後記(二) 辨天寅の話
(二十一)	長澤鼎君の事(ク)	(卅八)	水夫時代物語
(二十二)	長澤鼎君の事(ケ)	(卅九)	學生と水夫
(二十三)	長澤鼎君の事(コ)	(四十)	學生の渡米
(二十四)	長澤鼎君の事(カ)	(四十一)	鼎君の宗教観
(二十五)	長澤鼎君の事(キ)	(四十二)	
(二十六)	長澤鼎君の事(ク)	(四十三)	
(二十七)	長澤鼎君の事(ケ)	(四十四)	

- (四〇) 文明の鵜呑に就て
(四一) 太平洋岸の學生 吉池寛君の事(一)
(四二) 太平洋岸の學生 吉池寛君の事(二)
(四三) 吉池寛君の事(三) 奉花の逸話
(四四) 吉池寛君の事(四)
(四五) 學生、水夫
(四六) 篠田君の疑義に就て……(1)
(四七) 篠田君の疑義に就て……(2)
(四八) 學生大渡航
(四九) 學生の大渡航 明治十八年の渡米者
(五〇) 學生大渡航(二) 明治十九年頃の渡米者
(五一) 東部の學生
(五二) 日米貿易の卒先者
(五三) 本題の「主人公」 吾輩の位置(二)
(五四) 渡米の動機及び失戀の事情(一)
(五五) 渡米の動機及び失戀の事情(二)
(五六) 渡米の動機及び失戀の事情(三)
(五七) 渡米の動機及び失戀の事情(四)
(五八) 渡米の動機及び失戀の事情(五)
(五九) 渡米の動機及び失戀の事情(六)
(六〇) 渡米の動機及び失戀の事情(七)
(六一) 渡米の動機(一) 日清戦争
(六二) 渡米の動機(二) 桑港上陸
(六三) 渡米當時の失態
(六四) 浪人の生活の事 永井元君 大和正夫君
(六五) 田園生活の事 齊藤徳三郎君
(六六) 再び記者生活に入る
(六七) 新聞雜誌生活の事
(六八) 新聞雜誌生活の事(二)
(六九) 新聞雜誌生活の事(三) 岡田溪水 米田實 横川
(七〇) 省三 川島天涯 高田米華
(七一) 『腮はづ誌』の青年 野口と高橋
(七二) 山田鈍牛の事(一) 腮はづ誌の文品
(七三) 山田鈍牛の事(二)
(七四) 米津彌吉君と其時代
(七五) 戀の悲劇(一)
(七六) 賣笑婦の起源
(七七) 廢娼運動の事
(七八) 女の世界と男の世界
(七九) 情死のさまぐ
(八〇) 賣笑婦盛衰論及日支人妻帯者比率
(八一) 白婦人と日本人との戀及其悲劇……(一)
(八二) 白婦人と日本人との戀及其悲劇……(二)
(八三) 白婦人と日本人との戀及其悲劇……(三)
(八四) 白婦人と日本人との戀及其悲劇……(四)
(八五) 白婦人と日本人との戀及其悲劇……(四)

- (八六) 白婦人と日本人との戀及其悲劇……(五)
 (八七) 白婦人と日本人との戀及其悲劇……(六)
 (八八) 誹譏罪に問はる ポテレン事件
 (八九) 都々逸の事
 (九〇) 誹譏罪に問はる (二) 入出獄中の事
 (九一) 誹譏罪に問はる (三) 獄中の生活
 (九二) 米國監獄の話
 (九三) 新聞生活より田園生活へ
 (九四) 小引
 (九五) 堂本譽之進君と堂本兼太郎君 (二)
 (九六) 同胞最初の開拓事業 (二) 伊東米次郎君と廣田克己君
 (九七) 同胞最初の開拓事業 (二) 竹崎、村田の加州移住
 (九八) 書生が開いた農園
 (九九) 書生時代より労働者時代へ 風來的労働時代(一)
 (一〇〇) 書生時代より労働者時代へ 風來的労働時代(二)
 (一〇一) 書生時代より労働者時代へ 風來的労働時代(三)
 (一〇二) 書生時代より労働者時代へ 鐵道人夫の勃興(一)
 (一〇三) 田中忠七の事
 (一〇三) 書生時代より労働者時代へ 鐵道人夫の勃興(二)
 田中忠七の事
 (一〇四) 書生時代より労働者時代へ 鐵道人夫の勃興(三)
 長谷川源司の事
- (二〇五) 書生時代より労働者時代へ 鐵道人夫の勃興(三)
 伴新三郎、伊東米次郎の事
 (二〇六) 書生時代より労働者時代へ 砂糖ビーツ耕作の勃興 製糖會社の始祖と邦人耕作者の元祖
 (二〇七) 書生時代より労働者時代へ 大波の如きパイオニア生活 馬場小三郎君の事(1)
 (二〇八) 書生時代より労働者時代へ 大波の如きパイオニア生活 馬場小三郎君の事(2)
 (二〇九) 書生時代より労働者時代へ 大波の如きパイオニア生活 馬場小三郎君の事(3)
 (二一〇) 書生時代より労働者時代へ 大波の如きパイオニア生活 野田音三郎君の事(1)
 (二一一) 書生時代より労働者時代へ 大波の如きパイオニア生活 野田音三郎君の事(2)
 (二一二) 書生時代より労働者時代へ 大波の如きパイオニア生活 野田音三郎君の事(3)
 (二一三) 書生時代より労働者時代へ 大波の如きパイオニア生活 野田音三郎とマグダレナ彎事件
 (二一四) 日本移民の勃興と日本食料品商(1) 各商店の屈起
 (二一五) 日本移民の勃興と日本食料品商(2)
 (二一六) 日本食店の發達 古代食店の歴史考
 (二一七) 古參在米日本人料理人の事

- (二一八) 労働時代より借地時代へ(二) 記憶すべき明治三十二年 加州視察(二) 上野領事の
 (二一九) 労働時代より借地時代へ(二) 記憶すべき明治三十三年 加州視察(三) 上野領事の
 (二二〇) 労働時代より借地時代へ(三) 予が借地耕作の失敗 下労働紛擾始末……(一) オクスナー
 (二二一) 労働時代より借地時代へ(四) ボス大同團結の労働 借地時代より土着永住時代へ(八) オクスナー
 (二二二) 労働時代より借地時代へ(五) ボス大同團結の労働 借地時代より土着永住時代へ(九) オクスナー
 (二二三) 労働時代より借地時代へ(六) ボス大同團結の労働 借地時代より土着永住時代へ(十) オクスナー
 (二二四) 労働時代より借地時代へ(七) ボス大同團結の労働 借地時代より土着永住時代へ(十一) オクスナー
 (二二五) 労働時代より借地時代へ(八) 労働時代より土着永住時代へ(十二) オクスナー
 (二二六) 労働時代より借地時代へ(九) 労働時代より土着永住時代へ(十三) オクスナー
 (二二七) 借地時代より土着永住時代へ(一) 下労働紛擾始末……(七) オクスナー
 (二二八) 借地時代より土着永住時代へ(二) 借地時代より土着永住時代へ(十三) オクスナー
 (二二九) 借地時代より土着永住時代へ(三) 私の結婚の事 中の卷一
 (二三〇) 借地時代より土着永住時代へ(四) 私の結婚の事 中の卷二
 (二三一) 借地時代より土着永住時代へ(五) 上野領事の事 中の卷三
 中の卷四

【留意】

当該新聞記事の連載番号と副題に係っては、以下八点にわたる誤植、欠落箇所があり、それらを次のように扱った。

- 一、第二回目の副題が、「(二) 長澤鼎君の事(ロ)」であり、第四回目が「(四) 長澤鼎君の事(二)」とされているが、その間の第三回目の記事には「(三)」以下に副題が何も付けられていない。したがって、本稿ではそれを「(三) 長澤鼎君の事(ハ)」と記載して補った。
 - 二、第八回と第九回は、いずれも「長澤鼎君の事(チ) 妙國寺腹切事件の續」とタブっており、前後関係から判断して後者は、長澤鼎君の事(リ) 妙國寺腹切事件の續」と修正した。
 - 三、第三十回は(廿九)と誤記しており、(三〇)と改めた。
 - 四、第六十二回は、(六二)と誤記しており、(六三)と改めた。
 - 五、第七十四回の番号が欠落し、次の回の番号が(七五)に飛んでいる。したがって、(七四)は欠番として扱った。
 - 六、第七十七回目は(七六)と誤記しており、(七七)と改めた。
 - 七、第九十八回目は、(九七)と誤記しており、(九八)と改めた。
 - 八、第百回目は、(一〇一)と誤記しており、(一〇〇)と改めた。
 - 九、「中の巻一」がダブっており、後者のそれを「中の巻二」と改め、また誤記している「中の巻五」を「中の巻四」と改めた。
- なお、本稿への収録にあたっては、新聞記事原文⁽⁹⁾をできるだけ忠実に活字化した⁽⁹⁾が、その際に以下の処理を行った。

- 一、原文ではすべての漢字にルビが付けられているが、それをすべて取り除いた。ただし、傍点は原文通りとした。
- 二、仮名遣いは原文通りとし、送り仮名の使い方が不統一の箇所もあるが、そのまま原文の通りとした。
- 三、変体仮名は、読みやすさを考慮するとともに、全体の文字と文体を統一する意図から、通行の字体に改めた。
- 四、句点のない箇所はそれを補い、行末のために略されている句読点はそれを補った。
- 五、明らかに誤植と思われる箇所については修正した。

(かたやま かずよし 社会政策専攻)

※本稿は、二〇一六年度札幌学院大学長期在外研究における研究成果の一部である。

- (1) 『札幌学院大学経済論集』第十三号、二〇一八年二月。
- (2) 「吾輩の米國生活」のなかで、鷺津尺魔自身の渡米と米國での生活状態を書いた部分は、(五三)～(六三)、及び(二二九)～(三〇)にある。
- (3) Yuji Ichikawa, *The Issei: the world of the first generation Japanese immigrants, 1885-1924*. (New York: Free Press) 1988. 邦訳エウジ・イチオカ著富田虎男・糸井輝子・篠田佐多江訳『一世：黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房、一九九二年、三五頁。
- (4) 長澤鼎に関する鷺津の二十二回の連載記事は、元住友銀行サンフラ

- ンシスコ支店長川勝正之氏の筆記による写本（鷺津尺魔著『長沢鼎翁伝』日米タイムス、一九二四）があり、また長澤鼎研究者である門田明氏も研究雑誌に全文収録している。前者の川勝正之氏の写本は、門田明氏とテリー・ジョーンズ氏の共著『カリフォルニアの土魂——薩摩留学生長沢鼎小伝——』本邦書籍、一九八三年の中に収録されている。後者は門田明『鷺津尺魔』『長沢鼎翁伝』、『鹿児島県立短期大学人文学会論集』第一四号、一九九〇年八月三十一日。
- (5) 『日米』No. 8919 September 1, 1924.
- (6) 鷺津は、これらの書生うち、特に馬場小三郎、野田音三郎の事蹟について、前者が全三回、後者全四回に亘って連載し詳しく記録している。
- (7) 『日米』No. 9019 December 10, 1924.
- (8) 山中部とは、アイダホ州、ユタ州、ワイオミング州（ローレンス以西）、ネバダ州（エルコ以东）、コロラド州（西部地方の一部）を総合した地域名称。在米日本人会事蹟保存部編纂『在米日本人史（三）』P M C 出版、一九八四年、九〇八頁。
- (9) 同新聞記事は、マイクロフィルム化されて、国立国会図書館等にも所蔵されているが、近年スタンフォード大学 Hoover Institution Library & Archives が日系移民に関する邦字新聞・雑誌をデジタル化してホームページ上に公開しており、その中の一つに当該新聞も含まれている。
<http://www.hoover.org/library/archives>
- なお、別の新聞も含め、鷺津尺魔の記事を探すにあたり、スタンフォード大学フーパー研究所ジャパニーズ・ディアスポラ・コレクションのキュレーター Kaoru Ueda 氏にはお世話になった。記して感謝の意を示した。

（資料）

鷺津尺魔「吾輩の米國生活」

（一）

はしがき

上帝の導きによって我れ／＼日本人は米國に渡った。學、商、農、勞働、浮浪漢、千態萬狀、百曲千折、詩乎、劇乎、之をけなせば一笑の夢、之を味はへば千歳の指針。

本文の記者は「米國日本人活動歴史劇」の中幕頃に現れた一個の馬の脚である。本舞臺の主人公でない。

本文は日本民族の米國生活を描寫せんと企てたものである。而して其活動の人物に對して人格的の論評を加へない。唯だ事實を有のまゝに記述することが本文の特徴である。若し夫其事蹟に對する功罪の評論は後世の史家に一任する。

米國に渡つた日本民族中近世に於て中濱萬次郎、新島襄を筆頭とする。記者は是等を移住者として多くの價値を認めない。筆を長澤鼎に起したるは彼が移住者として最古の歴史をもつからである。

長澤鼎君の事(イ)
日本出發の動機

白髮蒼顏萬死の餘。

平生の豪氣未だ全く除かず。

寶刀染め難し洋夷の血。

却て向ふ青山の舊草蘆

(水戸齊昭)

鎖國攘夷の重鎮たる水戸藩主徳川齊昭は、攘夷の獻白を血判して野に下った。時は安政三年である。

日本がペリー提督によって開國を餘儀なくせられてより、開國、鎖國の兩流が幕府内に生じた。徳川齊昭(水戸侯)は鎖國派、大老伊井直弼(彦根侯)は開國派であった。

何れの民族も、他民族と接觸せる始めは人種的偏見をもつ。日本人が最初米國人を見たる眼は、全く偏見に充ちてあつた。鎖國攘夷の論は但し書なしに一般民衆の歡迎する處であつた。

徳川齊昭が「寶刀染難し洋夷の血、却て向ふ青山の舊草蘆」と詠じたのは彼が滿腔の不平を天下に訴へて、日本群衆の血を湧かしめたのであつた。

鎖國攘夷派は蔓延元年三月三日降雪に乗じて大老伊井直弼を刺す。これより攘夷派大に勢力を得、外國人迫害の氣大に起り、

文久元年水戸浪士高輪東禪寺の英國公使館を襲ひ、英人を斬り殺し、文久二年八月勅使大原重徳を護衛せる薩摩の武士、武藏生麥村に於て行列を横切れる英人四名を傷殺したる大事件が持上った。

此時英國政府は大に怒り、償金四十五萬圓を幕府に、死傷者撫恤金十萬圓を薩藩に要求した。幕府は償金に應じたけれども薩摩はそんな要求を受付けない。何となれば苟くも勅使の行先を横切れる無禮者は斬に處するは當然で、償金などは以ての外、英國から頭を下げて詫びるべき筈だと濟まし込んで居たのであつた。

英國は益々怒り、文久三年六月十七日、軍艦七隻横濱を發し、同廿八日鹿兒島に至り生麥村の撫恤金及び下手人を求めたが要領を得ない。そこで七月二日英艦は薩摩の汽船天祐丸、白鳳丸、青鷹丸の三艘を取押へた。薩は大に怒つて砲臺から發砲した。英船應戰、市街大火、薩藩の士勇猛、裸體にして戦つたとある。此戰爭に於いて薩摩人は歐洲人の兵術に長じたことを悟つた。ウカ／＼していると日本は西洋人に取られると勘付いた。

元治元年(一八六五年)五代才助(後に友厚、原名河内香藏)寺島藤助(後宗則)等藩主島津齊彬公に謁し、邦家百年の計を定むるには海外に留學生を送り、其の文物制度を研究せしむるに在るを説き、其の建白容れられ茲に町田民部外十五名の留學生及び家老新納刑部、監督河内香藏(五代才助、後友厚と改む)通詞堀壯十郎を脱藩を名として英國に留學せしむる事となつ

た。

此一行の最年少者が現今サンタローザにある長澤鼎君で彼が留學の當時は實に十三歳であつた。

〔日米〕No. 8866 July 10, 1924)

(11)

長澤鼎君の事 (口)

長澤鼎君が英國留學に上る時の學生及び諸役人は左の如くであつた。

因みに記す、此記録は鼎君の實父磯永孫四郎の手記せるものにして、孫四郎の嫡孫、磯永家の相續人たる磯永海洲の保存するものである。

薩摩に保存せられし此當時の記録は西南戦争の時兵燹に罹りて焼失した。故に留學生及一行を記録せるものなく、傳聞のみ、久して誤謬を傳へられしが、長澤鼎君戸籍變更申請の爲め舊記の必要起り、現今朝鮮に在る磯永海洲より鼎氏の實父の手記にかゝる記録を謄寫し、茲に始めて正確なるものを得たのである。薩藩海外留學生の課目及姓名を正確に公表せるものは本文を以て嚆矢と思はる。世の史家たるもの本文を參考とし、誤謬を訂正せられんことを一言して置く。

千九百廿四年四月廿九日フワントン・グローブ長澤鼎君書
齊にて記す (尺魔生)

元治二年薩藩海外留學生課目及姓名表

〔磯永孫四郎手記の寫〕

諸課 本名 變名

一 海軍	町田民部	上野良太郎
一 海軍	村橋直樹	橘 直輔
一 陸軍・大砲	名越平馬	三笠政之助
一 陸軍・築城兼	畠山丈之助	杉浦 弘藏
一 造船	町田清藏	流水賢次郎
一 造船	磯永彦輔	長澤 鼎
一 機械學	町田申四郎	鹽田權之丞
一 運用測量機關兼	東郷愛之進	岩屋虎之助
一 運用測量機關兼	吉田巳二	長井五百助
一 運用測量機關兼	市來勘十郎	松村 淳藏
一 分理醫學兼	高見彌一	松元 誠一
一 醫學物産兼	森金之助	澤井 鐵馬
一 醫學	中村宗見	吉野清左衛門
一 英學	田中静洲	淺倉 省吾
一 差引	鮫島誠藏	野田 仲平
一 差引	寺島藤助	出水 泉藏
外二		
新納形部	石垣銳之助	
河内香藏 (五代才助ノ事)		
關 研藏	堀 壯十郎	

高木政一

附記

按ズルニ差引トハ割當學科名ニシテ現今ノ所謂政治、經濟、財政若クハ外交等何レカヲ意味シ遣練、算段、操縦、掛引(露骨ナル言葉ヲ使用スルナラバ)等ヲ含ム學術ヲサシタルモノナラン寺島氏後年歸朝シテ外務ノ職ニ就カレタルヨリ察スルニ蓋シ差引トハ外交官ノ意ナラン乎識者ノ批判ヲ俟ツ矣

大正十二年七月三十日

於朝鮮成驪牧場

磯永海洲誌

○○○○

長澤鼎君曰く「薩藩留學生は一行二十名であったが、町田某は出發に際し發狂の氣味があつたので、我々一行より一名を減じ、同勢十九名であつた。新納刑部といふ人は島津家の家老職であつた」

當時留學せるものは後來日本に於てすべて顯要の地位を占めている。森金之丞は有禮と改名して、最初の米國公使(當時辨務少使と稱す)となり後に文部大臣となる。鮫島誠藏は尙信と改名して最初の英佛兩國公使となり、寺島藤助は宗則と改名して外務大輔となり、吉田巴二は清成と改名して外務大輔元老院議員となり、五代才助は友厚と改名して大阪實業家の大家となり、堀壯十郎は孝之と改名して五代家の顧問となり、町田民部は久成と改名して元老院議員となり、晩年佛法に歸依し江洲三

井寺光淨院の住職となる。市來勘十郎は變名の松村淳藏を本名とし、海軍中將となる。而して我長澤鼎君は變名を實名として約六十年間米國に踏止まり、在米日本人農業者の卒先者として現存している。洵に珍中の珍として傳ふべきものである。

(寺島宗則の幼名を藤藏又は陶藏と記したるもの世間に多い。本稿磯永氏の手記によれば藤助とあり。尙考ふべし)

〔日米〕No. 8867 July 11, 1924)

(三)

長澤鼎君の事(八)

長澤鼎君等が英國留學に際して何故に變名を用いたかといふに日本は徳川時代に入るや耶穌教徒追放策を勵行すると同時に鎖國の方針を採り、海外に出づるものはすべて死刑に處したのであつた。此法律は慶應三年まで繼續したのであつた。それ故に元治二年(此年四月八日改元して慶應元年となる)長澤氏の出發當時は幕府を憚り一行すべて脱藩を名として海外に出たものである。既に脱藩逐轉である以上は變名を用いざるを得ないのである。

彼等一行一九名は元治二年三月二十日、鹿兒島を出發し、約十里の東なる羽島に至り、英國ガラバ會社の所屬汽船オースタリン號に搭じ、香港に向つて旅立つた。

(註) 薩藩留學生出發の道中に關し數説あり。五代友厚傳に

曰く……鹿兒島縣下なる一小村落串木野港より帆前船に乗じて先づ上海に向つて發锚す……斯くして一行は無事上海に着し、英國汽船に乗りかへ黒煙濛々として逆巻く波浪を蹴て太平洋の眞唯中に乗り出したり。是により先一行の上海に着するや此珍妙奇烈なる一行の異風を見んとて當時上海に滞留せる歐米の各國人さへ打ち交じり海岸に蝟集笑ふもの罵るもの相續いて起り、騒々しき事限りなく、爲めに海岸一帯は時ならぬ人の山を築きたりといふ奇觀を呈せり云々。

森有禮傳に依れば右と全く事實を異にし、余の調査せるものと大差なし。但し森有禮傳を書いた記者は鹿兒島の地理に疎きため若干の誤謬があるのみである。併て、長澤鼎君等は「五代友厚傳」の記者が言ふ如く帆前船で上海に渡つたのでもなく、且異様の風采で外國人を驚かしたのでもなかつたことは長澤君の直話で分つた。

鼎君曰く。「私は十三歳の時藩公の選抜によつて英國留學の一群に加はりました。其頃は皆んながチョン髷を結ふていたものでありましたが、外國人は髷などを結はないといふことを先輩に聞かされ、羽島で英國汽船に乗る時、髪を斬つた。同行者町田誠藏も斬りました。私等二人だけ汽船に乗る前に斬りまして、それを故郷に届ました。」

鼎君が出發に際して家庭の忠僕金太といふのが船まで送つて行つた。十三歳の若さんが何萬里の異國に行くといふのであるから國の爲め民の爲めとは申ながら兩親の心配はなみ／＼でな

かつたことは想像にあまりある。特に母の身になつて考へると、身を切るほど別れが悲しかったであらう。鼎が出發の跡で地駄ん太を踏んで泣いていられたそうである。

忠僕金太は、羽島で若さんの髷を切り、其髪を懐中して鼎君の母に奉つた。母は其髪を抱きながら泣きくづれたといふことが鼎君の家族親類に傳はっている。實に眞實の話柄である。

一行はオースタラニン號で香港に着し、約十日間此處に滞りし諸般の準備を整へた。鼎君は此頃の事情を左の如く語る。

「私と町田誠藏とは羽島で艇に乗る前に髪を斬つたが、五代才助（友厚）と寺島藤助（宗則）と、堀壯十郎と、家老の新納刑部との四人は髪を斬らなかつた。彼等は直に日本に歸る筈だから残っていたのであつた。其他の留學生は船中で髪を斬つたり、香港で斬つたりしたが、香港を出發して英國に向ふ時には右四人年長者を除くの外すべてザンギリになつた。」

〔日米〕No.8868 July 12, 1924)

(四)

長澤鼎君の事 (二)

鼎君一行は香港から英國郵船に乗換へ、シンガポール、ピナンホインゴ（セーロン南方の港）ボンバー、エデンそれからスエズ地峽を汽車で越した。此頃スエズ海峽はまだ出來てい

ない故、汽車でアレキサンドリアまで行くのであった。

アレキサンドリアから伊太利の南端モーターに歸港し、それからジブラルタルの海峡を通りぬけ、英國サウサンプトンに着いたのは慶應元年五月二十三日であった。

即夜汽車でロンドンに至り、豫て定められたるケンシングトン・ホテルに投宿した。

森有禮傳に曰く(慶應元年)五月二十三日英國サウサンプトンに着し、即夜倫敦ケンシングトンホテルに投ぜり。此間經るの處の地、香港の瓦斯に驚き、印度洋中に氷菓を食ふて驚き、倫敦に電信を見ては又驚きしと云へり。眞に然りしならん。斯くて同行の士は皆倫敦大學教授ウイリアムソン氏の懇切なる斡旋に依り倫敦大學に入り、各其目的の學科を修む……やがてケンシングトン・ホテルを出でベースウオートルの寄宿に移り、更に教授グリーン氏と同居す。而して先生は(森有禮をさす)英國に於いて如何なる經歷を得たりや又智識上に如何なる感化を受けたりや、先生の兄安武に贈りたる書簡に依りて大要を知るを得べし。茲に其書簡の要領を掲げんに、曰く學問に精勵せり。曰く敢爲の氣象に富めり。曰く健康を保全せり。曰く父兄に順良なり。曰く友誼に厚し。曰く中外の觀察に周到なり。曰く平和なる開港論者なり。曰く露國は強ならず義ならずとの主説を持せり。曰く米國を以て善隣尊ぶべき國と認めたり。曰く英語を以て學問の捷徑と認めたり。曰く法制の學は日本の事實を暗じて折衷すべきな

り。曰く幕府の因循無策を洞觀せり。曰く鹿兒島教育の盛大を企望せり。曰熱心なる憂國者たり。蓋し先生(森)は時齡未若冠ならず遽に英京に學ぶもの豈世故の經驗あらんや。而して其眼光の超邁、所説の清深、誠に尋常の比すべきにあらざる也。

○ ○ ○ ○ ○

按ずるに鼎君等英國留學の時、森金之助(有禮)は十九歳であつたと思はる。鼎君に質すけれども幼年時代のことであるから、分からんと言ふ。そこで私は有禮の父が乙丑二月(慶應元年)に作つた詩から彼の年齢を考へて見た。詩に曰く

次五代氏送別韻與兒有禮即十九阿兒出廬州。宛然轉得掌中球。普知皇國一正氣。六合星聊五大州。

そこで森は十九歳、長澤より六歳の長者であつたことが分る。五代才助(友厚)は天保六年十二月生れとあるから英國留學生を監督して渡歐した時は正に三十才の壯年であつた。

鼎君渡歐時代を語りて曰く「年長者は最初ロンドンの大學に入ったが私はスコットランドの中學校に送られました。それはロンドンに着いてから二ヶ月後のことでありました。スコットランドのアボデーン市のジムネーシウムといふ中學校は正確の英語を教へるといふ評判で、各國から生徒が集まつたのであるが、私はトーマス・ガーバーといふ人の後見でその中學校に通ふやうになりました。イヤハヤ亂暴といふたら今から考へると實に驚くべき程でな……」。

〔日米〕No. 8869 July 13, 1924)

(五)

長澤鼎君の事（ホ）

少年時代の腕白譚

一行と別れてスコットランドに一人ぼっちとなった鼎君は、ガーバー夫人を伯母さんにして此家で可愛がられたものであった。私は此機會に於て鼎君の幼時の事を少しく記して見る。

鼎君は薩摩の士、磯長家に生れ父を孫四郎といひ母をフミといふ。兄弟姉妹八人。長男彌九郎、次男喜之助、三男平八郎、長女トク、次女モリ、三女コマ、其次が四男彦輔で、これが後に長沢鼎といふのである。其次が五男彌之助、後に赤星家を相續し海軍の受負ひを業とし、骨董家の泰斗として有名なる富豪となった。

父孫四郎は薩藩の儒者で名筆の聞え高く、當時の碑銘は多く孫四郎先生の録する所なりと傳へられている。且代々鹿兒島天文臺を司つていた所から見ると當時の天文學者であつたのだ。

四男彦輔は七、八歳の頃から非常に記憶力の強いものと見え、四書五經の文句、唐宋の詩などを暗記したので、來客のある毎に詩文の朗讀をなして人を驚かしたといふことである。孫四郎君が海外留學の事あるにあたり、特に十三歳の彦輔を抜いたのは其兒の憂秀なるを認め、藩公も亦夙にその令名を聞いて留學

を許可したのであらう。

鼎君の幼年時代は日本が將に幕府政治より離れて、王政復古に向はんとする大轉回期であつた。明治維新大業の中心たらんとする薩摩藩は尙武の氣を以て充ちていた。世に有名なる薩摩健兒社は鼎君の幼時に生れたる神州銳氣の結晶であつた。

山陽が鹿兒島人を誦へる詩は後世人に取りては詩人の誇張的感激と見るかも知れないが、事實山陽は此謡に於いて薩摩青年の小部分を描寫するに過ぎないのである。

前兵兒謡（山陽）

衣は軒に至り袖腕に至る。

腰間の秋水鐵斷つべし。

人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る。

十八交はりを結ぶ健兒の社。

北客能く來らば何を以て酬いん。

彈丸硝藥是れ膳羞。客猶屬厭せずば好し寶刀以て渠が頭に

加へん。

健兒社は十五六歳から二十五六歳ほどの青年が國事のため獻身的犠牲の團體であつた。青年等が身の丈けに餘る大刀を腰にして夜間に辻切りをする。毎日毎晩「試し切り」が絶へない。

遂に藩公から「故なく人を斬るものは死罪に處す」という命令が下つた程である。文久三年生麥に於いて英人四名殺傷した事件も此健兒精神の發露に過ぎないのであつた。

此殺伐の時代に人となつた鼎君は十歳頃から劍術、柔術を習

ひ健兒社の候補者であった。彼は文學の天才ありしため留學生の一人として海外に出たが、薩摩の特長たる英雄の氣を其のままに洋服を着横文字を習ふたのであった。浴にいふ和魂洋才というのであった。

一人ぼっちになってスコットランドの中學校に通ふた頃、彼はその鬱勃たる薩摩男子の氣風は折にふれて發した。彼は此地に唯一の日本男子であった。學校の往復に同年配の兒供と何かの事で爭論が始まると、彼は其胸間の壤中時計を腰間の秋水に代えて打合を始める。此事に就いて鼎君は語る。

「私の持つていた時計は銀時計の厚いのでありました。クサリは金で太い丈夫なものであった。喧嘩になると其の時計をポケットから抜きとり、クサリをつかんで敵を打ってやりました。時計は時を見るために用事がない。全く喧嘩の時の武器であった。ガーバー氏は私の亂暴を恐れて大小はどこかに仕舞込んであったからナ……ハッハ、ハ、ハ、」

(正誤)——本稿第一中、五代才助寺島藤助等藩主島津齊彬公に謁し云々とあるは藩主島津忠義公の誤り。又本稿第二中、町田清藏の變名流水賢次郎とあるは清水兼次郎の誤り。又留學生の外に河内香藏(五代才助ノ事)變名關研藏。通詞堀壯十郎は變名高政一なるを植字の誤りあるを以て左に訂正す。

本名

變名

(五代才助ノ事)

河内 香藏

關 研藏

通詞

堀 壯十郎

高木政一

〔日米〕No.8870 July 14, 1924)

(六)

長澤鼎君の事(へ)

少年時代の腕白譚

鼎君一夕私に語りて曰く

「僕の幼時は随分腕白でナ……今でも覺えて居るのは十歳位の時、市街を歩いてると十二、三歳の町人の兒が僕に向って何だか無禮な事をいふので、此下司奴と怒鳴りながら追ッ駆た。彼は武士の兒が權幕をかへて怒鳴つたのに驚いて逃げた。其兒はとう／＼樺山家に逃げ込んだ。僕も追ッ駆けて同家に入った。此時樺山資紀の父君は僕を誰何せられた。僕は「町人の兒が無禮な言をいふから打ちます」と答へると、老公は「ウン打つてよろしい」といはれた。此の當時町人の兒が武士に齒向ふ場合には打つか斬るかされたもので、それが當然と考へられていたものだ」

鼎君が英國留學當時の心持ちは武士の元氣に充ち／＼たのであったから、彼がスコットランドの田舎の人々を見た眼には矢張り町人土百姓としか映じなかつた。これに就て面白い挿話がある。

或日曜に鼎君は郊外に遊んで居ると、田舎の老人が十三、四歳ほどの少年とドンキー車を驅つて來た。其少年は車の中に積んであったポテトを鼎君に目掛けて投げつけた。勿論それは少年の戯れであったが、鼎君は大に癩にさはったので馬車から其の少年を引下して散々に敲きつけた。車上の老人はこれを見て加勢のために降りて來たそうだ。そこで鼎君は手に携へたステッキを以つドンキーの尻をした、か敲いた。ドンキーは驚いて駈出したので田舎の少年は援兵を失ひ泣き／＼馬車を追かけ乍ら逃げて往つた。腕白ながら機轉のきいた話である。

後年鼎君は語る

「若しあの時代に僕が刀を腰に差していたら、英國の町人や百姓を何人傷つけたか知れなかつたであらう。事情は分らず言語は通ぜず、自分本位で物事を呵成しやうといふのだから誠に危険千萬なものであつた」

「併しこの腕白時代に一つ褒められたことがある。或日郊外に遊んでいると、牧場の傍に一農夫が一人の少年を何の爲めにか知らんが、打つやら蹴るやらしていたのを見た。此の時義侠心がむらく／＼と起つて其場所に駆つけ、矢庭に大人の手を取り足がらをかけて引倒してやつた。大人は垣杭に頭を打つて傷を受けた。僕は少年を連れて歸つた。此の顛末をガーバー夫人に告げると「ユー・オーライ」とほめられた。スコットランドには日本の武士氣質があるやうだ」

鼎君がスコットランドに留學した頃は日本人は實に同國中一

人しか居らなかつたので珍らしがられたものである。或日彼はアポーデーン市の繁華な町をキヨロ／＼として某寫眞館の前を歩いていると、寫眞屋の主人が彼に向つて寫眞を撮つてやらうといふ。そして撮影料は要求しないと言うので早速入つてとつて貰い、数日を過ぎ其の店を尋ね寫眞を受取りたいといふと主人は笑い乍ら「あなたの寫眞はここに掲つて居ます」と看板にした寫眞をさすのであつた。彼は一杯喰つたなどと思つたが、喧嘩も出来ないで苦笑して歸つたということである。寫眞館の主人は小日本人を店頭に飾つて見世物にしたのであつた。

〇 〇 〇

鼎君曰く「僕等は人心が附いて後も尙武と學問とを知つて、金勘定を知らなかつた。僕が英國留學の時、藩公からその家族に向つて御下賜金があつたそうだ。僕の兄はこの金を僕に持つて行けといふ。僕は金なんか入らんといふて争ふた。その結果五代さんが寺島さんにその金を託したようだ。僕は英國留學中どこから學資が來るかさえ知らなかつた」

薩、長、土の諸藩に於て苟くも武士たるものが金の勘定などする卑しいものは無かつたのである。一命を君國の爲に捧げる。これが日本武士の信仰であつた。私は鼎君の武士氣質を書く序に當時有名なる妙國寺事件の一節を引いて当時日本武士を追懐したい。

〔日米〕No.8871 July 15, 1924)

(七)

長澤鼎君の事(下)

武士氣質の真相

鼎君の腕白は英國に渡つてまでも其面目を發揮したことは前號に述べた通りであるが、此當時の日本勤王武士の消息を知るものは必ずしも鼎君を亂暴なる少年とは思はないであらう。

今日經濟一點張りの世相からすれば、日本明治維新前後の志士の行動は、クレジーともモップとも評することが出来るかも知れぬ。併し神州清潔の民はどこまでも清纯の民であつた。彼等は感激の詩人であつた。彼等は民族擁護の憂國者であつた。彼等は「ま、よ三度笠横ちよに冠り、破れかぶれの頬かぶり」の中に眞純の戀を味わふ風流人であつた。彼等は其氣骨を經とし、戀愛を緯とし、醒ては天下の權を擅にし、酔ふては美人の膝に睡るの哲學をもつていた。妙國寺事件が近世歴史上外國人を如何に驚かしたかは左の記録にて詳である。

妙國寺腹切り事件

「明治元年土藩の二小隊、朝命を奉じて泉州堺を警衛せしが、二月十五日佛人禁を破りて大阪より妄に通行し來るとの報に接し六番隊長箕浦猪之吉、八番隊長西村佐平治各一小隊を率い、出張軍監杉平太、小監察生駒静次と共に大和橋に至りしに果して佛人來れり。杉、生駒之を制して去らしめたり。兩隊歸陣して休息せしに午後四時頃、市民周章來り報じて日く「唯今佛人

突然上陸し、市中は横行亂暴す。直に救助あらんことを乞ふ」と。箕浦、西村直に隊卒を率いて出張せしに、佛人は人家に押入り社寺に亂入し、傲慢無禮至らざるはなし。隊卒を指揮して之を制止すれども通辨一人も伴はざるを以て言語通せず、止むを得ず補縛せんとせしに、軍監より制止の命下りしかば知何ともする能わず。とやかく訊問する中佛人隙を窺ひて逸走す。その中の一人は我軍旗をさへ奪ひ去れり。隊卒之を追ふ。漸くにして軍旗は取返したるが、佛人既に小船に乗りて陸を離れんとし、短銃を亂發する小面の憎さ。今は是迄なり。此儘去らしめては神州の恥辱なり土藩の恥辱なりとて、隊長命を下し小船に向つて射撃す。佛人は三人死し、七人負傷し、一人だけ無事に佛艦チブレキスに收容せられ、六人海に落て行衛不明となれり。佛公使怒つて我政府に談判して曰く「第一、土佐の兵隊を指揮せし士官兩人、並に手を下したる兵士残らず、日本の官員並に佛国海軍兵隊の眼前に於て刑に處すべし。第二、被害者の家族等扶助の爲に土佐侯より十五萬圓を差し出すべし。第三、親王の内朝廷の外國事務第一等の執政者一人佛船に來り謝すべし。第四、土佐藩主自ら佛船に來り謝すべし。第五、土佐人兵器を帶して開港場を通行し、又土佐人開港場に滞留することを嚴禁すべし。以上五箇條の中いづれたりとも其三を擇べ」と。我政府は土藩と交渉の上第一、第二、第四を擇ぶこととなれり。刑に就く者につき箕浦、西村は隊長のみ死して隊卒を助けんことを乞ひしかど、朝議之を許さず。覚えのある者は自ら各名乗

出よと命ぜしに、隊長始め名乗り出たるもの三十九人ありき。

然るに朝議二十人を限りたれば小南六郎右衛門神前に御鬮を引かむ。隊長の箕浦、西村小頭の池上彌三吉、大石甚吉は引かず。卒の三十五人にて引けり。御鬮に漏れたる者の中、中城淳五郎、横田静治郎、榮田次右衛門、田丸勇次郎の四人は書を上りて同じく死につかんことを乞ふ。朝廷の有司其者を感じしたるも、人数既に定まれるを以て之を許さざりき。死につくものは卒の十六人、隊長二人、小頭二人を合せて二十人也。小頭以下はいづれも身分賤しき足輕にて、平生藩内にては苗字を名乗るを得ず、下駄を穿くを得ず、絹布を服するを得ざりしが、今回特別の詮議を以て士分の格式を仰付けられ下駄、絹布をも許さる。刑は斬り首ならで切腹也。これ士分の刑にして足輕に取りては一期の光榮也」(此稿つゞく)

〔日米〕No. 8872 July 16, 1924)

(八)

長澤鼎君の事 (子)

妙國寺腹切事件の續

「屠所の羊のそれならで、勇んで出で立つ海南男子の死の旅、生れて始めて着たる絹布はればれしく、始めて穿ちたる下駄の音高らかに踏み鳴らす間もなく駕籠に載せられて藝、肥兩藩の士二百人に護衛せられて、堺の妙國寺に赴く。實に明治元

年二月二十三日也。これまで此處を異にせし兩隊長、こゝに十

八士と相見えて「遇般當地に於て佛人討攘に及びしは全く我等兩人の指揮せし所にして、諸士の關知せる所にあらざるは言を俟たず。就ては上裁を以て割腹の命を蒙ると難も、罪科は我等兩人に止まりて、諸士に及ばざる譯を以て、我等兩人に於ては度々此儀を上申し、我等兩人自裁を遂げて其罪を蒙り、諸士は悉く皆宥免あらんことを乞ひたれども裁可を得ず、遂に諸士までが割腹の上裁を受くるに至る。實に我々兩人の遺憾に堪えざる所なり。如何に我も君に對し申譯なし」と繰返し々詫たるに諸士は聲を揃へ「否々決して、さあるべからず。假令隊長の命に従いし事なればとて、其行爲に至りては我々此兩隊長は將卒一體の運動に外ならず。如何ぞ罪を隊長のみに歸し、我々死を免る、理あらんや。我々豫死は覺悟の事なれば御心置き全く御無用なり」といふ。兩隊長其忠義の切なるに感じ、頻に謝辭を述べ。熊本藩士感じ入り、諸君が死に臨み從容たるは實に武夫の龜鑑なれば後日歸郷の土産としたし。何なりとも一筆書て給はれと請ふ。諸士之を諾して思い々に書き殘しけるが箕浦は一艶を作つて曰く

除却妖氣答國恩。

決然豈可省人言。

唯教大義傳千載。

一死元來不足論。

西村は歌を詠じて曰く

風に散る露となる身

はいとはねど心に

かゝる國のゆく末

酒肴出て、諸士快よく飲食せり。準備既に整ひて諸士將に出場せんとせしに、天の涙か、今迄晴れたる空は俄に掻き雲り、大雨沛然として盆を覆すが如く、場内の混雑言はん方なく、正午に始むべき筈なりしが延びて午後四時に至れり。箕浦第一番に呼び出さる。割腹の場には晃親王を始め、東久世少將、伊達少將以下薩、長、藝、肥後及び十藩の警衛士、檢視の官吏等順次に列を正して居並び、佛人は公使を始め其外二十人計り小銃を携へ、椅子に着きて臨檢す。箕浦泰黙として壇上に端座し、先づ我檢視の諸官に敬禮し、一聲高く呼んで曰く「フランス人共聽け。己は汝等の爲めには死なぬ。皇國の爲に死ぬる。日本男子の切腹をよく見て置け」と。徐に短刀を抜き腹十文字に掻き切り、臍腑をつかみ出し、佛人に投げんとす。介錯人箕浦の首を撃つ。あやまって上部に中り深く入らず。再び撃つ。首末だ落す。箕浦大聲を發し「まだ死なぬ」といふ。三たび撃ちて首落たり。箕浦、年二十五。その剛膽不敵の舉動には衆みな舌を捲いて驚嘆す。佛人は慄然として面色を失し、正視するを得ざりき。次に西村壇上に上る。諸官に禮し、劍を抜き左腹より右方に引廻す。刀淺し。再び突込み、引いて半に至る。介錯人一撃して首前に飛ぶ。西村、年二十四。第三番に六番隊小頭池上彌三吉壇に上り、腹を撫眞一文字に掻き切る。介錯人一刀に首

を落す。第四番に八番隊小頭大石甚吉、從容として席につき、諸官に禮し佛人を睨み、腹十文字に掻き切り、静かに血刀を座右に置き、遙かに佛人を睨み兩腕を張りて「介錯人頼む」と呼ぶ。介錯人聲に應じて一刀を下す。淺くして切れず。再び切る。また切れず。再三再四するも首なお落ちず。七度目にて始めて首おつ。この間大石は少しも動かさず毅然として平常の如く、有司皆色を失し、佛人愈々恐怖し四肢悉く寒戰す」(此稿續く)

〔日米〕No.8873 July 17, 1924)

(九)

長澤鼎君の事(リ)

妙國寺腹切事件の續

「續いて、杉本廣五郎、勝賀瀬三六、山本哲助、森本茂吉、北代健助、稻田貫之丞、柳瀬常七の七士順次切腹し、第十二番目の橋詰愛平、壇に上りし時寺内正に點燈す。橋詰從容として衣を開き、將に刀を下さんとせしに、佛人恐怖益々甚だしく、一同椅子を離れ、手を振、詠舌喃々、後をも見ずして逃げ去る。有司、橋詰の死を制止し。橋詰を始め、生残りたる九士切齒すれども、如何ともする能はず。有司佛船に趣て談判せしに佛人は土佐人の勇ましくして、生を捨つること土芥の加くなるに感じ、且恐れ、天朝に奏して、殘る九士の助命を請はれたしと願

出づ。有司還りて九士を諭し、穩便に朝廷の御沙汰を待つべしと告ぐ。翌二十四日「大阪表に立退くべし」との朝命下れり。

橋詰は「死ぬべき命、夷人の命乞ひの爲めに助かること如何にも残念なり」とて自ら舌を噛み切り、辜玉を絞めて絶息したるが、人々の介抱にて蘇生せり。後、九士は切腹を免ぜられ、國許に送り還され、幡多郡へ流されたるが、この年の末、赦免せられたり。切腹したる十一士は妙國寺の側なる寶珠院に葬らる。今に至るも、香華なほ絶へず、切腹は日本武士の花なり」云々（以上後藤象二郎傳及び森鷗外氏「堺事件」に據る）

○ ○ ○ ○ ○

日本人腹切りの真相を知らぬ西洋人及び當今の日本青年等は、今回米國移民法の制定によりて母國に發生せる腹切事件を見、奇怪に惑するであらう。それは日本人の血の遺傳を歴史的に知らぬからである。鼎君の事績を記述する機會に私が以上の史實を引抄したのは斯の國民の斯の精神あることを眞解せしめんためである、若し篤學の士が進んで日本武士道の堂奥を極めんとするならば、日米問題の解決に資すること甚大であると思はる、。

武士道は一面から解すれば奴隸の道德である。蓋し奴隸の道德は一面獻身犠牲の道德である。デモクラシー萬能を信ずる學者は、宜しく此道德の内容に含まる、哲理を究明すべきである。

鼎君等米國移住の動機

慶應元年（一八六五年）鼎君一行の留學生中、其十二人は歐洲各國を視察して歸朝し、森有禮、吉田清成、畠山義成、中村博愛、松村淳藏、鮫島尙信等はロンドンに残りて勉學す、鼎君は勉學すること前に述ぶるが如し。而して翌慶應二年（一八六六年）六月、森有禮等學校の休暇を利用して各其志處を極めんとし歐米諸國に旅行す。

◎森有禮、松村淳藏は將來海軍に従事する自的を以て露國に、

畠山義成は佛國に遊びたり。

◎鮫島尙信、吉田清成は民情視察の爲め米國に遊びたり。

◎森、松村等が露國に遊びたる時日本より此年留學せる幕臣、

山内作左衛門、市川文吉、緒方城治郎、大築彦五郎、小澤清

次郎、田中二郎等に會す。

◎森有禮此當時の事を記せるもの曰く。（森有禮伝に據る）「是等の士、事を談ずるに至つて喜すべし、此人々等は關東魂を持せず、頻りに二京師を護するの志操あるもの、殊に山内は國學者にして本居先生を信心して勤王の説を主張す。且又當人の説に、「當時日本の如く銘々割據しては終に世界縱横の業爲し難し。唯君は一人にして政法一途に出でざれば國家遂に開けず、恐れ多くも他人の有となるべし」と實に我心を得たる論也

○ ○ ○ ○ ○

米國に遊びたる鮫島、吉田の兩人は、ローレンス、オレフアント氏の紹介により、此當時紐育州ワツセーに在る新宗教家トーマス・レーキ・ハリス氏に面會し其所説を聽き其高風に接し、大に感ずる處あり、且米國の新文明に對し憧憬の念大に起る。

(註) ローレンス・オレフワント氏は英國より日本に使したる最初の公使ロード・エルデン氏の書記として日本に滞在し、後にハリス氏の教を受けたる者なり。氏が日本留學生をハリス氏に紹介せるは、一は日本人を知り一はハリス氏的人格を崇敬せるに由る。

〔日米〕No. 8874 July 18, 1924)

(十)

長澤鼎君の事 (又)

鼎君等米國移住の動機 (つゞき)

慶應二年八月(一八八六年)森、松村等は露國より、鮫島、吉田等は米國より畠山は佛國より暑中休暇旅行からロンドンに歸り一同相會して各國の民情風俗を語り合ふた。此書生等の語り合ふた結論は米國が最もノーブルの國で最も日本に好意ある國であるといふ事に一致した。それも其筈である。此當時米國にはリンカーンといふ偉人が黒奴開放の義戦に勝ち、凶漢の爲めに暗殺された翌年で、米國民は正義人道を高潮した時代で

あつた。此時から鼎君の先輩等は米國を尊敬する念が熾になつたのである。

森有禮露國視察の後(慶應二年八月)家郷の實兄安武氏に送れる書翰に曰く

「恐れ乍ら、追々觀察傳聞仕り候次第御心得の一助に相成申す可く左の通り申上奉候彼の露國の今要する所一の香港を得るに之有、若し今日本彼れと親交を結び候は、英、佛其外米國等今類に日本を呑まんと欲する故に、我は日本に力を合せて之を防ぐべし。之を餌にして彼れ申すべし。願はくば假に一港の要地に敦を備ん、又要港に艦を備ん」此の如くなれば波れ其處に衛を置くべし。然れば我邦すでに彼の腹中にあるは多言を費さず。彼れは港をもとむ。未だ持たざるの故なれども全く無きにあらず。ペートビルあり。世に善港という。唯だ仲夏船の通路ありて、餘の季には滿海水をむすんで海路絶へて無し。故にありてなきに同じ。外にも又黒海の善港あり。併し先年セバステポール大戦の後、歐羅巴諸國會盟して其處に敦艦をそなふべからずと法を設けたり。故に是亦ありて無きに均し。即ち今又偶印度を襲はんと欲して能わず。英の守嚴なればなり。トルコを奪いコンスタンチノーブル(トルコの都)を取らんと欲しても西洋各國之を抑ふ。今又支那の地方を掠領すること切なりと難も是亦海邊を遙に隔てさまで利益なし。終に漸く我に迫りすでに蝦夷の地過半を奪ふ。然れども偏地にして利益多からず。故に轉じて對馬を握らんと欲して英佛之を訪ぎて遂に握る能わ

ず。斯の如くにして彼れ末だ一の港を得ず。故に今竊に猫智を抱き鷲爪を藏して、外客類に神妙を飾り、内に狼心を養ひ、召す間を狙ふ。故に先年我國人露國人を殺せし時もさまで間もせず、却て我國人を惠過する事著し。又彼れ我國人に露行を勸むること甚だ切なり。すでに去年幕府に迫り幕生七人をして遂に行かしむ。過情斯くの如し。彼の狼心あること更に言うに足らん」

又米國の事情に就きて左の如く記している。

「米國は今開國を去ること漸く二百年、國家の大小となく悉く萬民と謀り、公平正大の政事をなす。唯今世界に於て突然たる事世人皆知る所なし。尤も西洋人皆云うに後世起る所米なりと。殊に英人は米人を諱候へども是亦同説なり。御照察下さる可く候。私竊に勘考仕り候にともて親交を結び有無を通ずる處此國なりと着眼仕り候。此國當時外國に念を掛け候儀曾て之なし。故に彼の國四年間の永戦（南北戦争をさす）此の頃漸く治まり、國中末だ一統せず。其上後背には總て英の領分之有。脇にはメキシコありて腹心の病末だ全く癒えず。先づ是等を統一して然る後四方に手を振ふべし。末だ外念なき事御照察成さる可く候（下略）」

英國留學の人々は藩命に出で、其主意たる各其長技を學び後來藩政に資せんとするに在るから、其の學業に必要な資金を供給し其の目的を遂げしむる豫定であつた。然るに當時國內極

めて多事、人心鼎沸、特に鹿兒島藩の如きは内亂の當時者であつたので、海外留學生を養ふ能はざる時運に際會した。そこで一同は英國を去らねばならむ事情に迫つたのである。

此の時恰も善し、米國からトーマス・レーキ・ハリス氏が佛國博覽會見物の爲英京ロンドンに立寄られた。鮫島、吉田、森相携へて旅館にハリス氏を訪ひ、渡米の志を告げ、援助を請うた。

〔日米〕No.8875 July 19, 1924)

(十二)

長澤鼎君の事（ル）

米國に移住す

トーマス・レーキ・ハリス氏は豫てより日本の風俗習慣をロレンス・オレフワント氏より聞き、且昨年の夏鮫島、吉田の兩青年に會い大に彼等を愛したのであつたから、彼等學生が學資に窮せるを聞き米國留學の後援者たるべきを快諾せられた。ハリス氏曰く「米國に渡つたならば半日位働いて其余暇で學問すると宜しい」と。一同は大に喜び、米國渡航の事に決し、鼎君をも加ふること、レスコットランドに在る鼎君に出發を促した。此時森廿一歳、長澤鼎十五歳五ヶ月であつた。

森、長澤、鮫島、島山、吉田、松村の六名は慶應三年六月（一八六七年）英國を去り、米國紐育州トセツ郡ワッサーなるハリ

ス氏の邸宅に客となる。

茲に一行の恩人たるトーマス・レーキ・ハリス氏の事に關し見聞の次第を記す。ハリス氏は一八二二年英國に生れ、一八三五年十三歳にして父母に伴はれて米國に移住した。彼の父は貧しき一移民であつたので充分の教育を授けることが出来なかつた。彼は米國に渡るや否や、或は新開配達夫となり或は他家に雇はれた。而して其得たる金を以て書籍を買ひ、夜遅くまで勉強した。彼は十三歳から全く學校生活をしないで獨學したのであつた。而も彼れは三十歳の頃は巨然たる思想家となり、一個の新宗教を發見したのであつた。鼎君曰く

「ハリスさんの宗教は深遠な豫言で到底我等には奥義が解せられない。其教旨は瑞典スイランボルグの開創せる「スイデンボルゲン」に源因したもので、今の基督教を以て基督眞正の目的に反せるものと觀たものである……神は男と女の二つより成り、此世に黄金世界を樹立することが目的である……ハリスさんは日本の國風を愛し、森、鮫島等に會し日本の風俗民情を聞き、且現今の基督教に浸染せざるは日本及びアフリカの某州あるのみで、日本は今日に於いて其侵入を防ぐの計を講ずべきを説いていられた。ハリスさんの哲學は、印度哲學によく似ている」

ハリス氏は鼎君渡米の頃、アネニアという所に農場を所有し、鼎君は其葡萄園に苗木を作る労働に従事し、森君はベーカーの仕事を覚えケッチン働きをなし、そして日曜日には洗濯をした。

翌一八六八年(明治元年)ローレンス・オレフワント氏の母の紹介で紐育から三十哩ほど西方、ブラクトンという所に千五百エーカーの賣地あるを買収し、ハリス氏始め學生等はここに移住した。森はクック兼ハウス・ウオーク、長澤は牛飼ひミルク絞りを受持ち、時山に葡萄のステッキを切りに行つた。鼎君は此時より農業に關する智識を養つたのであつた。

◎森、鮫島等の歸朝

明治元年二月七日、晃親王及び三條實美、伊達宗城の議定官世界の大勢を察し、外交の急務に鑑み鎖國の舊習を排除し、各國公使を朝廷に參朝拜謁せしむべきを議し強藩薩摩、肥後、土佐、越前、長州の連署を以て朝廷に建白書を捧呈した。これより天下沸然として動揺し、堺の佛兵殺傷事件、英國公使一行殺傷事件、鳥羽伏見の戦、江戸城の攻収、東北の激戦等日本は内亂外交ともに空前の危機に瀕した。

此時ハリス氏神託を森、鮫島等に告げて曰く「日本帝國は今や國難の急にあり、二子速に歸朝し國事に盡すべし」と。ハリス氏は兩人に旅費を與へて急ぎ歸朝せしめた。時に明治元年六月であつた。(長澤鼎氏直話及森有禮傳に據る)

〔日米〕No.8876, July 20, 1924)

（十二）

長澤鼎君の事（ヲ）

梁山伯員の論争

森、鮫島歸朝の前後、ブラクトンには色々な日本人が尋ねて見えた。紅葉山泥棒事件の關係者であった村田、野村と名乗った二人も來たり、仁禮有池、久松の諸氏も尋ね來り働き且ハリス先生の教えを聞いた。一時は十餘人の日本人が此農園に集まり梁山伯の光景を呈したことがあった。

是等の壯年は世界列國の批評及人物の長短などを評論したが、或日のこと「若し日米戦は、何れに加擔する乎」という論題が出た。或者は戦鬪の際中立をままると言ふ者もあり、或者は米國を敵として戦ふべしといふ者もあった。そこで此議論の裁斷をハリス先生に求めた。此時ハリス氏は一同に告げて曰く「予は日米間に戦争は起らないことを確信する。然し若しありとせば我等は神の爲に戦ふべきである。我々は世界の公平と正義とにより其是とするものに與すべし。米國も日本も區別がない。唯神の命ずるところにより正義の爲に戦うべきである」

ハリス氏の所説はどこまでも世界的であった。併し日本壯士の胸はそれに満足が出来ない。どこまでも日本の爲めにのみ戦はねばならぬのであった。即日吉田、畠山、松村等は憤慨を洩らして此田園から去り、鮫島、森、長澤は此處に止まったので

あった。（村田、野村の義賊は依然ハリス田園に止まっていた）

○ ○ ○

森、鮫島が歸朝した明治元年六月は鼎君が十六歳の時である。彼れは同學生と別れて唯だ一人となった。彼れは引續きハリス氏を助けて農業にいそしみ且つ學業を修得した。

ブラクトンに於ける三年間は日本が王政復古の大業を完成し、將に世界に覇たらんとする大進運期であった。此間森有禮は米國に、鮫島は英國に公使として赴任した。時は明治三年十月五日（一八七〇年）鼎君十八歳の時である。

◎森、長澤の再會

明治三年十月、森有禮少辨務使を拜命し米國最初の公使となる。時に廿四歳、實にお若い公使であった。鼎君は十二月の雪を踏んで森君をワシントン府に訪ふた。此の時森は長澤に歸朝すべきを説いた。併し鼎君は遂に歸朝せざる事となった。鼎君此の當時を語りて曰く

「ワシントンで森に會ふたところが、彼れは僕に國に歸らんかといふ。宜しい今直に歸つて行かうかといふと、イヤ明年僕が歸るから一緒に歸らうじゃないかといふ。明年のことをいふと鬼が笑ふ。そんなら僕は日本に歸らない。生涯アメリカで暮すといふた。森は貴様は強情でいかんといふ」

まるで子供の喧嘩のようなことを言ひ合ふて別れたのであった。仲のい、友達はお互いに我儘を言ひ合ふものらしい。併し鼎君が「今歸るなら歸る。明年の事をいふと鬼が笑ふ」といふ

たのは彼れがハリス先生から受けた哲學らしい。こゝに彼れの單純無垢の眞面目が躍如として現れている。

彼れは再びブラクトンの農園に歸つて馬の頭を撫た。

森有禮はワシントン赴任の時、仙臺人新井常之進といふ者を帶同した。此の人は鼎君と共にブラクトン農園の客となり、後年加州移住の一行に加はり約三十年間フワントン・グロープの山莊に仙骨を養ふていた人である。其後日本に歸り今は鬼籍に入つた。

〔日米〕No.8877 July 21, 1924)

(十三)

長澤鼎君の事(ワ)

加州移住の経路

一八六八年(明治元年)ブラクトンに移住せるハリス氏等は居ること七年、また加州移住を企てた。一八七五年(明治八年)ハリス氏年五十二、長澤年二十三、ハリス氏老いたりといふべからざるも、ブラクトンの冬は降雪多く寒氣零度以下にくだるが故に寒氣身にしみ、農耕地としては理想的でなかつた。而して此當時加州は新たに大陸横斷鐵道を完成し(大陸横斷鐵道の完成は一八六九年五月十日、明治二年)加州人は盛んに其有望の新天地を東部に廣告せる時であつた。ハリス氏及び鼎君等は雜誌其他の報告によりて加州の有望なるを知り、一八七五年明

治八年)いよいよ加州永住の決心を堅め、必要な品物を買求めて荷造りし、一行の出發に先んじて移住豫定地なるサンタ・ロザに送り、住みなれしブラクトンの雪を踏んで大陸鐵道に乗り込んだのは二月半ばであつた。此一行の姓名左の如し。

トーマス・レーキ・ハリス、ミセス・リクワー、リクワーの男子(十一歳)、長澤鼎、新井常之進、五名

○ ○ ○

一行を乗せた汽車は西に走る。山川の風物すべて目新しく、シカゴ、オモハ、オグデンを経てネバダ州カーリンに着く。此處は汽關車中繼所で町は小さいけれども東部から來る移住者の動靜を報道するため、新聞探訪者が集まつていて、一行の來加を桑港に打電するのであつた。

此時桑港駐在帝國領事は高木三郎とて桑港最初の日本領事である。彼れは一行を迎へ色々の世話をしてくれた。一行は桑港に着くや、コスモポリタン・ホテルに投宿した(このホテルは其當時パイン街とモンガモリー街の角に在つた)。

一行はそれよりサンタ・ロザに到り、グラランド・ホテルに投宿しハリス、長澤は附近のフィルス・バーグに賣地あるを開き視察に出掛けたが、満足が出来なかつたので引返し、更にサンタ・ロザから三哩北方のファンテングローブに地を相し四百エーカーの山林附土地を買取した。この頃一エーカーの代價は五十弗であつた。

既に土地買取も首尾よく濟んだので、鼎君等はサンタ・ロー

ザのホテルから徒歩して買収地たる山腹に四室のバンガローを作り一方にはテント二個を建た。

それから同年七月本家屋及び厩の建築に取掛った。この頃建築に要する材木はガンウィル町から八頭立の馬車で運んで来た。そして同年十一月に家屋建築の事業を完成した。

この時ノース・ウエスタン鐵道はサウスリトを出発点とし、クロバゲルまで開通していた。農場のバンガローが出来ると否や、彼ら等は山林の開墾を初め大麦を蒔付け、牧畜業を始めた。鼎君は豫てブラクトンで學んだミルク絞りをなし、それをサンタ・ロザ及びファンテンの町に賣った。

一八七九年(明治十二年)ヨーロッパ殊にフランスでは葡萄の虫害があつて、その大部分の葡萄は全滅した。この報道を得たる鼎君等はこの地に葡萄を植付けることを有利と考へた。そこで支那人労働者を雇い入れて山林の開墾をなし葡萄を植付けたのであつた。それから三年の後に葡萄酒醸造所及び倉庫を建築した。

一年増しに農園は發達して來た。牛豚の数も殖え、馬も數十頭になり、一八九一年(明治廿四年)頃には農場の基礎も確立して來た。この二、三年ハリス氏は兎角身體が健康でなかつたので、同年紐育に向つて旅立たれた。鼎君この時からこの農場を經營し、一八九五年には續地千六百エーカーを買収して二千エーカーの大農場を作つたのであつた。この間鼎君の勤勉力行は常人の企て及ぶべからざるものがあつた。

ハリス氏がファンテン・グロープに土地を購ひ鼎君を兩腕として十六年間の經營は獨りファンテングロープの歴史を飾るのみでない。附近一帯にかけてのパイオニアとして、葡萄栽培家として加州の歴史に閉却すべからざる功蹟を残しているのだ。

〔日米〕No. 8878 July 22, 1924)

(十四)

長澤鼎君の事(カ)

在米邦人と鼎君との關係

鼎君は本國を出てから約二十六年間、日本人と交際する機会が乏しかつた。一八九一年(明治二十四年)珍田捨巳桑港領事として赴任す。鼎君は此時始めて日本人と交際し日本語を以て話す機會を得たのである。

珍田捨巳君(前英米大使伯爵)は明治十年佐藤愛磨(前米國大使)外二名と青森縣弘前に傳道していたイング氏の周旋でインデアナ州デボア大學に入學したことのある人だ。英語は頗る達者でよく書生の世話をやき名領事と稱せられた人である。鼎君が此頃から日本領事を知り興味を日本人にもつたのは珍田領事の吸引力が與つて力あるのである。此當時より彼れは領事館員、正金銀行——此頃は鍋倉直といふ人が桑港出張所主任——等と交際し、久しく忘れていた日本語をポツ／＼話すやうになつた。

〔日米〕No. 8879 July 23, 1924)

（十五）

長澤鼎君の事（三）

故國訪問の譚

「少小家を離れて老大にして回る。

郷音改むる無く髮毛擢く。

兒童相見て相識らず。

笑って問ふ 客は何處より來たると」。

【賀知章の詩】

三十三年間外國に生活し、在米邦人との交際稀なる鼎君歸朝の報は郷里の親戚を驚かした。彼れは少時家を離れたのであるから日本語は皆忘れたであらうといふので鼎君の生家磯長家では、相續人たる海洲君、甥に當る本田幸助君（現帝室林野局長官）を始め、令弟赤星彌之助君等協議の上、鹿兒島出身で英語堪能の人を選抜し、一同彼れを横濱埠頭に迎へた。一同が特別仕立の小舟で彼れを甲板上に迎へると「わや彌之助か」と令弟赤星君にむかつて第一聲を上げ、次いで磯長海洲君にむかつて「わや、おいどんを知つちよらんだらうナ」とやらかした。一同は面喰らった。皆目日本語を忘れていらる、筈の鼎君が昔ながらの鹿兒島辯を流暢に使用したので、通譯者も必要が無くなった。此逸話は今に郷里に残っているさうである。

〇 〇 〇

郷里の親戚及び先輩諸氏は久しぶりに鼎君が歸朝し、そして未だ無妻で居らる、から色々相談の結果、窈窕たる淑女を物色して縁談を申込んだ。所が鼎君には更に感激がない「おりや、すいこつが、うえから、おめはいらん」（おれは、する仕事は澤山あるから女房は入らん）取附く島もないほど、すげない返事。親族一同再び縁談を申出づる者がなかった。鼎君の權幕から察するに、若再びそんな面倒なことを言ふ奴は打斬られさうであるのだ。

鹿兒島健兒社時代の氣風は、青年が女に關係すると其社から放逐され、袋叩きに遭ふたものである。鼎君は健兒社時代に人となり其氣風を受けたまゝ、海外に出たのである。そして彼は物心を覺ゆる頃、ハリス先生の下に田園生活を續け社交界遊蕩の味は全く知らずに過ごしたのであつた。一言にして謂はゞ彼れは少年の純潔を破壊せず四十餘年を経過したのであつた。而して彼は七十三歳の今日と雖も健兒社の純潔を保っているのである。

私は此機會に於て鼎君が女に關する諸流説を略記し、其誤りの甚だしいのを訂正して見たい。

◎票君ロマンスの誤傳

日本の映畫劇に「長澤鼎成功談」といふのがあるさうだ。此劇は鼎君のロマンスを點綴し可なり空想を逞うしたものであるさうな。ロマンスの筋は鼎君が外國留學當時、藩中にて深く約

束した令嬢があつて、其令嬢は鼎君を待ちこがれているけれども、鼎君は歸つて見えない。親達は令嬢を無理やりに他の顯官に縁付けた。鼎君は外國でその事を聞いて失戀し、以來獨身生活を通してゐるというのである。

今一つは、今から二十年ほど前の流説である。それは鼎君が某白人と戀していたが、加州の法律では日白人の結婚が出来ない事を知つて、女の方で失戀の結果、身を投げて死んだといふのである。

尙一つの話は、明治四年岩倉公が大使として米國に見えられた時五人の若姫を留學生として連れて來られた。比中に山川捨松という姫があつたが、鼎君は華盛頓府に於いて此の姫を見染めて戀々の情に堪えず、意中の人として長く記念していたが、此の山川嬢は薩藩出身の大山巖大將に縁付いた。それを聴いた鼎君は失戀の人となり生涯を獨身で暮すといふ覺悟をしたといふのである。

私が鼎君及び伊智地君に質し、且つ當時の事情を考究すれば以上の諸流説は一笑にも値せざる無根の流説である。第一、鼎君國元出發の時は僅十三歳で、特に鹿兒島武士氣質の家に育てられた無邪氣の少年である。第二、岩倉公が米國渡航の際に同伴された山川捨松嬢は十一歳の少女である。而も鼎君は其噂を聞いたのみで姫さん達に會う機會などはなかつた。鼎君戀に關する傳説は調ぶれば調ぶるほど艶消しになつてしまふた。私の希望から申すと、其一説位本物であつて欲しいのだが、皆ウソ

だから止むを得ない。

〔日米〕No.8880 July 24, 1924)

(十六)

長澤鼎君の事(夕)

鼎君の産業

鼎君は曾て述べし通り、英國留學の初めには藩公から造船科を割當られたものであるが十五歳の時米國に轉居しハリス先生の下に人となつてから農業専門の生活を送つた。初めから造船が鼎君の志であつたか無かつたか、幼年のこと故、確きりとして居なかつたのである。而して總ての人は境遇に導かれて進化するものである以上は鼎君も長い間の田園生活が習性を作つて遂に殖産の人となられたのであらう。而して今彼れの事業を追懷して見ると大略下の如く現れている。

○園藝家として

彼が二十三歳の時、サンタ・ローザに移つてから最も意を用いたのは云う迄もなく葡萄栽培と醸造業とであつた。彼れは世界名國より新種の葡萄を取寄せて自園に植附けた。而して自らも諸種の改良法を考案した。

然るに茲に天祐といはんか僥倖といはんか、鼎君が移住の二年前頃からバーバンク氏がサンタ・ローザに苗木業を始めていた。此人は植物の改良家として今日世界の權威エヂソン氏と共に

に米國發明界權威となつてゐる人で、電氣界の泰斗と稱せられてゐる。鼎君はバーバンク氏と交際し、植物上の知識を交換し大に得る處があつた。

○養蠶の試験

一八九七年(明治三十年)第一回歸朝の時、彼れは農商務省に請ひ桑苗一萬本の輸送を取寄せ、これを自園に移植し、養蠶を試みた。加州に於いて養蠶の飼育は蓋しこれが最初であつたかも知れん。(此頃サンデゴの某白人が同所に於いて試育したことがあるが、泉哲君(米國法學博士)實見談によると、鼎君の方が少し早いと思はるる)

(因に記す。一八七一年(明治四年)長野縣人田中文藏君、米國に於いて養蠶業を企てんとして蠶卵紙を持參し渡米したが、航海中卵紙を海水に依つて損傷し遂に其目的を達する能わず、彼は其後支那人街に近きジャクソン衝に「達磨落し」「吹矢」等の遊戯場を設けたが何れも失敗し、後支那人教會のダウンセラの一室を借りて生活し、ミルク配達をなせしが其後の事跡は不明である)

鼎君の養蠶は可なりの成績を挙げ、日本産に劣らぬ生糸が出来た。一九〇二年(明治三十五年)上野領事に其生糸を持參して鼎君が領事官邸に見えた時私はそれを實驗したことがある。右の生糸は京都西陣に送り羽二重に織らしめた。立派な品物になつて、現に其絹布は長澤家に保存せられてあるのを見た。

○牧畜家として

鼎君は農場の基礎が確立するや家禽、家畜、牧畜の業に興味をもち諸種の改良を企てた。彼は特に馬正の改良に意を注ぎ、一八九五年(明治二十八年)頃から優良の種馬を、アフリカ及びヨーロッパから移入した。現今飼育するものはギヤマン・コーチ(肥大の馬)アラビア(競馬)サラビア(ボギー及び競馬)等が居る。そして附近の農家に馬正改良を奨励している。會て朝鮮模範場長本田幸助氏が渡米せられし時、鼎君は之に託して種馬及び種牛數種を輸送したことがある。

○殖民者として

彼が一八九七年(明治三十年)に企てた、墨國シナロア州土地買収の件は資金調達の不調によつて中止された。併し考へて見る。墨國最初の殖民事業家たる榎本武揚君は其翌年一八八九年(明治三十一年)に始めて十萬圓の資本金で墨國チャイバス州エスキンストラに殖民を始め、大失敗した時代であるから、鼎君が二百萬圓の資金調達の不調は實は當然の失敗であつた。同時に彼の慧眼が此時代に輝いていたことを想像し、嗚呼日本民族の海外思想の後れたることを嘆ぜざるを得ない。

〔日米〕No. 8881 July 25, 1924)

(十七)

長澤鼎君の事(レ)

鼎君の宗教観

鼎君の事蹟は知らず識らずの間に長く書くやうになった。私は本文に於て彼れの全傳を書くつもりでない。唯我等日本人米國移住の率先者として記録せんと考へたに過ぎないのであつた。然るに私が其事蹟の梗概を記さんとして彼の山莊を訪ふや、彼れは廿五年來の舊知を以て遇し、其將に湮滅せんとする事蹟を回顧し食堂といはず、書齋といわず、淳々として語り涼々として談ず。私は是を聞くに随つて興味大に起り、随つて聞き、随つて録すること四日二夜に及ぶ。併し彼れの事業と功蹟とは此の短日の間に記録し盡す能はざるを悟り、遺憾ながら尙一回で本稿を擱くこととする。

○ ○ ○

凡そ史傳に於いて現存の人物を記録せんとすることは至難の業たることを痛感した。何となれば、死後の人を録するは「死人に口なき」が故に當ツポ一の事を書くも、文句を申出づる人が少なきに反し、現存の人物を記録するに於いては姓名、年月、場所、事實等一字一句と雖も當ツポ一では通用しないからである。

事實に無頓着で、其人物を當ツポ一で品隲することは容易である。世の人物評論家は、其人を見ずとも、其事蹟の眞實を

知らずとも、噂を聞いても書ける。風彩を見ても書ける。是等の評論家は事蹟の眞を伝ふるよりも自己の直覺を表白すれば足りるのである。舞文羅織して其一點一角に直入すれば足るのである。而も私の記さんとする所は努めて自己の感興を殺して、事實の眞を描かんとするのであつた。愚人の事業たることは自ら甘んずる所である。

○ ○ ○

最後に鼎君の宗教を一瞥して見たい。鼎君は十五歳の時よりトーマス・ハリス氏の農園に人となり朝夕其風格に觸れた。私には其人格に觸れたとは言はぬ。或は人格に觸れたかも知れない。しかし、鼎君の語る所を玩味する時、私は彼れがハリス氏の全人格を了々地に悟入したと考へられない。ハリス君の處世は勤勉であつた。鼎君は之を學んだ。ハリス君の風格は單純であつた。鼎君は其素質に順應して之を學んだ。ハリス先生の宗教は鼎君しばく之を聞いた。而して之を學んだ。併しハリス先生の悟道と鼎君の悟道とは同じでない。それは當然必至の心理であらねばならぬ。

ハリス先生は人間愛、人間美に徹底した。然れども鼎君は人間美を知つて人間愛に徹底するの機會を得て居らなかつたと思われる。それは薩摩の健兒を作つた道德が日本人たる鼎君の血脈に遺傳していたからではあるまい乎。

産摩の健兒は人間愛に徹底していたに相違ない。彼等は戀をした。彼等は男と男と心中をする程戀の達人であつた。況んや

天の定めたる男女の戀愛に於いてをやである。併し人は年齢と境遇とに依つて自然に其の趣を異にする。鼎君をして戀を味はふの機會を等閑に附せしめたのは其年齢と境遇とが然らしめたのである。

鼎君は自覺によりて男女間の戀を抛擲したのであらう乎。或いは先天的に戀を味はふべからざる體質をもつたのであらう乎。或いは境遇と時代とが然らしめたのであらう乎。此研究は尙未來の研究として保留したい。

○ ○ ○

鼎君は常に近親の者に語りて曰く

「私は自分のからだは神の殿堂であるというハリス先生の教えを信ずる。自身が神の宮であるからそれを清潔に保存せねばならぬ。故に衣服は破れても清潔なものを着、食物も材料の如何によらず奇麗にしてたべる。それは我々が純潔を保つ所以である。私は教會に行かない。教會は私を清むる所だと信じない。私は他人の説を聞くよりも、自分自身を節制することに努める」と。

〔日米〕No. 8882 July 26, 1924)

（十八）

長澤鼎君の事（ソ）

長澤氏の家庭

鼎君の現住はファンテン・グローブの山腹にある見晴らしのよい所である。金儲け一點張りの人の建てた家でないことは往つて見ると直に分る。

家は四十九年前に建てたのであるが、昔ながらの頑丈造りで總二階廿室の大廈である。

建築は英國式である。どことなく古典的な、天井の高い廣々とした家で、ダイニングルームは五、六十人が一度に食事すべきほどのものである。トーマス・レーキ・ハリス君が此家を建てられた頃の加州は、新移民が見すばらしい家を建て農業を始めた頃であつたから、此山莊は近邊の注意を惹いたことであらう。鼎君に聞くと「ハリス先生は財産家ではなかつた」といはれる。併し一八六三年頃にハリス先生は紐育附近のアスカ・アメニア銀行を支配していられたところから考へると、我々の如き徒手空拳の日本移民の様なものでなかつたことが分る。

ハリス先生は一八六五年に紐育州ブラクトンに千五百エーカーの土地を買ひ、一八七五年に加州に移住し、ファンテン・グローブに四百エーカーを買ふた。其移住の年に新家屋を建築し、農場の開墾をなし、牛馬の家畜も買入れたのであるから、小資本では埒が明かない筈である。

ハリス先生は宗教家で詩人で哲學者であつた筈だが、斯の如き人間離れした人が如何にして金を持つていたか、我々には想像がつかない。

強いて想像すれば同伴して移住したミセス・リクワーという婦人が先夫の財産を所有し、それをハリス先生に提供したと考へられる。ミセス・リクワーは加州移住當時からハリス先生の内縁の妻であつた。

右様の詮索は鼎君の事蹟に關して當面の必要でないかも知れぬ。併し仔細に鼎君の事蹟を記すには閑却すべからざる重要事であるから一言その事に觸れて置く次第である。

鼎君は幼時純粹な日本武士の氣象を持參して英國に渡り、轉じて米國に渡つたのであつた。金勘定は武士の耻る處であつたから、長い間金のことは知らずに濟んだ人である。鼎君は私に話さるゝには「私は英國でも米國でも金の勘定をしたことがなかつた。金の計算を知つたのは四十歳以後だ」と笑つていられた。

尤も鼎君の金勘定の話はいくらか割引して聞く必要がある。何となればハリス先生は晩年事業經營には直接關係してない。鼎君のみ此農場を經營し、酒藏が焼けたり、葡萄が枯れたりしたことあつて、經營には随分骨を折られたことがある筈である。金勘定のへたな人がどうして此難局に立ち得るもの

ぞ。

長澤君の山莊には藏書八千卷、繪畫三百點其の他貴重な骨董品が數知れずある。ヘボな博物館以上の物が重積してある。長い間の蓄積であろうが成金連では迎も企て及ばざる意味の深い物がある。

私は鼎君の財産なんか數へたく無い。隣の寶を數ふるほど馬鹿なものはない。併し家庭の什寶だけは數へたい。

鼎君は甥の伊智地共喜君を子のやうに可愛がり、先年同君の妻を同藩梅田家から選んで今は幸助といふ孫分が生まれて四歳になる。此兒が頗る面白い兒で鼎君の幼時に頗る似ているといふことだ。私は本稿の終りに幸助のことを少しく書くつもりだ。

〔日米〕No.8883 July 27, 1924)

(十九)

鼎君後記(一)

小長澤の事II上

第一回到長澤君の山莊を訪ふたのは大正十三年四月廿九日であつた。サンタ・ローザの天候はまだ寒くあつた。

長澤鼎君の山莊はサンタ・ローザから三哩ほどの北方にある。

ハイウェイを右に折れ、ガムツリーの大木を左に見て登るのである。

山莊に着いたのは午前九時半頃であった。百草頭上無邊の春に紅白黄紫の花が咲き亂れて、馥郁の香ほりが吾輩の獅子鼻を掠める。チヨット詩になりさうだと感じる。

森閑たる家屋、靜寂なること禪刹の如しだ。

家には玄關が五ツほどある。家のめぐりをぐる／＼と廻つて見たが人影がない。

第三番目ほどの玄關を叩いた。楚々たる風の女性が現れた。私が姓名を告げて來意を述べると「この頃お出なさるといふことで、お待申てをりました。伯父は今日不意に用事が出來て桑港に參りました。まあお上がり遊ばせ」と申される。

此方が伊智地君の奥様だナと、電光石火の早業で領解した。すると、電光石火の知く一個の少年が現れて來た。彼れは田園生活に於て見るところのドングリパンツを着、口のまわりにチヨコレット・キャンデーの畫を彩っている。

私は伊智地夫人に誘はるゝまゝ、に古典的なパーラーに腰を掛けた。少年も其處に鎮座した。

夫人が私に茶をたて、下さる間に少年は私に話しかけた。

「おぢさん、どこから來た？」

「サン・フランシスコから來ました」

「おぢさん、今晚泊る？」

「泊るかも知れません。治らぬかも知れません」

「おぢさん鶯鳥を見せませうか」

「鶯鳥とは？」

「グー、グー、グーといふ白い鳥だ」

此幼年の日本語は實に流暢なもので、鼎老翁の日本語よりも數段上手である。

「おぢさん、鶯鳥を見ますか」

「ハイ」

「こちらですよ」

彼れは直ぐに私の手を取つて引ッぱる。

庭園には幾つかの圓形な泉水がある。花と、縁草と、果樹との間に曲徑が通じている。其中間を少年は私の手を握りながら進み行く。やがて第二の泉水の傍に來た。

「さかながいるよ」

蛙の兒が黒い色をして無數にをどり、小魚の泳ぐのが見える。

私は蛙の兒をさして

「あれは何ですか？」

少年は暫く考へていた。

「あれはフロッグのベビーよ」

彼れは斯く答へながら不安らしく私の顔を見る。

「全くですね、あれは蛙の兒です。その通りです」

少年の顔には成功の誇りが見えた。

「おぢさん、あっちに行こう」

彼れは鶯鳥のある所へ私を誘ふのであった。數十羽のター

キーが頓狂な聲をたて、周囲の同族に警告を發する。

「これは、ターキーの兒」

「……………」

「あれが鶯鳥だ。おちさん分かるか」

「はい、分かります」

前面のフェンスの中には鶯鳥や鴨がガガ、ググと音たて、我等の襲撃を防衛せんとする。恰も排日派が無心の日本人を理由なく恐るる如くである。私曰く

「あなたは、何といふお名前？」

「伊智地幸助」

「歳はおいくつ」

「四つ」

「あなたのパパさんの名は」

「伊智地共喜」

幸助は私を更に養鶏場に導くのである。オークツリーの木陰に建てられた幾つかの小屋を一々見まわり、卵の生んである箱からそれを取り出し、私に二個を持たせ、一つは自分をもって本屋の方に歩むのであった。彼れは社交術の大家の如く其態度が落つている。

〔日米〕No.8884 July 28, 1924)

(二十)

鼎君後記(2)

小長澤の事Ⅱ下

本家のまはりには色々な果樹が植られてある。櫻、梨、桃、蜜柑、グレブ・フルーツなど四十年ほどの古木の姿を示して立並んでいる。櫻の實はや、黄ばみかけており、グレブ・フルーツは地に落ている。

「奇麗なのが落ちていますね」と一つ拾ひあげる。

「あなた、それをたべますか」

「それはシクメンがたべる」

「あなたは？」

「酸っぱいから、砂糖かけてたべる」

相携へて本家に歸つた。

伊智地夫人はアイスクリームとケーキとを饗應せられる。幸助は私と向合ふてたべる。幸助の手はきたない。

「きたないお手々です」

と夫人はタオルを取りに行かれる。幸助はいふ。

「此のケーキはママが作った。むまいでせう」

「ハイ」

「此のアイスクリームは田中さんが作った。これはアイスボックスの中に入れておかないと、とけてしまうよ」

やがてグレイプジュースが出る。幸助は飲み且食ひ、そして

大活動を演じはじめた。先づ繻珍のソフワワーの上に靴のまゝで上る。それからマホガニーの椅子をひつくりかえす。無数に並んでいる書物を足でほん／＼蹴りまはる。暫くして私の傍に來た。

「おぢさんホースを見せようか、ポネも居るよ」

夫人と幸助と私は酒倉に伊智地君を尋ねべく連れ立って行った。幸助は砂利道を蹴飛ばしながら鼻唄をうたう。

「ハハン、ハハン、ハハハン」

酒倉とグレイプジュース倉とは道をはさんで並んでいる。倉庫の一方から伊智地君が現れた。

酒倉に入ると大樽、中樽、小樽が並べられて居る。樽の大きなものは一個二萬五千ガロン入りのがある。

モスケット、シエリー、ポートなど試味があつて少しく陶然となる。此倉庫には三十七萬ガロンの酒が貯へてある旨を語られた。

三十七萬ガロンといふと、随分長い間飲める。私が毎日一ガロンづゝ飲むとしても一千年間飲める勘定だ。こう勘定して見ると、此倉の中で千年程生きていたいやように思う。

○ ○ ○ ○ ○

うち連て庭園を散歩しながら前面を見渡せば、サンタ・ローザの田園、小丘、市街眼下に集まる。洵にいゝ景色だ。

幸助は走って犬と相撲をとる。車仕掛の噴水は太陽に映じて

芝生を照らしている。

幸助は此山莊の獨り兒である。毎日動物を友として遊び、遊び疲るれば眠る。王翰の詩を想い浮かべる。

葡萄の美味夜光の杯。

飲んと欲して琵琶馬上に催す。

酔ふうて砂上に臥す君笑ふ勿れ。

古來征戰幾人か回る。

○ ○ ○ ○ ○

一月後再び山莊を訪う。幸助は既に舊友の親しみが加わる。

鹿の兒を抱いて來て私に見せた。

嗚呼、兒供は田園に育てたいものだ。

○ 附近の古跡調べ

伊智地君の談によればサンタ・ローザ附近の墓に今から三十年前広島縣の某が眠つているといふ事だ。またクロバデルに於いて四十年前借地耕作をした邦人があるといふことを聞いた。鼎君訪問の序にそれ等の古跡を尋ぬる氣になり此山莊を辭してタウンに下り、防長屋という旅館を訪ふた。時に七月十九日。

（正誤）本稿第十六中「此の人は植物の改良家として今日世界

の權威エジソンと共に米國發明界權威となつて居る人で

電氣界の泰斗と稱せられて居る」とあるは「此の人は植

物の改良家として今日世界の權威となつて居る人で、電

氣界の權威エジソン氏と共に米國發明界の泰斗と稱せら

れている」の誤り。

植山保険君の自動車は危険の音をたて、砂利道を北へと走った。ロシアン川に行く道は悪い道だ。

此前リビンググストーンから植山喜代子さんのドライブでマンテカまで乗せて貰ふた。喜代子嬢はドライブの名人で、頗る學者である。併し美人のドライブはどうも梶がヘナクナする。尤も美人でもない西博夫君の自動車に乗ってヘナクナされた経験もあるが、私は自動車のヘナクナするのが大嫌いだ。命といふものが、それほど大切なものか否か其實は分らんが親先祖から大切だといふことを聞かされ、知らず識らず大切なものと思ふやうに慣らされたのであるから、イ、年をしながら未だに命が大切だと考へている。

然るに自動車のハンドルなるものは取りやう一つで崖にも落ちれば、先方の車にもぶつかる。飛行機の場合は空間が道路だから安心であるが、地上には道といふ馬鹿な筋があるので、梶が間違ふたが最後、大變なことになる。

植山先生は酒も召上らない方で頗るマジメの方であるし、極めて用意深くドライブをして御座るやうだが、天稟の技術が甚だ疑はしい。御所用のミシンはセキス、シリンドーの上等品であるが、三四年前の古物である。其歩行の響がダダダ——ダダと調子が變だ。丁度心臓病患者の脈の打ちかたのやうだ。屹度此旅行には一騒動があるに相違ないといふ豫感が臆病な私の胸をどきつかせた。

「すべてミシンは静かに使ふに限りませすな」といふ暗示を語

りながら、不安な気持ちで乗せられてゆく。植山先生の横顔のぞくと、ドライブの名人然たる色が歴然と見える。時々三十五哩以上の速度がメートルに現れる。

「すべての危険は急速力から起るやうですな」と又暗示をする。植山先生の顔は一層名人らしい風が見える。「困った人だ」と思ふていると、四十哩ほどの速度で飛ばし玉ふ。

遅かれ早かれ死ぬる命だと諦めて見た。

駄々々の音響が我々の音響に變ずる時、自動車は山腹のうねりくねた道を走しる。川を越えて左に折れて悪道をつたふて新屋君のキャンプに入る。

此處からロシアン川の野營場は五六丁の下方にある。

新屋婦人から道を教さはつて坂を下る。ハップス園を通り越して柳の森の川端に出る。

三々、伍々のテントが林間に見えた。愈々野營場に來たのである。私はホッと一息した。八十度の天氣は暑く感じない。しかし、脇の下から冷汗がにじんでいた。それはダダダの影響であつたらしい。

○ ○ ○

新屋六三郎君はこの川岸の畑を七十エーカーほど長い間リースしてハップスやら菓物やらを耕作している。夏になると同胞の避暑客が此邊に集まる。新屋君はテントも貸せば必要の食料も安く供給して御座るから、遊覧客には頗る便利だ。

〔日米〕No. 8887 July 31, 1924)

（廿三）
ロシアン川の雑感……（2）

林間の一角に夫婦づれの兒澤山の一組が、うまそうな香ほりをたて、飯を拵へていた。吾輩の一行は食事の準備がなかった。

出發前に防長屋の妻君は色々食事の仕度を世話せられた。然るに此の一行の連中は仙人のやうなことを云って、すべての準備を拒絶した。イヤ仙人でない。掠奪者の態度で其準備を抛擲したのであった。

植山君曰く「ナーニ向ふに往つたら誰か食ふ物を持っているさ」

彦山畫工曰く、「肴を釣つて食べるからい、さ」

私は昨夜から一本を懐中していたので度胸が据はっていた。

うまい香ほりのした兒澤山の一群は一安保險君であった。

奥様は大肌ぬぎの褌がけ、はだしのまゝで料理をしていらつしやる。

我等一行は一安君のテントの前に据はつた。懐中の一本は剝那に寂滅爲樂を告げる。

「どうも近來からだが勝れませんので二週間ほど前から此處にやつて來ましたが此頃は大に恢復しました」と一安君は言ふ。保險屋の癖にいのちが大切かしらんといふやうな顔附きをして彦山はにや／＼している。

一安君は俳句の名人だといふ咄が出る。俳句に就いて色々な皮肉も出る。一句いかゞです、といふ一安夫人の誘引がある。

そこで即吟、無期節、廓然無聖にまで話が進んで駄洒落のやうな句ゝ連發された。

◎太陽は黄色く見へて青葉影

（植山）

御夫婦の前で「太陽は黄色く見へて」といふのは随分皮肉だと思ふた。

◎モスケツト喉から鼻へ抜けにけり

◎柳千本中に亂るゝ子供かな

◎此川のニンフの色の黒きかな

（尺魔）

私の俳句はけりとかなが附かないと物足りませんと申譯をする。「老人だナ」と一同が笑ふ。

すると彦山君が變な手つきをして一句だか二句だかを書きつける。

◎日本人ガ、ロシアン・リバーデキャンプシテ居ル。是ハ墓場

デハナイ

（彦山）

こんなのが感句といふのぢやあるまいかと大に迷ふていと、植山君曰く。

◎小蝦つり馬鹿にならぬぞまたつれた。

「皆さんはどなたもおへタのやうですな」と私がいふ。

◎牽丸で蝦つらんかと思ひけり

◎ 蝦つりの男甚だレーザなり

◎ 娘の子川端で吾輩を輕蔑す

◎ ケリカナの議論熾なり柳下仙

◎ 奥様を前にひかへて句の自慢

◎ 文明にあいた人等のキャンピング

川柳の下で作る句が「川柳」なら、是の句は名實と共に「川柳」だと思ふ。併し私が以上の迷吟を連發する間に一行はあきれた顔して釣竿を携へて淵に臨んだ。彼等はロシアン・リバーの蝦を釣らんとするのである。

私はサンタ・ローザを出づる時十仙の肉を買ふた。蝦の餌にするためであつた。一行は糸に其肉をくゝり附けて岸邊の水中にぶら下げる。

ロシアン・リバーの蝦は天下の名物である。此の蝦は其髻の長さ身の長さと同じく、其八本の足の先頭には大なるハサミを持ち尻尾には獲物を絞め殺す無數の爪を持ち、眼は出づ入らず。直進後背自由に泳ぎ其形状の莊嚴なること言語に絶す。史を按ずるに此の蝦は曾てロシアン・ジューが加州に移住したる頃、シヘリアの黒龍江より携へてこの川流に移植したるものにして時は正に千八百二十年日本は仁孝天皇の文政三年、徳川家齊の時代といふのはウソのやうだ。

想にこの蝦はソノマの海岸にありし蟹がロシアン・リバーに移住して長い間に右様の形に進化したのである。シベリアから移殖したものとは思はれない。この事件については近々スタ

ンフォード大学のジオルダン博士に聞いて見るつもりだ。

〔日米〕No. 8888 August 1, 1924)

(廿四)

○ロシアン川の雑感……(3)

植山、彦山兩君等が蝦釣りをしている間に、私は一安夫人に胡麻をすって中飯をばくついた。飯の中に少々砂が交つていたが、だまって頂戴した。可なりの辛抱である。「御飯は澤山ありますから、どうぞ召上がつて下さい」と一安夫人は親切にいふ。ハイありがたう「どうぞ砂のないところを今一膳」と口に出さうなのを嘔み殺し二膳いたゞいた。御飯に砂があつても盲腸炎にならないといふ講釋を嘗て某ドクターから聞いていたので、嘔まないで飯を呑み込んだ。旅は辛いものだ。釋迦如來様は飯をたくことを知らないで、こんな目に度々おあひなされた事であらうと思ふた。

◎親切や砂の交りし飯の味

自ら古今獨歩の名吟なりと喜んだ。

○ ○ ○

「オーイ、釣れたか？」と岸上の一行を呼ぶ。返事がない。「オーイ、釣れたかよ」と岸上の連中を呼ぶ。返事がない。ふうちゃんは、イカダに乗って遊んでいる。ジョーチは泳いでいる。隣りのキャンプの奥様は蝦の角がら焼きして御座る。

飢さうでも飢死にせぬところが所謂生物の値打だと見える。
(七月十九日)

〔日米〕No. 8889 August 2, 1924)

(廿五)

田中鶴吉君の事……(一)

國出發の事情

田中鶴吉君は嘉永五年五月五日江戸に生れた。長澤鼎君が嘉永五年二月一日生れと對照して三月ちがひの弟分にあたるのだ。

彼れは慶應年間に設けられた米英兩國公使館がまだ假住まひの頃に江戸(今の東京)に人となつた。彼れは十四歳の春、米國公使タウンSEND・ハリスの通詞久助なる者と知り合いになり、米國の事情を聞いて興味を湧かせたのであつた。

當時英、米兩國とも其通詞は曾て漂流民として米國に渡つたことのある日本人を使用していた。英國公使は高輪の東仙寺に寓居し、米國公使は麻布の善福寺に寓居して公務を執つたものである。

(因に記す、英國公使は其後御殿山に移轉し有名なる燒討事件の歴史を残した)

英國公使附の通詞は紀州人彦藏(此人は安政年間米國に漂流した人)それから米國公使附の通詞が久助といふて同じく米國

漂流者であつた。鶴吉君が外國事情を教わつたのは久助先生であつた。

彼れは久助から米國の事情を聞き、其自由と寛大と文明とに憧れた。何うかして米國に渡りたいと兒供心に念じていた。

〇 〇 〇

此頃横濱にベーン・リユーといふ英國人が居留し、外國行密航者の周旋をしていた。ベーン・リユーは外國密航を企つる者の便宜を計り、船員に口入れしたり、婦人で支那南洋等に赴く者をも周旋していた。一種のポン引であつた。

鶴吉君は右のベーン・リユーを尋ね、米國渡航の目的を告げ、其周旋を頼んだ。時は慶應二年四月(一八六六年)鶴吉君十四歳の時であつた。

ベーン・リユーは鶴吉少年に向つて曰く、

「米國の船は缺員がないがオーストラリア行の帆前船にボーイの口がある。あなたはそれに乗って船便を求めると米國に行けます」

彼れは米國が何れの方角か、オーストラリアが何れの方角か素より知らない。唯其船に乗りさへすれば自然米國に流れ着くものと思ふていたのであつた。

「宜しいお頼み申します」
と答へて英國帆船「柳十三番」といふ名前の船に乗ることにした。

當時の日本は開國、鎖國の兩派が火花を散らして戦ふた頃と

て幕府は海外渡航者を取締る暇がなかった。或意味に於て横濱は外國人の實力に握られていた形であつた。慶應二年頃の横濱倉庫はすべて西洋人の手に依りて經營せられ、日本人の倉庫は其附近鴨井宿に少しばかり設けられたに過ぎない。海運業は英、米兩國船が獨占したものであつた。

鶴吉君はいよゝ「柳十三番」に乗り込んで濠洲さして太平洋に浮んだ。

茲に當時英國商船が日本に輸出せる積荷を記して見ると砂糖、タバコ、時計、ナイフ、小銃、毛織物、硝子細工等で日本から積出す品物は塗物、傘、提灯、生糸等であつた。横濱には巨商「天下の糸平」が幅を利かしていた頃である。

(因に記す、鶴吉の父は旗本田中馬之助といふ)

〔日米〕No. 8890 August 3, 1924)

(廿六)

田中鶴吉君の事……(2)

布哇に於ける一年

田中鶴吉といふ旗本の兒を乗せた帆前船「柳十三番」は一ヶ月ほどでオーストラリア洲シドニー港に着いた。彼れは始めて外國の地に足を踏んで見たが、大地は同じい大地で日本と變りはない。太陽も東から出で、月も同様である。外國にも男と女がある。彼れはシドニーに渡つてから始めて外國の外國たるこ

とを本國と同様なるを悟つた。

「柳十三番」はシドニーに一ヶ月ほど碇泊し、それから布哇に向ふた。時は慶應二年七月である。

○○○○

彼れが乗込みたる「柳十三番」はシドニーから鯨油、グワム島から鳥糞を積んで布哇に向ふた。此當時、鯨油及び鳥糞等の市場は布哇島ホノル、が集散の市場であつたのみならず、太平洋上の産物は大概ホノル、に集まり、此地に於て諸外國商人と交易したものである。

當時の布哇は英國の勢力範圍で米國人は未だ同島には何等の設備がしてなかつた。英國と布哇とは傳統的な親善國であつた。此關係は千八百六十七年(慶應三年)まで繼續していたが、茲に覇を争う一國が現れて來た。それは北米合衆國である。

北米合衆國は建國以來長足の進歩を遂げ、一八〇三年ルイジアナ地域を佛國より買取り、合衆國の領土に加へ其面積二倍以上となり一八四五年テキサス州を加へ、一八四八年米墨戰爭の結果、ニューメキシコ及カリフォルニア州を領有し、サン・フランシスコ港は太平洋經略の策源地となつた。斯くの如く膨張して止まざる米國が何ぞ鼻先にある布哇經略を等閑に附せんや。米國の健兒は早く既に布哇島に着眼して續々同島に渡つたのであつた。

米國の勢力が布哇に加はつたのは諸種なる原因がある。而も其第一は地の利を得ていることである。更に人の和を増進すれ

ば英國の勢力を驅逐することは容易であった。此時、人和の妙機を握るべき一事件が発生した。それは米國人と布哇人の娘と離婚したことから始まったのである。

米國のヤンキーと布哇娘と結婚して生んだ兒は頗る美人であった。此美人が生長して十四歳の時、布哇國王カメハメハ二世は此雜種娘と婚した。米國人の血統は布哇國王の後宮に入ったのである。

米國の勢力が布哇に延びたのは國王カメハメハの妃が米國人の血統なるが故に然りと斷ずることは素より出来ない。併し、米國人——特に米國の宣教師——が宮廷に出入し先づ國王はじめ布哇土人に布教の便宜を得たことは想像に餘りある。斯くして米國の健兒は寶さがしの爲めに太平洋を渡るもの續出し、布哇を踏臺として諸方面の經略を行ふた。

鶴吉君が布哇に渡つた頃は同島に日本人の影を見なかつた時であつた。彼れは「柳十三番」から離れ、船長の紹介でホノル、在留英國商人ダンソン氏の家庭に住み込んだ。

彼れを乗せた「柳十三番」は布哇から英國に向つて去つた。彼れはダンソンの家庭に學僕として約一ヶ年を過ごしたのであつた。

彼は布哇の小島に長く止まることを欲しなかつた。國元を出るときは米大陸に在つたのだ。如何にして米國に渡るべきや、彼は常に其志望を小さな胸に抱いていたのであつた。

〔日米〕No. 8891 August 4, 1924

(廿七)

田中鶴吉君の事……(3)

米國へ上陸す

布哇の一ヶ年は夢の如く過つた。彼れは愈々米國へ渡航する機會を捕へた。

此頃米國は太平洋上の航海事業に向つて英國と競争を試み始めた。オシヤニック・パシフィック汽船會社は新造船ネブラスカ、アイダホ、ネバダの三艘を太平洋上に浮べ桑港を起點とし布哇、新西蘭、濠洲間の航海を始めた。便船を待ちもうけていた鶴吉は慶應三年七月布哇に寄港せるネブラスカ號乗組の運動効を奏し、同船々長バーデン氏のボーイ(小使)となつて濠洲に向かつた。

同年十月ネブラスカ號は歸路再び布哇に立寄り、十一月上旬無事桑港に着いた。我鶴吉君は直に陸上に飛上つた。

彼は桑港上陸早々船長バーデン氏の紹介でバック・エンド・ヘット製靴會社々長ヘット氏の家庭に學僕として働くこと、なつた。此の人はジャーマン・ジュエで事業家並に富豪であつた。鶴吉君は此家庭を第二の古郷とし、ヘット夫婦また我兒の如き愛を鶴吉に濺いだ。彼れは一ヶ月十五弗の給料で修學の傍まめしく働いた。

此當時桑港に日本人の經營せる美術雜貨店が一軒あつた。然しその持主は何人であつたか鶴吉君は名前を知らないといふ。

此店はマーケット街とモンガモリーの角なるメソニック・テンプルの下層にあった見すばらしい店であったが、何時の間にか閉店したといふ話である。

明治元年から明治四年頃には桑港には十二三人の日本人しか居らなかつた。其人々は水夫上がり或は亡命者等であつた。學生としては奥州人佐藤百太郎、横濱神風様の長男山口仙之助、會津白虎隊落武者が二人、明治二年獨逸人スネールが移入した第一移民には柳澤佐吉夫妻（信州人）松五郎及國之助といふ人々があつた。——（尺魔曰く……會津白虎隊の落武者二人はスチールが移入せる連中ならん）——それから明治三年頃に米人テラーに連れられて來た赤羽根忠右衛門が居た。

明治四年頃日本人の集合所がステベンソン街に出來た。此集會所は安直な一軒を借、勞働の餘暇を寄り合ふて雑談したり、米の飯などをたべたりした。之が日本人集會所の始めであつた。福音會の創立者たる美山貫一君は明治六年頃に此集會所に時々見えた所から察すると此の時代の渡米者である。

或日この集會所の話題が大に賑ふた。それは日本から岩倉といふ大使が百餘名の同勢で桑港に乗込むといふ噂である。

岩倉大使一行は明治四年十一月十二日横濱を發し、同年十二月六日桑港に着。ニュー・モンガモリー街なるグラント・ホテルに投宿せられた。

此の時の正使は右大臣岩倉具視副使は參議木戸孝允、大藏卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尙芳等であつた。

外に随行官四十八名、留學生男女合計五十四名。

〔日米〕No. 8892 August 5, 1924)

（廿八）

田中鶴吉君の事……（4）

岩倉大使の諭示

大使一行がグラント・ホテルに投宿され、市民に向つて公式の演説が濟んだから在留日本人に面謁を許された。鶴吉君は一群の日本人と共にホテルの應接間で大使に面謁した。此時大使は「其方等は早く米國に渡つたので日本の事情は知るまいが、日本は今や王政復古となり、之から智識を世界に求め、盛んに經綸を行ふべき時代となつた。其方等は身に一藝一能を覺え早く本國に立歸れよ。歸朝の上は重く用ひて遣はずぞ」と言はれた。一同は感激して座を退いた。

鶴吉君は此時より米國の諸藝を身に學び本國に於いて活動しやうと決心したのであつた。

○鑛山に致る

彼はヘット氏の家庭に七ヶ年の歳月を暮らした。彼れは一日も早く社會に活動を始めたい志念が動いて止まない。明治六年（二八七三年）遂にヘット氏の家庭から飛出すことゝなつた。彼れはネバダ州ヴァジニヤ鑛山に向つて旅立つたのである。

彼れ思へらく「鑛山事業は日本は甚だ幼稚である。此事業を

覺えて日本礦業界に勇飛して見やう。併し若輩が不知案内の他州に飛込むことはヘット夫婦が反對するに相違ない。寧ろ目的を告げずして此家を出づに若かず」と。即ち無斷のまゝ、ヘット家を飛出したのであった。

彼は少許の旅費を懐中にして、働き先を出でセントラル・パシフィック鐵道でネバダ州に入り、ヴァジニア鑛山に辿りついた。さて鑛山事務所に到り働き口を求めたが、鑛石採掘の仕事はすべて外國人を使用し、日本人を入れてくれない。彼は大に失望した。

こゝに止まること數日ですぐと鑛山から退き、リノ市にまで歩いて來た。こゝにも足を止むる便宜がなかつたので、桑港に歸ることに決心した。しかし彼は懷中に餘すところ五十仙であつた。

そしてシエラ・ネバダの山嶽を徒步して越ゆるか或は鐵道の飛乗りするの外はなかつた。或時は荷車の中に隠れて、或ときは歩いて四日目に桑港に着いたのであつた。鶴吉君は當時の事を語つて言ふ。

「私がネバダ州に参りました頃同地に日本人などが居るとは思へませんでした。不思議にも鑛山に一人の日本人の賣春婦がをりました。此婦人は何れから來たか、何人に連れられて來たかよく分かりませんが、多分水夫に連れられて來り、其の水夫は附近に働いてをったと想像されます。」

○アラスカ行

其年(明治六年)はネバダ行の失敗を取返すために、又候ヘット氏の家に働いた。併し彼れの遊心禁じ難く翌七年アラスカ行を企てた。

アラスカの鮭罐詰事業は此頃既に盛大であつた。彼れはその募集に應じ支那人夫に混じてアラスカ漁場に赴いた。居ること四ヶ月にして桑港に歸航し、それからアラメダ郡アラメダの天日製塩所に働くことになつた。

○鹽濱入り

明治七年ごろアラメダ鹽濱に日本人が割込んで働くには可なりの面倒であつた。鶴吉君は鹽濱に入るには色々の運動をしたが、効を奏せなかつた。そこで桑港最初の日本名譽領事ブルークス氏に請ひ其の運動方をたのんだ。ブルークス氏は鶴吉君のために鹽濱の持主及び監督を紹介してくれた。それで同年八月いよゝゝ鹽濱に働くことを許され、彼は勞働者として製塩の仕事に従事することゝなつた。是ぞ後年鶴吉君が日本に於いて製塩事業を企つる濫觴となつたのである。

〔「日米」No. 8893 August 6, 1924〕

（廿九）

田中鶴吉君の事……（五）

十六年目の歸朝

鶴吉君は四年間アラメダの塩濱に働き天日製塩業はお手のものとなった。岩倉大使から諭示を受けた一藝一能を覺えたので歸朝の機會を待っていた。

明治十四年夏、東京北辰社々長前田喜代松氏種牛仕入れのため桑港に上陸し、時の領事柳谷謙太郎君に通譯者一名雇ひ入れを依頼した。鶴吉君即ち選任されて前田の通譯者となった。是より彼れは前田の信任を得、種牛七十五頭を買ひ、同年十二月前田と共に歸朝した。

歸朝に先だち鶴吉君は自己が數年間學び得し天日製塩事業を日本に於いて起すべき企てを前田に告げ其後援を請ふ。前田は快く承諾した。

○製鹽場の探見

鶴吉君は歸朝後製鹽場の探見を行ふた。日本内地はもとより、四國、九州、北海道にかけて約一ヶ月の調査を行ふた。しかし、天日製塩に適する地を發見し得なかつた。此上は琉球が小笠原島を選ぶの外なしと考へ、前田に會して其希望を告げ、相携へて由利東京知事を訪問した。由利知事は其目的を壯とし、出來得る限り便宜を與ふべきを約された。そこで先づ視察の爲めに單身小笠原島に渡つた。時に明治十六年三月。

彼れは小笠原群島の父島に到り、勸業課長武田正治氏の紹介により島長藤森國高氏を訪ひ、各島を視察したが、鴛島といふ無人島こそ製塩に適すべき地なるを相し一島貸下げの運動を起した。此請願は前例なきを以て可なりの困難であつたが、將來國產獎勵の爲めとあつて遂に鴛島全部の貸下げを許可せられたのであつた。

彼れは鴛島貸下げの許可を得るや諸般の準備に取掛つた。先づ前田喜代松氏に請ふに牛、豚、雞、大豆二俵、半ヶ年分の食糧、大工道具を以てし、其承諾を得た。

○小笠原島移住

明治十六年十二月、鶴吉君は花房某といふ青年と同伴し、東京小網町回船問屋戸竹氏の帆船に乗り込み日本内地を離れた。

小笠原群島中の父島に着いたのは十二月下旬であつた。

小笠原島は大小十三の群島である。其島の名は家族的名稱が附いていてなか／＼面白い。曰く父島、母島、姉、妹、弟、姪、婿、媒、嫁島等である。

彼等の一行は父島から官船に送られて婿島につき、井戸を掘りて水を得、海邊の流木を拾ひ集めて小屋を建てた。最初は土地を開墾し農作物を蒔付け、食料を作り且畜産の業を起した。此島には翌年製鹽所を拵へ而して色々の試験を行ふて見たが、氣候が適せざる爲め遂に失敗に終つた。併し家畜はだん／＼殖え、二年にして羊豚數百頭に上り隣の嫁島に分場を設くるに至つた。

〇〇〇

明治十八年七月、民情視察のため侍従を小笠原島に差し遣はされたことがあった。此時小泉海軍少佐は鴎島に訪はれ鶴吉君に面會した。この夜風大に起りしたため小泉少佐の一行はこの島に一泊した。

時事新報紙上に「忍耐起業出世鑑」を連載し鶴吉君を「東洋のロビンソン」なりと紹介したのは小泉少佐であった。これより田中鶴吉の名天下に鳴る。

新聞紙上、田中鶴吉の孤島生活が現る、や、血氣の青年にして渡島を企つるもの漸く多く、先づ千葉縣人塚本松之助、新潟縣人富山駒吉等を始めとし、我もくとこの島さして集まるものが加はった。併し悲しいことには智島も嫁島も多くの移民を容る、には狭小であった。

〔日米〕No.8894 August 7, 1924)

(三十)

田中鶴吉君の事……(六)

再び米國へ渡る

鶴吉君が志した製塩事業は、小笠原島に於ては失敗に終つた。彼れは其失敗に落膽せず、轉じて畜産業に勵んだ。けれども島があまりに小さい。製塩事業ならば此島で充分であるが無數に殖える羊豚牛馬は此島では埒が開かない。

そこで常に想起するのは米大陸であつて山野は無限に展開している。人口も甚だ稀薄である。殖産の業を起さんとせば宜しく米國に渡るべきである。

斯く考へた彼は明治廿年福澤諭吉先生に面會し、米國に於いて土地買収の獻策をした。海外の事情に精通し日本當代の先覺者たる福澤先生は鶴吉君の獻策を容れ、門人井上角五郎氏を同行せしむる事とし、資本金三千圓を中村道太氏より出すこと、なり小笠原島にある塚本松之助、守田某も一行に加はり、米國郵船サンバプロ號に搭乘し、桑港に着いたのは明治廿年六月二十八日であつた。

鶴吉君の一行は、直に土地の選擇にかかり、ヴァレー・スプリングに二十英加の土地を買ふこととし、第一回の拂ひ込みをなし開墾に取かゝつた。然るに此土地は地券の間違ひより紛議が起つて、遂に放棄することとなつた。井上角五郎氏は再學を謀るため歸朝し角五郎が横濱に着するや否や金玉均事件に連座せる國事犯人として捕縛された。そこで同志は解散の止むなきに至り、塚本、森田はサンノゼ方面に往き、鶴吉君は桑港に留まりてオヒユム劇場の掃除人となつた。

彼れがオヒユム劇場に働いたのは明治二十年の冬であつた。彼れは此時より獨力にして持久すべきを悟り、健康の體力を以て仔々窮々としてオヒユム座に働くこと三十六ヶ年に及んだ。彼れは明治三十三年、ツインピック山腹に住宅を購ひ、又ネバダ州に二百二十英加の土地を買ふている。而して其住宅の建

築及庭園は自ら作ることにして蓄積努力の跡が刻されている。彼れの前半生は波瀾万丈であった。其後半期は重厚沈着であった。

彼は天稟強壯の體格を持ち勞働力行を以て生活を貫かんしている。如何なる日と雖も勞働せざる日はなく如何なる苦力と雖も辭するところなし。彼の邸宅はツインピックの山腹で、此處に至るには電車の行き留まりから三町ほどの急阪がある。此山に登るは壯年といへども容易でない。然るに彼は廿五年來、朝夕此急阪を登ること鹿の走るが如く、數十斤の手荷物を抱て平氣である。

彼は常に人に語りて云ふ。「私は金に對して執着を持たぬ。金は世間に澤山ある。欲しくば働いて取るまで、」

元田良山（肇）一日彼を問ふ、彼一枚の白紙を展べて揮毫を乞ふ。書に曰く。

「羨むな金は世間に預け置く。ほしくばやらう働いて取れ」
彼の生涯はこの一篇の歌に縮圖されているやうだ。

○ ○ ○ ○ ○

彼は明治廿年、名村五八郎の女シズと婚す（名村五八郎は千八百五十四年安政元年、最初の使節新見豊前守の通詞として米國に随行せる人）二男四女を儲け孫數人ある人懨懨として青年を後へに瞠若たらしむ。

（以上の談話は本人及び同行者塚本松之助の直話に據る。一九二四、八、四、記）

〔日米〕 No. 8895 August 8, 1924

（卅一）

鶴吉君餘録

食堂の談笑

田中鶴吉君の事を記し終つて後一日、日米社の食堂に社同人諸君と晝飯を共にす。茲に予は予の立場を明かにす。予は日米社に於いては一種の居候也。蓋し居候なるものは三杯目にはソツと出すを以て法則とする由川柳の句に見ゆ。然れども予は未だ曾て日米社の食堂に於いて二杯以上の飯を盛りしことなきを以て居候としての遠慮を覺えたること無し。

且夫れ苟くも居候たるものの御飯に臨んでや必ずお神さん乃至お三どんなるもの、傍に控へ其三杯目の御飯に遠慮を促すべきものなるにも拘らず、日米社の食堂は居候に禮を缺き、一人としてお給使用するものあらず。予の如き二杯以下の腕敷を以て御飯に満足するものにおいて其少量を喜ばるゝの機會なきを残念とす。

○ ○ ○ ○ ○

予は日米社の食堂に入ること五尺七寸の身長を五尺位に縮め、先づ大膳職の許に一枚の皿を出して若干の肉を乞ひ、次に棚に陳列せる食碗と小皿と竹箸とを取りて隙間をねらひて腰を下す。卓上には一個の飯櫃と大皿の香の物と、一瓶の醬油と茶

瓶と備付けられてをり、その座席の如きは早い者勝ちにて一定せず。全く移民地の移民宿にして日本にて申さば木賃宿の如きもの也。

此食堂に集まるものは社同人にして我等の如き居候は希に割込むが故に其恐縮するも亦故なきにあらず。

食堂の最も賑ふは晝食にして、珍味も亦晝食を最上とす。予は嘗て朝食に臨みたることあるも、其コーヒーの衛生的なるに驚きて屢々參列せず。

○ ○ ○

晝飯の食事は酣なるとき、予は縮みながら卓の一隅に座す。傍に數個の令婦人あり。數十個の紳士あり。清肅温雅チユーの音もせず、ガタの聲も聞えず。予は自ら我耳の聾せるにあらざるかを疑ふ時に一角に聲あり。

「田中さんと奥さんとの寫眞は随分距離が遠いやうですナ」

「あれは寫し手がヘボなのよ。苟くも夫婦たるものが、あんなに離れている譯はないサ」

「元來夫婦といふものは集まるを以て法則とするものだ」

「寫し手がヘボやナー」

更に一方に聲あり。

「あ、居たから、あ、寫したのだ。どんな上手が寫しても、そのまましか寫らんでや」

滿堂の食客哄然として笑ひどよめきたり。予曰く

「諸君は何歳ですか、恐らく諸君の中、七十二歳なるものは無

いであらう」

クス／＼の聲、婦人の間に聞ゆ。滿堂の視線予に集まる。

「諸君は七十二歳になつてから七十二歳の夫婦のことを論じ玉ふべしだ。諸君は今や最も夫婦なるもの、興味をもち玉ふ時である。凡そ夫婦なるものは離合集散其處を得ること猶日月星辰の如くである」

滿堂の食客箸を投じて又大に笑ふ。予曰く

「ベーコンといふ學者の言によれば、妻は若き人には主婦、中年の人には朋友、老年の人には看護婦であると」

「ベーコンとはハムの兒分ですか」といふ者あり。

「ベーコンもハムも共にポークの兒分だから兄弟分だ」といふ者あり。滿堂又哄然たり。

○ ○ ○

田中鶴吉夫婦はともに武士の家に生れている。併して日本舊來の道徳によれば「男女七歳にして同席せず」また「夫婦別あり」といふて男女間の道徳に關しては頗る嚴格のものであった。彼れ等はこの舊道徳を墨守して今もなほ家庭を保ちつゝ、あるであらう。新しい外國風の習慣が正しいか否かは我等の遽に斷言し得ざる處である。夫婦撮影の距離のや、遠きは此理によるものか知れぬ。

〔日米〕No. 8896 August 9, 1924)

（卅二）

高橋是清君の事……（一）

附たり富田鐵之助、高木三郎、勝小鹿、鈴木知雄

田中鶴吉君が桑港に上陸した慶應三年の歳に高橋是清君——曩の總理大臣——現政友會總裁——は桑港に渡つたのであつた。彼は慶應二年十三歳の時、英學を修むる爲め横濱外國商館のボーイとして働いていたのであつた。然るに翌慶應三年其頃江戸川に於ける軍艦奉行勝安房氏の男小鹿（十三）が米國に留學することとなり、同伴者として仙臺藩から富田鐵之助、庄内藩から高木三郎が選ばれた。此時是清君は當時同じく横濱に英學を勉強していた同藩の鈴木知雄氏と共に此一行に加はることを許され、同年七月廿四日米國飛脚船に搭乘して米國桑港に渡つたのは八月廿日頃であつた。

仙臺藩では是清君と知雄君のために、曾て各藩に鐵砲賣込に従事したる米國商人ヴァンクードに渡米後の保護監督方を頼んだ。

是清君等は桑港に着して後勝小鹿、高木三郎、富田鐵之助等と別れた。右の三人は桑港からパナマ地峽を経て紐育に入り、更にボストンに到りノースリップ氏につきて英語の研究をした。

是清氏等は其頃桑港にありし仙臺藩の脱走者太技某、一條某（すべて偽名ならん）田中鶴吉君の譚り中白虎隊の落武者とある

は此二人をさしたものと考へらる）の下宿を辿りて世話になつていたが、是等の人々も無資力の素浪人であつたから何時までも厄介になるのは心外だといふので、愈々ヴァンクード老夫婦の家に引取られた。

ところが此のヴァンクード老夫婦といふのが「三・莊・太・夫」の傳説に書いてあるやうな悪者で、學校に通はせるところか朝から晩までコキ使ふ。庭の掃除、屋内の雑事から炊事の手傳ひ、皿洗ひまでやらせられ、食事は飢を凌ぐに足らなかつた。本國から送附すべき學資は何うなつたのやら分らず、毎日奴隸のやうに使はれるのみで前途は暗澹たるものであつた。そこで反抗心の強い仙臺人は頗る憤慨した。この鬼夫婦に楯ついて寧ろ追出されるのが幸福だと思ふたので、熾に皿鉢ストーブに當りちらした。

是清君後年當時の事を語りて言ふ。

「何だか分らんが、お腹はすく用事は多し、學問は出來ないのでムシヤクシヤすることが多いので、どうか此の家を出てやらうと思ふたが、仙臺藩に出入した米國商人で我々のの上を思ふ筈の老夫婦だと思ふて夜中泣通して辛抱する氣をふり起して見た。けれども大切の學問をさせてくれない。まるで日本の丁稚奉公以上で情も血もないのだから吾輩も憤慨のあまり、色々な器物に當りちらした。尤も器物に當りちらした所で、器物が反省する譯もないが老夫婦は極めてケチンボであるから器物をこわしたら何かの反響があるかと思ふて

やった仕事だ」

果せる哉器物破壊の反響があった。二ヶ月ほどたつと、老夫婦は是清君等と呼んで申渡すには「お前達はオー克蘭ド市の金持ちでブラウンといふ家にこれから働く事にきめたから彼方に行くのだ」といふ。是清君は其亂暴の効果が現れたり喜んで、手荷物をさげて對岸なるオー克蘭ド市に移轉した。

此ブラウンといふ家はオー克蘭ドの富豪家で老主人は當代の政治家であつた。是清君が此家に移轉した時は、主人老夫婦は華府に旅行中であつて、家には若夫婦が居り、支那人が料理人、コーチマンが愛蘭土であつた。

〔「日米」No. 8897 August 10, 1924〕

(卅三)

高橋是清君の事……(一)

奴隷に賣られたのだ

オー克蘭ド市のブラウン家に移つてからは清君は大いにくつろいだ。此家は庭園も廣く、ルームも可なり上等なのを興へられ、食物も豊富であつた。此家に居るならば學問も出來ると喜んでセツ／＼と勉強した。

然るに彼れが此家に移るや否や支那人のクックも、愛蘭人のコーチマンも解雇されて仕舞つたので、其の仕事を一身に引受けねばならぬ事となつた。十五歳の彼れには驚くべき大仕事を

再び課せらるゝに至つたのであつた。

朝は五時半に起きて馬の手入れをする。それから朝食の料理をする。それから皿を洗ふ。それから中飯の仕度をする。それから夕飯になるといふ譯で、朝の五時半から夜の九時半まで働き通しであつた。

此家は庭園が廣く裏には野菜物の畑があり、其傍に乳牛も養ふてをり、朝夕其いかめしい角のある牛の乳を搾らねばならぬ。十五歳の青年の仕事としては頗る過勞であつた。

是清君當時を語りて言ふ。

「全く私の働きは千手觀音様でなければ出來ない程のものでありました。しかし、やれるまでやらうと決心して働いた。夜になって床に入ると骨々が碎けるやうに痛みました。床に入つて故郷の事を思ひ出して泣き明かした事も度々ありました」

斯うしている間に華府に旅行せるブラウン老人は歸省した。

ブラウン老人は支那公使として米國政府に選任され、日ならずして赴任する事となつたのである。

曩に解雇された支那人のクックはブラウン老夫婦の歸省と共に、再び此家に雇はれて來た。或日此支那人が是清青年にポテトの皮をむかせた所、其むき方がわるいといふ小言から口論が始まり、是清君は憤慨のあまり其支那人クックを殺害しやうと決心した。

日本人の氣性は恐らく世界各國人が想像出來ないほど猛烈な

るものがある。高橋是清君ほどのエライ男が、ポテトの皮の小言で大膽にも支那人を殺害しやうと決心したのは現代の日本人にも西洋人にも考へ及ばざる程の狂氣沙汰である。併し武士道を中心として教育された其時代の日本青年には不思議でない。是清君當時のことを語りて言ふ。

「私は其支那人のクックが吾輩を馬鹿にして居るのが癪にさはったので、此野郎を殺してやらうと考へた。併し私の養叔母が國元出發の砌訓戒された「ならぬ堪忍するが堪忍」といふことを思ひ出し、支那人を殺せば自分も殺されるかも知れないと考へました。そこで主人に米國の國法如何を質し、若彼れを殺しても無罪になるなら殺さうといふ話をする、主人は非常に驚いて、其不法を責められました」

併し此支那人とは一日も居を同じうすることを潔しとしないので、彼は即刻主人に暇を乞ふた。處が驚くべし。主人は左の如く彼に告げたのであった。

「お前はこの家を出ることはありません。お前は三ヶ年の契約でこの家に賣られて來たのである。前借の濟まぬ間は一步も出ることは出来ない」

彼れは愕然として驚いた。ヴァンカード老夫婦は彼れをブラウン家に奴隸として賣つたのであった。彼れは驚きのあまり涙さへ出ず。髪をむしり地團駄を踏みつゝ、大地に倒れた。

暫らくして彼は憤然として立った。彼は其受持の作業に就いた。而して其作業は荒々しくあつた。ランプは投げられた。庭

園の花は狼藉はかしましられた。彼は狂人として取扱はれた。併し奴隸たる彼れは主人より暇を貰うことが出来なかつた。

〔日米〕No. 8898 August 11, 1924)

（卅四）

高橋是清君の事……（三）

遂に脱走す

ブラウン老人は支那公使として赴任するにあたり、若夫婦もろとも支那に渡ることに決した。併し三年契約の奴隸なる是清は解放されなかつた。ブラウン一家は是清を親族に賣渡さんと試みつゝあつたのである。此計畫を探知した彼は、最早躊躇することが出来ない。或夜密にブラウン家を脱走して桑港に走つた。

桑港には曾て宿泊した一條等の合宿所がある（此合宿所はステベンソンにてパレス・ホテルの裏手邊にありしもの）。彼れは一條等に事の顛末を語り、其の合宿所に潜伏して善後策を講じていると、富田鐵之助、高木三郎の兩人が東部からやつて來た。此兩人は戊辰革命に際し困難に赴かんとの壯圖を抱いて歸朝せんとするのであつた。

彼は富田、高木の兩人に面會して一別以來の苦慘を語つたところ兩人大に驚き、早速一條と共に當時幕府の名譽領事ブルクスに訴へブラウンがヴァンカードに支拂つたといふ奴隸代償を

提供することとなり、彼れは始めて自由の身になったのであった。

茲に於いて彼は富田氏等と共に歸朝したき旨を話すと、富田氏の申さるゝには「目下國情紛々たる最中であるから、暫らく桑港に止まり、予等が歸朝して其事情を詳に報告する迄待つて居よ」といふのであった。彼は其言に従つて桑港に居残り、此頃米人の經營せる日本美術雜貨店がマーケットとモンガモリーの角にあり此處に佐藤百太郎氏が働いていたので彼れも同じく同商店に働き、竹細工の賃仕事をした。(田中鶴吉君の事を記せし際此商店が日本人の經營の如く記せしも、そは鶴吉氏の思ひ違へにて、日本人の經營でなかつた)。

○ ○ ○ ○ ○

此當時即ち明治元年始めて百四十八名の移民が日本から布哇に渡つた(一説には百五十三名とある)。此移民が所謂元年者と稱されて布哇移民の歴史を飾っているである。

元年の布哇移民は鐵砲商ヴァンクードの企てたもので、名は契約移民なれども其實は奴隸賣買なりと傳へられ、而してこの移民は布哇に渡るや砂糖園に於いて牛馬同様の取扱ひを受け居る旨の報が世間に傳へられた。米國の新聞紙は其の非人道なるを痛論し、資本家及び園主を攻撃したこともあつた。此の頃一飛報あり「日本領事城山静一、布哇に賣られたる日本移民を救濟する爲め米國に來り、其手段を講ずべし」と。是清君は此報を聞き大に喜び、城山氏の着米を待ちて自己の苦境を訴へんと

欲した。然るに城山氏は領事として移民救濟の爲に來米したのではなく一商人の通辯として來たので、桑港から直に本國に引返すのであつた。是清君は城山に面會し同伴歸朝の事を乞ひ、其の承諾を得たので明治元年の冬、富田等の報告を待たず桑港を出發した。

當時維新變亂が鎮靜に歸せんとする頃であつたが、船中に於いて密かに聞くところによれば仙臺藩は朝敵の汚名を蒙り、藩士は何時捕へらるゝやも計られずといふのである。是清君は歸朝後の一身に不安を感じた。彼後年語りて曰く「予は旅行免狀を持つて米國に渡つたのであるが、併しそんなものがあつても朝敵の片割れだと睨まれたが最後、上陸後打殺されるかも知れない。それよりは一層携ふる所の旅行免狀を破棄し、潜かに上陸しやうと考へ、茲に免狀を破棄した。そうして、船の横濱に着するや、予は公然上陸することが出来ない。夜中に人目をぬすんで漸く神奈川に上陸し、富田屋といふ料理屋にて城山に落ち合ひ、委託して置いた荷物を受取り、それから上京し牛込の或汁粉屋の二階に潜伏して約三ヶ月ばかりは殆ど外出さへしなかつた」

彼が明治二年森有禮氏の食客となり、後大學南校に入り、波瀾曲折を経て今日の是清君を作り上げたことは又の日に書く事とする。

〔日米〕No. 8899 August 12, 1924)

（卅五）

是清君後記（一）

奴隸的移民時代

高橋是清君の事蹟を書く序に明治初年頃の移民の事情を回顧して見る。

日本が海外に移民を出したのは日本人の創意でなかった。其創意によりて移民たりしものは水夫が魁をなしている。勿論水夫の移民は團體的移民でない。偶然に移民となつたのである。而して之に反し似て非なる出稼ぎ移民の志を以て海外に渡つたものは當時の賣春婦であつた。

賣春婦が海外に出たのは勿論團體的でない。彼等は多く水夫等に欺かれて、潜かに海外に出て他動的に春を鬻ぐに至つたのが多い。此事情に就いては記録すべきものが多いけれども、本稿に於て割愛する。

日本が團體的に移民を出したのは明治元年四月である。此移民は鐵砲賣込商人たりし米國人ヴァンクードの創意で、布哇砂糖耕主との間に契約が取結ばれ、百五十三名（うち三名は婦人）が布哇に渡つた。これが世に名高い元年移民である。

此移民は布哇に於いて牛馬同様の待遇を受けて居るといふ噂が高くなり、明治二年日本政府は上野景範、美輪輔一の兩人を派遣して實情を取調べさせたが、別段非難すべき點がなかつたと復命している處を見ると、不平論者の誇張的宣傳であつたか

も知れない。

併し我々が當時の有様を回顧して見ると、其移民等は全くの奴隸的生活であつたと思はれる。彼等は三ヶ年の契約期限内に、みだりに休業したり、或は他へ出奔したりするものは直に官憲に捕へられて牢に入れられる。少々位の病氣では休業を許されない。野に於ては英、米人及び葡萄牙人のルナ（監督者）が無慈悲に酷使する。支那人、日本人の契約労働者は言語も通ぜず事情も分らぬので、一層困難を感じたものらしい。昔時各島のキャンプは極めて粗末なる小屋で、唯雨露を凌ぐに足だけのものであつた。其小さき粗末な室内には獨身者と夫婦者とがゴツチャに住んでいたものであつた。女の少い時代に其キャンプ内に混合生活をさせられたのであるから、風紀の紊亂は當然の話である。

或人が布哇耕地の生活を話した一節によると、如何にも亂脈な次第が想像される。某耕地に在住せる妻女は「妾はまだ亭主を三人しか代へていませんがのふ。お前さんなんか今の亭主が五人目だ」と。

○ ○ ○

高橋是清君が桑港に於いて奴隸に賣られたといふ話は、今から見ればウソのやうな話であるが、明治元年頃の歐洲人は奴隸禁止の法律を施されたけれども、積年の奴隸賣買の習慣から脱することが出来ず、平氣で人身を賣買していたものがあつた。特に歐洲人にして東洋に關係をもつ者の多くは機會ある毎に人

身を賣買せんと企てたものらしい。

○ ○ ○ ○

明治二年独逸人スネール、横濱に於て四十名の移民を募り、之を加州ゴールド・ヒルに運ぶの計畫を立てた。此移民募集に應じたものは信州人柳澤佐吉を始め、松五郎、國之助などいふ青年三十六名二回に別れて渡米した。この一行におケイさんといふ十八歳の別嬪があつたが、翌明治三年風土病に罹つて死し、今も其墓がブラザビルの丘陵に残つている。おケイさんは獨身者か人妻かは未だ確でないが、此一行中には妻帯者が三人あつたといふ點から推察するに、おケイさんは此移民中の妻女であつたらしい。

ゴールド・ヒルの移民は渡米後氣候風土に慣れざるのと、苦役に堪へざるとの理由により當時桑港の日本名譽領事ブルークス氏に救助を訴へ、間もなく解散した。國之助は其後黒人を妻としサクラメント市附近に住居し、柳澤佐吉氏は桑港に出で洋食店の元祖となり其娘ユナ子加州大學最古の卒業生である。

〔日米〕No. 8900 August 13, 1924)

(卅六)

是清君後記 (二)

辨天寅の話

(高橋是清君の加州生活を回顧するに際し、予は明治元年時

代に渡米せる二人の古參者を探索せんと企てた。其の一を辨天寅といひ、他を美輪庸一といふ。此二人は曾てスタクトン市附近に在りて働き居れることあるを探知し、同地方舊友の援助を得て其事蹟を繹ねんと志し、八月九日午前六時發のボートをとリスタクトン市に向ふた。

偶然スタクトン・タイムス社に舊知中村彦太郎に會す。彼れは明治二十二年八月、ノールウェー人ウオルグ・ヘケット氏に伴はれ兄弟三人同行して加州に渡れるもの也)

「辨天寅はもう死んでから八年になるよ。本人に就て調べる必要があれば地獄か天国へ出張することだ」と中村は言ふ。然らば美輪庸一は如何にせしかと訊くと「まだ生きてゐるかも知れん。併し何處に居るか分らん。もう八十以上だらうね」と。

美輪庸一氏は明治二年に渡米したことは確らしい。併し此人がスネール氏に伴はれて來た最初の日本移民か否かは不明である。そこで美輪の話は後まはしにして、辨天寅の話を書くことにする。

辨天寅は本名を竹内寅太郎といふ。相州小田原郡南郷村の産で、明治元年頃横濱矢田坂二十番ホテルの料理番の助手として働いていた。之より先慶應、明治にかけて日本に石炭賣込商人として活動せるネル・ローヂャスといふ英國人があつた。彼れは料理人の必要上竹内寅太郎を請い受け、之を長崎に連れ來り、同地より桑港に渡るに際し竹内を同伴したのである。時は明治元年四月、便船は英國船スター・オブ・セテー號であつた。

寅太郎は桑港に於てローヂャスの家庭に料理人として働くこと、なつた。而して彼れは美男子であつた。

彼れは相州人の特徴たるロマンスの持主であつた。彼れは一夕某ダンシング・ホールに遊び、佛國美人ジョセフィンと懇意になつた。ジョセフィンは此頃桑港で有名なダンシング・ガールであつた。彼れは夜を徹して彼女と戯れた。そして遂に彼女と結婚した。同時にロヂャス家を追はれた。

竹内寅太郎が結婚せるジョセフィンは奈翁皇帝を悩ましたジョセフィン以上の美人であつた。日本では美人を辨天様のやうだといふ。寅君は此辨天様のやうな美人を手に入れたといふので「辨天寅」の仇名を水夫連から附けられたのであつた。

彼はジョセフィンと結婚したもの、之を維持するほどの財産はなかつた。新婚の妻は再び舞踏場裡の人となつて誘客に酒をすゝめた。「辨天寅」は各所の家庭やホテルに料理人として働いた。彼は料理人としては可なりの腕利きであり、人物は柔和に出来ていたので働き先の受はよかつた。併し彼の美男は終生彼に幸しなかつた。彼は斯くの如く料理人として加州各地に働き、ある時は船に乗りある時は陸に働いた。

彼は明治元年から大正五年まで殆ど五十年間を料理人としてぶつ通した。そして彼は西洋料理の老功者として同職間に重きを成した。彼は料理以外に何事をも企てることを欲しなかつた。

彼れは晩年オーロヴィル（ビュート郡）在住の内田長次郎氏

兄弟の厚意を受け同家に於て老死した。

明治元年桑港に於て奴隷に賣られた高橋是清君は、後年總理大臣となつた。明治元年に料理人として鳴らした色男「辨天寅」は庖丁を頭として異境の山麓に永眠した。嗚呼！数奇なる運命よ。

○ ○ ○ ○

尺魔曰く、予は寅を描いて猫に類せるを耻（十三年、八、十二）

〔日米〕No. 8901 August 14, 1924)

（卅七）

水夫時代物語

慶應年代から明治十八九年頃までに渡米した日本人は其多くは水夫として外國船に雇はれ太平洋沿岸の各港に上陸したものである。少數の學生を除き多くは此方法を採つたものだ。現日本郵船會社社長伊東米次郎氏の如きは水夫より身を起こした優秀なる一人と見るべきである。彼れは今より約四十五年前、水夫として上海に渡り、次いで米國に轉航したのであつた。前節に述べた田中鶴吉氏もまた船乗の生活をして桑港に渡つたのであつた。唯明治三年（一八七〇年）に渡米した赤羽根忠右衛門は水夫でなく白人の給使として渡米したのが當時異數とされ

ている。

○故赤羽根忠右衛門

赤羽根忠右衛門は長野縣伊奈郡箕輪の人、天保十年に生れ三十歳の時、横濱矢田阪二十番ホテルに給仕人として雇はれた。

當時米國人テラーなるもの消防唧筒商として横濱に來り、同ホテルに滞在し忠右衛門を愛用した。テラー氏歸國に臨んで忠右衛門を伴ひ、渡米したのは明治三年(一八七〇)であつた。

桑港に來てから忠右衛門君はテラー氏に別れ、某白人の家庭に給仕として働いた。此處に働くこと約十五年の間に本國から妻君を迎へ、長女ハナが生れたのは明治十七年であつた。

明治十六七年頃日本人で妻君のあつたのは、群馬縣人柳澤佐吉(此人は明治二年獨逸人スネールがゴールド・ヒル金礦採掘の爲移入せる最初の移民)秋山磯吉(明治十二年渡米フレソノ市小此木九郎夫人の父)高須清太郎(愛知縣人にして明治五年の渡米、妻コト。後に松丸弦吉氏の夫人となる)。それから新潟縣人の川口ジャッキ(本名喜三郎)以上五人位しなかつた。

尤も、此當時お清婆さんといふのが支那人の妻君になつていたので一人ある。

明治十八年(一八八五年)川口ジャッキ、桑港クレイ・アベニュー三番地に水夫宿を開業す。これ日本人水夫宿の元祖である。赤羽根忠右衛門がスタクトン街で水夫宿兼料理屋を始めたのは其後三年のことであつた。忠右衛門は水夫宿を始めてから約二十年間、同一の所に居住して居た。明治三十九年(一九〇

六年)桑港震災に遭ひ家財類焼し、其の後サクラメント市地方に農園労働などをして居たこともあるか、一九一八年、七十九歳にして死亡した。

○御三家時代

明治十八年川口ジャッキが水夫宿を開業した當時桑港に居住する日本人五六十名で多くは學生であつた。學生以外に水夫として働いていた者の數は二百人以上あつた。是等は各地に航海する船舶に乗込み、桑港碇泊の時は上陸してその水夫宿に起臥し賭博したり溫柔窟に遊んだりしていた。その後赤羽根忠右衛門が水夫宿を開業し、次いで高橋七五郎に西本長太郎が水夫宿を開業した。鈴木政吉は大磯屋なる旅館を開業したが、之れは水夫以外の人も宿泊し、普通旅館業の形を備へていた。

私が渡米した明治廿七年頃桑港で最も勢力のあつたのは右水夫宿高橋七五郎、西本長太郎、赤羽根忠右衛門の三家で、我々は之を御三家と仇名を付けていた。之に大磯屋の鈴木政吉を加へて四天王と稱したものである。

川口ジャッキは水夫宿を廢業し、その後女郎屋のボスとなつた。その義妹に當るお花さんといふのが清水某といふ水夫の内縁の妻となり、之れが翌年香港、シンガポール邊から美人七名を引率し來り、ボーデン・ブレースで元祿袖姿で娼店を張つた話は追つてまた記録する。

〔日米〕No. 8902 August 15, 1924)

(卅八)
學生と水夫

日本人が白人と接觸せるは其の源遠くシーボルトの日本史によれば、一五三〇年(享祿三年)大友宗明へ進物として鐵砲二挺を持ち來れりと云ひ、我國の記録には天文十年七月(一五四一年)黒船豊後の神宮浦へ漂着すとあれど詳ならず。之につき内外學者の一致する説は天文十二年頃(一五四三年頃)薩摩の國種子島へ漂着せし葡萄牙船を以て歐洲人渡來の初めとせり。(山本秀焯氏日本基督教史に據る)

この時島主時堯は彼等より初めて鐵砲を得たといふ事だ。風浪の媒介で歐洲人が日本人に實際を初めたのは右の如く四百年以前であるが、併し日本人が米國に渡つたのは土佐の漁夫中濱萬次郎外一名が天保十二年(一八四一年)布哇島に漂着し、米國の捕鯨船に救はれたことが可なり有名である。此以後も無數の漂流者が米國に流れついたことはあるが、是等はすべて自發的に米國に渡つたのではない。所謂天運に弄ばされて白人と實際したのであった。眞に日本人が自發的に米大陸に渡つたのは慶長十五年(一六一〇年)比律賓太守ドン・ロドリゴと同伴せる田中庄助、朱座隆成及び二十三名の商人がメキシコに渡つたものを最古とする。

其次に米國に渡つたのが日米最初の條約交換の爲使節新見豊前守の一行總數七十七人で、時は安政七年正月十八日であつた。

同時に使節一行護衛の爲めに軍艦咸臨丸を桑港に送つた。船長木村攝津守指揮官勝麟太郎(安房守)等すべて九十六人。

此軍艦咸臨丸の中に通辯として中濱萬次郎、船長從者として福澤諭吉が含まれてあつた。

其後自發的に米國に渡航し學生生活を送つたのが新島襄(舊名七五三太)で彼は元治元年六月に日本を出で、辛苦の末米國に渡つて學問をした。

福澤諭吉、新島襄の兩君は實に日本學生の先驅者であつた。

此二人が西洋の文明を日本に傳へ海外留學の氣運を鼓吹したことは大なる貢獻であつた。そして福澤は實業的、新島は宗教的學生の泰斗であつた。

薩摩から歐洲に派遣した十九名の留學生は其多くは政府の關職につき、明治維新後日本改造の事業に参加し、福澤の鼓吹によれるものは多く實業家を出だし、新島の感化を受けたものは多く基督教徒を出だしている。

水夫として米國に渡つたものは一同渡航の方便として水夫生活を送つたものと、無理想にして水夫たりしものとの一つがある。一は後年日本の要路に立てるものあり、米國に止まりて活動せるものあり、其狀千差萬別である。併し、水夫の生活を長くつゞけ、放逸の生涯に甘んじたのは成業の見るべきものがない。之に反し無資力の書生は勞働の傍修學し加州の中原に飛躍

し、移民の先驅をなしているものが多い。

水夫が日本に米國を紹介した功は少くない。同時に不良の空気を送った罪も尠くない。彼等が明治十八、九年頃から明治卅九年（桑港震災頃）までに間接直接に太平洋沿岸に送った賣笑婦は其の數四、五百名に達し、是等の犠牲は道德と健康を傷つけたことが多い。

○ ○ ○

明治十八年より明治二十四年頃までの六、七年間は書生の最も多く渡った頃である。此中宗教に屬したものと政治的なる宗教的なるものがあるが、加州を始め太平洋沿岸諸州の産業に向つて其牛耳を執れるものは書生連であつた。未だ無學にして大業に参加したものは其の類が甚だ乏しいのであつた。

〔日米〕No. 8903 August 16, 1924)

(卅九)

學生の渡米

ペリーが日本を開いて此方、米國は常に日本に對して師父の態度を以て其開明を扶けた。米國は慶應の末、明治の初め頃に來た學生等を扶育し肉身も及ばざる好意を盡してくれた。少數の官費生を除き學生の大部分は徒手空拳で米國に推渡り、少許の働きを取りながら學問をしたのであつた。明治初年頃から同廿二、三年頃まで渡米した學生連の中、渡米後百圓の所持金あ

るものは殆ど無かつたであらう。而して海外萬里の異國に於いて牛にも蹴られず馬にも踏まれず、エー、ビー、シーから始めて高等専門の學校を卒業させてくれた米國の寛大と親切とは、我々が其恩義に感謝せねばならぬ所である。

日本が僅々五十年間に世界列強に劣らざる文明國を建設したのは日本人の素質が然らしめたことは勿論であるが、開國以來米國の文化に負う處が最も多い。先づ史實の上から其重要な人物を指折つて見る。

■森有禮——慶應三年米國に渡りトーマス・レーキ・ハリスの薫陶を受けて學問し、日本に歸りて後、最初の裁判所判事を勤め、後公使となり、最初の商業學校創立者にして後文部大臣となり日本政府の要路に立つた。

■新島襄——元治二年渡米し、ハーデー夫婦の恩を受け、アーモスト大學を出で、森有禮等と共に西洋各國の教育制度を視察し、日本教育界の泰斗となり、京都同志社大學を創立す。

■金子堅太郎、日賀田種太郎、田尻稻次郎——何れも米國出身にして日本政府の要路に立つた。

■富田鐵之助——慶應三年の留學生、最初の紐育領事、日本銀行總裁。

■珍田捨巳、佐藤愛磨——兩人共宣教師イングの庇護により明治十年頃渡米、デポー大學を出で各國大使。珍田子は現東宮太夫の顯職に居る。

■小村壽太郎、鳩山和夫、菊池武夫、齊藤修一郎——すべて明

治七年文部省第一期留學生にして大臣、政治家、學者として其名大に高し。

■ 山川健治郎——明治四年頃の渡米、後帝國大學總長となる。

■ 伊東米治郎——明治十五年頃渡米、シアトル醫師の玄關番となり醫學學校卒業、其後各地に事業を試みしが失敗に終り、後郵船會社に入り、現郵船會社々長

■ 米山梅吉——桑港に渡り福音會に入りスクール・ボーイをなし後三井銀行重鎮となる。

■ 武藤山治——桑港に於いて働きながら修學し、後日本實業界の重鎮、現在實業同志會（政黨）の巨頭となる。

■ 和田豊治——紡績界の重鎮となる。

■ 糟谷義三——明治十九年頃桑港に働き後ミシガン大學に入り、現帝國衆議院議長。

■ 美山貫一、鵜飼武——美山は明治七年頃渡米、鵜飼は同十八年渡米、何れも基督教界の元老である。

■ 根本正——明治十五年頃渡米、歸朝後政界の巨人となり、禁酒會の牛耳を執る。

■ 菅原傳、山口熊野——何れも明治十九年頃の渡米にして日本政界の巨人となる。

■ 高橋是清——政友會總裁のことは曾て記したる如し。此他一々其名を列挙すれば仰山なる米國出身がある。是等の人々は日本の政治、實業、金融界、宗教界等を動かす主要力となっている。而してそれが米國仕込の苦學生多くはスクール・

ボーイから排出したとすれば、我等の米國の文化に負う所顯著なることが解る。或意味に於いて日本文明は米國文明の延長だとも言へる。

○ ○ ○

陸海軍のやうな戰爭をする術は米國からは多く傳へて居らぬ。其昔横井左平太兄弟がアンナポリス海軍兵學校に入學し、後曾根直之進、瓜生外吉（外吉は後海軍大將）等が米國に學んだこともあるが、何と言ふても陸軍は獨逸、海軍は英國から教さはったのが多い。

〔日米〕No. 8904 August 17, 1924)

(四〇)

文明の鵜呑に就て

前節に於て日本が歐米各國の文明を傳へて五十年間に東洋の文明國を造りあげた梗概を書いた。

日本が外國の文明を輸入した場合、昔から其輸入文明を鵜呑にしたものであった。この鵜呑文明は其時代々々の評論家によりて攻撃され、訂正されたものであった。現時日本でも外國鵜呑の文明を非難する聲漸く高く、其の反動として復古的氣分を帯びて來た。

輸入文明の初めは其珍奇に幻惑して鵜呑をする。日本が應神天皇の御宇（西曆二八五年）三韓から輸入した論語及び千字文

は如何に日本人に鵜呑にされたであらう。孝謙天皇の御宇（七五〇年）藤原清河吉備真備等が遣唐使として支那にゆき、此時代に傳へられた支那文明は如何に日本人が鵜呑したであらう。

併し日本は應神帝以來支那の文明を盛んに輸入し、大々的に鵜呑をしたけれども、元々外來の文明なるものは國民の素質がすぐれて居るならば、一度鵜呑にしても久しからずして悪文明は吐き出して、良文明だけを胃の腑に容れるものであるが故に、日本は唐の器械を容れ、唐の文學及制度を容れたが、やがて不良のものは吐き出し優良のものは消化した。其の宗教の如きは、支那より傳へて支那以上の妙機を把らへた。文學も亦然りである。

近世に及んで日本人は歐米の文明を鵜呑にした。彼等は約五十年間このウノミを續けたのであつたが、其の呑んだ文明の中、デモクラシーのある者は吐き出した。社會主義の極端なものも吐き出し、自然主義、戀愛主義も吐き出しつゝある。元々日本人は一個獨特の胃の腑をもつて居る。米飯と香の物を適する胃の腑をもつて居るのだ。此胃の腑はバターと牛豚肉のみでは承知しない。一度はうまいから飛付くが、久しからずして厭くのである。斯くの如くして日本人は日本人に適した物質を取入れ、精神を鍊磨して來たのである。

日本人は有史以來、外國の文明を取入れることに努力した。之を以て世人は日本の文明を模倣の文明だと嘲る。併し眞の文明人なればこそ外國の文明を取り入れて、其の文明に食傷せな

いのである。史を按ずるに布哇は西洋文明を取り入れて遂に滅亡した。羅馬も然り、印度も然りである。唯だ不思議なるは日本は外國の文明を頻りに取り入れながら、其獨特の胃の腑で消化し、其毒を吐き、其精を攝取して今日に及んだ。世界人が日本人を見て恐るべき人種なりとする處は茲に在るのだ。

日本人は外國の長所を取入ることに妙を得て居る。されば近世に於て西洋から器械文明を輸入し、之を應用している。西洋の基督教から四海同胞、平等博愛を取入れて其のまゝを體現している。むかし印度から法華經や大日經を取入れて平等則ち差別、差別則ち平等の哲學を、支那から實踐窮行の道德を取入れて之を體現している。日本人は善い文明を取入た以上、必ず之を體現する。口先でアーメンを唱ふることは日本人の本能ではない。口先で南無妙法蓮華經を唱ふるは日本人の本能ではない。精神、物質の兩界に一如し是に徹底せざれば止まざる大勇猛心が燃えているのだ。

我々は最近米國から自由、平等、博愛を教さはつた。これは日本人が古來から持つて居る精神に新しい薪を添へられたに過ぎない。併し日本人は此新しい薪を尊重し歐米人を尊敬し出した。然るに外國人は色々の形式文明は鼓吹するが根が野蠻であるが故に、その宣傳を裏切る仕打が多い。そこで日本人は、そんな筈でないと思つて憤慨する。支那と戦ふたのも露國と戦ふたのも、日本人精神文明の發露であつた。此日本人の心を知るに非ずんば世界は恐らく保てまい。



日本人精神の研究は世界の學者によりて企てられつゝある。此研究は多大の努力と細心の注意を必要とする。吾輩は日本人にして未だ日本人の研究が足りない事をはぢて居る。他日この研究に關して一文を草するの機會を期待し暫く本稿を於て希望を割く。

〔日米〕No. 8905 August 18, 1924)

(四二)

明治元年に日本から布哇に向つて百五十三名の移民が渡つた。之をいはゆる「布哇の元年者」といふ。此移民は米國人ヴァンクードの企てたものである(ヴァンクードは高橋是清を奴隸に賣たる人の子にして明治維新前鎧被服などを各藩に賣込みし人)

其翌年、明治二年に獨逸人スネール(一説に蘭人とあれど、そは蘭船に乗りて日本に渡來せるが故に誤りて蘭人と記録されたり、スネールは會津、庄内兩藩に鐵鎧を賣込み、且射術の指南をもなせり。右眼つぶれたる故に、左眼にて睨ひを定めたり、彼れは會津より松平武平衡の名を賜り、維新後米國に渡りたり。此事實は庄内藩士にして明治二十二年米國に渡り約三十四年間加州各地に轉働した水野重壽氏の實話に據る)横濱に於いて四十名の移民をつのり之れを加州ゴールドヒルに働かせんと企て

た。此の募集に應じたるものはチャイナ號に乗り込み最初二十名、第二回に十六名加州に渡つた。これが米大陸に於ける移民の先驅であつた。

其後明治十九年に七名の移民が米國に渡つた。此移民は英國人エッチ・アモアという苗木商人が日本に出張せる時、日本の温州蜜柑を米國に移植するの計畫を立て、偶熊本縣下益城郡名越谷村小學校教員森田軍次といふ者と知り合になり、謀議の末、同村及隣村の農民七名を誘ひて渡米せしめたものである。此移民は第二回の移民として重要な記録であるが、其姓名を調るのに予は數ヶ年を費した。特にその姓名を下に列擧する

- 引率者 エッチ・アモア
- 引率助手教員 森田 軍次
- 移民 松本 銀平
- 同 八谷 八藏
- 同 瀧本松次郎
- 同 岩永 彦松
- 同 吉武徳太郎
- 同 新谷 勝太
- 同 迫川 七平
- 外に お鶴さん

(此婦人は大阪の女にしてエッチ・アモアの妾、いはゆるラシヤメンであつた)

(岩永彦松は舊名喜左衛門といふ先年ウードランドに於いて

物故したる岩永庄三郎の實弟である)

右列擧せる熊本縣の七人組は始めより米國に渡る考へではなかつたのである。彼等は布哇に渡らんとして横濱に出で滞在三ヶ月にして布哇行の旅券を得ることが出来なかつた。

此頃熊本縣人の海外的先輩は多く布哇に渡つていたのであつた。而して布哇に渡れる移民は其本國に送金するものが多かつた。一例を擧ぐれば熊本縣柴田彦左衛門の如きは第一回官約移民として布哇に渡つたのであるが毎年百弗ほどの大金を日本に送つた。此頃の百弗は日本金に直して百二十圓程であつたが、斯かる大金を得ることは日本内地では容易でなかつたのである。此當時日本内地に於ける一般労働者の賃銀を考察して見ると

一大工	一日	十二錢
一左官	一日	十錢
一普通労働者	一日	六、七錢

即ち年期を入れた職人が一日十二錢位で、平労働者は六、七錢の日給であつたので、布哇に於ける一ヶ月十五弗の給料は驚くべき大金であつた。故に九州の健兒は布哇の樂天地に渡らんとして頻りに旅券を政府に要求したものである。

日本政府は昔から遠謀深慮の人が多かつた。熊本縣人が要求する旅券は深慮のお役人様が容易に下附してくれない。

此時、米人エッチ・アモアの知遇を得たる森田軍次は横濱に在りて、熊本縣人の布哇渡航希望者の鼻を米國に向けしめた。

彼れは小學校教員の智恵を振ふて旅行券下附の運動をなし、前記七名を米國に渡航せしむることに成功したのであつた。

熊本縣人が卒先して海外に出た動機及び其卒先者の事蹟については記すべきことが甚だ多いが本稿においては之を省略し、他日稿を更めて記述する。

附記す。以上の事實は熊本縣人立田二三及び島田辰次郎氏の實話に據る。

〔日米〕No.8909 August 22, 1924)

(四二)

太平洋岸の學生

吉池寛君の事 (一)

明治七、八年頃に學生として米國に渡つたのは美山貫一君が顯著なる一人である。此人の歴史は多分基督敎界の篤志者によりて編述せらるゝであらうと思ふ。私は同君が渡米以來の事蹟について米國生活に關するものだけを調査中である。不日明瞭なる史實を諸君の前に提供することが出来ることを期待している。美山君の史實を記録するときは、支那ミッシヨンの監督ギブソンという偉人が現れて来る。此ギブソンは明治以前に支那に傳道し、十八年間僅に二人の信徒を得たといふ傳説を遺した程の偉人で、現在の牧師僧侶がお坐んりの信徒を澤山拵へ其の成績を誇るのとは大分拵が違ふている。而して此偉人ギブソン

ンは日本人學生の大恩人であったのだ。

美山貫一君はギブソン氏をたよって渡米し、福音會の創立者となった。桑港福音會は實に日本人學生搖籃の會であった。明治十七、八年から同廿二、三年にかけて、米國に渡った書生連中、福音會の世話ならぬものは殆ど稀であったのである。

然るに我吉家寛君は明治十五年十月廿日に桑港に渡り、別個の天地を開いている。

茲に吉家寛君の事蹟を少しく述べさせて頂きたい。彼は安政五年五月二日信州小縣郡塩川村に生れ、明治十年東京に出で中村正直（敬宇先生）の門下生となり在學四年にして渡米したのであった。

中村敬宇先生は明治維新前に於いて既に國語、漢學の大家として而も蘭學に親み、當時の碩學佐久間象山、吉田松陰等と交遊し、日本開國の先覺者として重きをなした人である。先生は開國論者なりしが故に、攘夷派の刺客は常に先生の身邊を煩はした。此時代の事情を考へて見ると開國進取の先覺者は多く刺客に殺されている。一二の例を擧ぐれば、蔓延元年井伊大老は櫻田に於て刺客に會ひ、佐久間象山は元治元年、横井小楠、大村益次郎は明治二年に於いて刺客に會ふている。中村敬宇と時代を同じうし世界の大勢に通じたる福澤諭吉の如きは刺客のために殺されざりしは氣運者の一人なりしと語っている（福澤翁自叙参照）。

そこで中村敬宇先生は刺客を避くるために慶應二年英國に留

學したのであった。彼は王政復古の大業が成就した明治元年に本國に歸省し、其の温雅重厚なる人格を以て學界に臨み、日本教育界に多大の貢獻をした。

彼れは明治元年歸朝するや前將軍徳川慶喜公の師となり、相携へて静岡に退隱し、「合衆國憲法」「ワシントン決別演説」「ミル自由の理」を翻譯し、明治五年政府に用いられ士藩を脱して平民となり、明治六年同人社を起して全國の子弟を教育し、同八年同人社に女子部を設けて女子教育を奨励し、其あらはず所スマイルスの「自助論」及び「品行論」等を始めとし、エマソンの哲學を譯した。此當時中村敬宇君は純學者の態度を以て社會民衆に臨み、福澤諭吉君は社會評論家として平民文學を鼓吹した。各蘭菊の特徴を發揮して兩々教育界に君臨せる偉觀は明治學界の雙璧として長く後世に傳ふ可きものである。

因に記す——福澤諭吉先生は明治四年「學問のススメ」をあらはし明治七年「世界國づくし」をあらはし、次いで「西洋事情」をあらはし、當代の青年を啓發している。

敬宇先生の弟子吉池寛君は西洋の事情を知らんが爲めに明治十五年先生の門下をはなれて、米國に渡ったのであった。書生として太平洋沿岸にありしものは北部シアトルに伊東米治郎、桑港に高木種次、オークランドに根本正が居た位で、學生として居留するものは殆ど見當らない時代であった。

〔日米〕No. 8910 August 23, 1924)

(四三)

太平洋岸の學生

吉池寛君の事 (二)

吉池寛君は明治十五年桑港に渡り王府に於いて白人の家庭に働き小學校に通學した。此當時王府に修學していた根本正君はハプキンス・アカデミーに通ひ、其後ミシガン大學に轉校したが、根本君は吉池君に其學校の特待を譲った。然し吉池君はクリスト教の臭氣ある學校は嫌ひであつた。彼はハプキンス・アカデミーに入學した。併し直に退學した。ミシガン大學にもいった。併し直に退校した。吉池君後年私に語りて言ふ。

「私は敬宇先生の門人として先生の家庭に入り、其薰陶を受けたのでありまして國學漢學に佛敎を加味した教育を受けたいせいか耶蘇敎の儀式におさへつけられるやうな學校が嫌ひでありました。敬宇先生は自助論や品行論やエマソンの哲學を好んで居られた人で、私は常に思想の獨立を教へられましたので、氣にくはぬ儀式的な宗教學校は嫌ひでありました。根本さんなどは人間がおとなしなかつたが、私は我儘でそんな教育に堪へたのでありました。私はどうも自分が好かぬ學校に通ふ氣になれませんでした」

そこで彼は自然を選んだ。自由は天然自然から生れると考へた。彼は白人の家庭に働きて一ヶ月十五弗の給料を受けた。そして其家庭園にある草花を育てることに大なる興味をもつた。

彼は白人の家庭に働きながら英語を學び居ること三ヶ年半にして歸朝を思ひ立つた。

彼の歸朝の動機は詩人の素質ある彼れには當然の經路であつた。

○ ○ ○ ○ ○

彼れが桑港及びオークランドに居留せる時代に於いては草花の園藝が甚だ幼稚の頃であつた。切花屋に碌なものがなく、園藝家に碌なものがない。成金は各處に起り庭園には巨萬の財を投ずるものがあつたけれども、庭園を飾る花も家庭を飾る花も頗る粗野なものばかりであつた。彼れは不圖日本の菊花を米國に移植することを思ひ附いた。

牡丹の花は支那の名花で、菊の花は日本の名花である。「清節霜を凌いで氣骨稜々」たる菊花を移植して之を米國の野に飾らんと欲した。これ彼が日本の文化を米國に輝かさんとした初一念であつた。詩人は詩人の經路を辿る。自然の偉大に感興を有する青年の志や想見すべきである。

明治十九年九月彼れは歸朝の途に就た。而して翌明治二十年一月彼は數十品の菊苗を携へて再び米國の人となつた。彼れは王府第二十二街と第二十四街の間なるリンゼン街とチェストナット街の空地を租借して菊花の栽培を始めた。この年始めて菊花を桑港の市場に供給し、萬人の喝采を博したのであつた。今年年額百五十萬弗の菊花の生産を桑港附近に見るに至つたのは中村敬宇の弟子吉池寛が四十餘年前に始めた仕事であつた。

は非賣品にして青木成堂より發行せる「小倉百人一首歌もどき」は公刊物である。本書は和歌を學ばんとする者にとりて絶好の書である。

○山嶽家として

彼は五、六年前より米國各地の温泉を探り、其浴する處の温泉實に八十餘ヶ處に達す。而して二年前より名山大嶽を探り、大膽なる登山家となつた。

私の知れる人の中、山嶽探検家として小島鳥水氏あり。田中幽山氏あり。小島氏は日本に於ける山嶽の大家として知られ、田中氏は天下に名を残さずと雖も、斯道の冒険兒として私の推服する所である。而して我吉池氏は六十五歳の高齡を以て今なほ米國各州の山嶽を跋涉しつゝある。

○ ○ ○

吉池氏は大正十三年の山嶽研究の談をもたらして此頃加州に歸られた。其の踏破せる名山大嶽は左の如くである。

- 一、ヤローストン・パーク
- 二、グランド・キャニオン
- 三、ヨセミテ・ヴァレー
- 四、デソレイシイオン・ヴァレー

註——デソレイシイオン・ヴァレーはシエラ・ネバダ山脈の中央にあり海拔一萬一千尺、人跡の至ること稀にして怪岩竄地太古の趣をなす。げに悲壯斷滅の仙境、多く世に傳はらず。

○ ○ ○

吉池氏の師匠中村敬宇先生はエマソンの哲學を好愛せられたといふことである。エマソンの哲學は私の知れる範圍に於ては印度哲學そのまゝである。敬宇君の弟子寛君が、今や山嶽に遊び大自然を友とするに至つたのは、如何なる感化に根元してゐるであらう乎。私は此問題について少しく卑見をのべさせて頂きたい。

正誤——前號熊本縣七人組引率者森田軍次は群治の誤り、森田は竹崎犀吉氏と中原活動の計畫を立てた壯話は追つて記す。

〔日米〕No. 8912 August 25, 1924)

(四五)

吉池寛君の事(四)

淺學なる私の見解によればエマソンは米國が生ん第一の哲人だと思ふ。彼れは其の環境より論ずれば英米人が因習せるクリスト教國の間に生れていたのであつた。而も彼れは此環境より脱出して自立獨歩の哲學を樹立した。

彼れは「萬物は黙示にして自ら語るもの也」を前提として、大なる哲理を宣傳している。其獨立不羈の狀は釋迦の所謂唯我獨尊に類せるものがある。彼の自信論に曰く……

- (一) 社會の説に従ふこと勿れ。
- (二) 過去の自己に支配せらるゝこと勿れ。
- (三) 誤解さるゝを恐るゝ勿れ。

顧ふに釋迦は「社會の説に従ふことを欲せず」して出家したものであった。而して「過去の自己に支配せらるゝ」を嫌ふて王家の榮華よりすべり出で、民間の乞食坊主となつたのである。而して彼は誤解さるゝを恐れなかつた。彼は法華經の大説教に於いて四千人の増上慢の徒を追出した(増上慢とは、知らずして知つたふりをなし、人格なきものが社會の上位に居らんとする愚家の輩をさす。今日で申さば、日本人會の役員などを欲求する下根小智の馬鹿共にあたる)

更にエマソンの哲學は進んで宗教の妙諦に入る。曰く……

「我は萬物の中にあり。萬物は我の中にあり」

「我は宇宙の一部なり、宇宙は我の全體なり」

「祈禱は自己の内に在る神の靈が自ら其事業を善しと宣言する者也。人は神と一致する時他に願う處なし」

「宗教は今の宗教ならざるべからず。我が宗教ならざるべからず。」

「神と人との間には中間物あるを要せず。神と共に今日生存せよ。野花の如く潤草の如く」

彼は更に大なる宣傳をしている。此宣傳は大乗佛教の宣傳其まゝである。曰く……

「差別を見るものは表面と事實とに拘泥す」

「無差別を見るものは萬物の一體を直観す」

彼は斯く論じたる後、現今の文明を罵りて曰く

「社會は新しき技藝を得たり。而も之と共に本能を失へり」

「文明なる人民は車を造れり。而も之共に脚の力を失へり」

「彼のノートブックは彼の記憶力を失へり」

「彼れはゼネバの時計をえたり。而も日影を見て時を計るの熟練を失ひたり」

「基督教は野性的道德の力を失へり」

「人は社會と離るゝのみならず其書齋と離れるべからず、直に自然に返れ」

廿世紀の人々は何故にエマソンの説に耳を傾けるのであらう。嗚呼！アメリカの産児エマソンは偉大なるものであった。そしてエマソンも我中村敬宇君も死んだ。然し其思想は生きている。

エマソンの哲學は私淑した中村敬宇君は其の弟子を米國に遣した。我吉池君は顯在である。彼れは今や米大陸の名山大獄に面接し、其の會て失ひたる夫人の靈と相語る絶好の機會をえて居らるゝであらう。

寛君は私が二十五年來の交遊に於いて、其物慾的道樂を發見しない。彼は酒を飲まず、碁も將棋も弄ばない。たゞタバコをふかしながら詩歌を作り讀書に耽るのみである。而して人に厚

きこと彼の如きは近代稀にみる處也。

〔日米〕No. 8913 August 26, 1924)

(四六)

學生、水夫

明治十七、八年頃(一八八四—一八八五年)の日本青年は米國にあらざれば夜も日も明けぬほど米國に憧憬したのでありました。それも其筈である。此當時外國に出で學問をしたり、家庭の中に入りこんで懇切を盡されたのは米國のみである。そして其懇切を受けた學生は頗る多くありました。前節に述べた如く、米國歸りの書生は多く日本の要路を立ち、米國との親密は一層親密になりました。米國が自由の國で正義人道の國で博愛仁侠の國で、而して神の王國を地上にたてた國であるといふ信頼は日本上下に漲り、ここに新教育を受けた青年間には天國を望むが如き感想が湧いたのでありました。實際の處米國人は東部といはず、太平洋沿岸といはず、日本人に對して溢る、ばかりの温情を濺いでくれました。斯くの如き時代に人種的偏見などをもつ者は一人もなかつたと言ふてよろしい。

茲で少しく考へて見たいことがあります。最近二十年以來日本人は米國人の排斥を受けて居ります。そして此排斥の事相を以て人種的の偏見に起原するものなりと解釋している人が大部分であります。なるほど深く考へずして之を解すれば人種的偏

見と見ることが出来ませう。併し由來人種的偏見といふもの、内容は果して如何なるものでありませう乎。

我々日本人が其始め米國に渡りました時には尠なくとも明治二十年頃までに渡りました時に兩國人の胸には人種的偏見がなかつた。事實に於て排斥どころか寧ろ我々に對して其本國の友人以上、或者は其兄弟以上の厚意を盡してくれたのであります。若今日大部分の日本人が解釋するが如き人種的偏見が先天的に米國人にあつたとしたならば、何故に最初より日本人に對して排斥の氣分を露はさまぬであらう。抑人種問題なるものは少數者と少數者間に起るべき性質のものである。然るに日本人が少數アメリカに在りし時代に人種的排斥問題が起らずして、其數が増加するにつれて起つたとすれば、此問題は別個の方面から解釋すべき性質の問題であらうと考へられます。私は本稿に於て此問題を研究する餘白を許されてをりませぬから、唯問題解決の方面を他に轉ずるの必要あることを一言して置くに止めます。

一言にして申さば今日の排斥問題は生活問題、經濟問題が其の原因をなし、而して經濟的競争の必要上此問題に人種的區別の早鐘を亂打したに過ぎないと考へて見たいのであります。此觀察は獨り東洋人と白人との間に應用せらるゝのみならず、黒人と白人との間にも應用さるべき餘地ありと考へられます。

尤も日本には穢多なる新平民を嫌ふてをり、西洋人はユダヤ人や黒人を嫌ふてをることは眼前の事實であるが、併し之は全

部でない。日本人中には水平社を設けて穢多を平等視する運動が起り歐米人中にもユダヤ人を顯要の地位に選んでいる。然らば則ち人種問題なるものは各個人品性の問題に歸着するであらうと思はれます。之れ一概に人種的偏見の題下に取扱ふことは、問題の眞を捉へたるものではないと考へます。

○ ○ ○

さて日本の學生は明治十七、八年頃より明治二十二年頃まで米國を憧憬して渡り、各地に於いて米人の愛護を受けました。

他の一面には日本人の水夫は同時代において或は料理人或は給仕、或は射手、或は火夫として各國船に乗込みました。即ち此時代が學生、水夫半々の時代であります。而して米國の愛護を受たことは同様でありました。

〔日米〕No. 8914 August 27, 1924)

(四七)

篠田君の疑義に就て……(1)

篠田生と稱する人、大正十三年八月廿六日、「日米」八千九百十三號の紙上第四頁草笛欄に於いて「鷺津尺魔君の記述を讀みて」と題し、私の記述せる歴史的記録に關し、可かり無禮のことを書いていられた。私は篠田生なる人の何人なるかを知らず。住所も記さず、姓名も明記されざる此筆者は所謂闇討をこのむ文壇の兇漢かも知れない。併し堂々たる「日米」新聞紙が

取つて以て其紙上に掲げたるより見れば、本文が私の記録を訂正する効ありと認められたのであらう。依つて私は私の記録を證明するの義務を感じ茲に篠田生の疑義に關し左の説明をする。

篠田生は私の記録に疑ひをもつと言ふの外、自己の有する史實には年代も場所も又證據も提示していない。「おまへの言ふことは嘘らしい」といふだけで、其嘘らしいといふ理由及反證を一つも擧げていない。然るに篠田生が嘘らしいと思ふた私の記録はすべて根據があるのである。

第一、私は布哇最初の移民は明治元年に於いて百五十三名(内三名は婦人)なる由を述べた(本題第三十五回、是清君後記参照)。然るに篠田生は之に對して左の如く述べている。

「布哇最初の移民は明治元年とあれ共、同年は維新の際にて戊辰の役即ち北越等の戰爭國內昂沸の折柄、斯かる移民のありしや否や頗る疑はしい。俗に元年移民といふのは明治七、八年官約移民の事なるべし。是が布哇最初の移民なりしを以て元年移民と唱へしならん」云々。

然るに私の記述は篠田生の疑ふが如き者ではない。明治元年に日本がもめていた位は小學生徒でも知っている。併し是れありしが爲めに「布哇最初の移民を明治七、八年官約移民の事なるべし」と想像するのは無識から起る想像である。且篠田生は明治七、八年頃官約移民が布哇に渡つたと思ふているのは大なる無識だ。第一回の官約移民は明治十八年一月廿八日發のペキ

ン號で八百名布哇に渡ったのである。而して明治元年の移民は米人ヴァンクードの獻策により、布哇名譽領事ウエンリード氏が計畫し、之が募集の衝に當った人は横濱の木村半兵衛で、該移民は慶應四年四月横濱を出帆し、同年五月一日ホノル、に着いた。其總數百五十三名(内婦人三名)である(慶應四年四月七日明治と改元す)。

△元年者の航海日誌(摘録)

慶應四年四月廿九日まで六日間閏四月一日より廿九日まで廿九日間、總計三十五日を費し閏四月廿九日夕方より群島を見、五月一日ホノル、沖に到着し、布哇國王より塩引一樽を贈られ一同感喜した。航海中二人を除く外には悉くチョン鬚を切り落し、二人は上陸二日目に切り落した(以上の記録は日布時事社長、雜賀安太郎氏が現存者より徵せるもの、又明治元年在米せる高橋是清氏の自叙傳及び外務省の記録に據る)。之で元年者と第一回官約移民の史實が明瞭に篠田生の眼に映じたと信ずる。なほ疑ひあらばお出で下さい。もって細密な材料が私の手許にある。

○ ○ ○ ○

第二、明治十七年頃職人夫婦が派米せしことや、明治廿五年アイダホ事件、黒死病事件などは私は知り過ぎるほど知っている。未だ書くべき順番が廻って来ないから書かないまでだ。然して篠田生は此事件に關しても極めて亂暴な想像をして御座る。田中忠七と菅原、日向等が共謀して「人夫の給料を獨領せ

り」といふ事も、「○○に注射」したといふ事も憶説である。此當時私は新聞記者として毎日黒澤ドクトルの家に入居していたものである。オークランド渡船場にも出張して渡船者注射の光景も見た。しかし篠田生がいふが如き事實は決してなかった。(黒死病事件の顛末は後章に詳也)

〔日米〕No. 8915 August 28, 1924

(四八)

篠田君の疑義に就て……(2)

第三、篠田生といふ人は、可なり高齡の人らしい。篠田生曰く「松本武平は蘭人にあらずして佛蘭西の陸軍下士官でありし我幕府に降伏したる佛國の亡命人である……(尺魔曰く篠田生の「我幕府に降伏したる佛國の亡命人」とは何の事か分からない。「降伏……亡命人」一體なんのことも不明である)……他に一人オールなる男と共に陸軍士官學校、幼年學校、外山學校、教導團並に近衛隊等を巡廻練兵を教訓し居りて我等も練兵の際呵られたり……褒められし事あり」

右にも年代も場所も書いていないから、歴史的記録には參考にならない。併し佛蘭西人が日本陸軍の教師に雇はれたのは、明治四年大阪の兵學校を東京に移した時であるから(山縣有朋、陸軍史)篠田生は多分此頃二十歳くらいで、今日は七十二、三歳にならているであらう。それは兎も角私の書いた獨逸人ス

ネール：松平武平が明治二年三十餘名の移民を移入した史實と關係がない。篠田生の知れる松平武平が佛國の降伏……亡命の下士官であらうがあるまいが、私の記録と交渉はない筈だ。松平武平といふ名は維新前後の外國人がしばしば用いた名だと思はれる。私は私の知り且信ずる實話傳説及び記録に據り米國最初の日本移民は明治二年に渡米し、獨逸人にスネール日本名松平武平なることを記せば足る。若し篠田生が私の記述に間違ひありとしたならば他の的確の反證を擧ぐべきである。

（因に記す、私の記述せる明治二年渡米の日本移民事情は此一行中の群馬縣人柳澤佐吉及大工國之松の實話に出でしものにて世のアテズツポー屋の聞きかぢりとは譯が違ふ）

○ ○ ○ ○

私が歴史に思ひをひそめてから約十五年ほどになるが、古老に其經歷を聴きたゞすに方りて非常に困難を感じた。自分のことゆへすべて覺へていると思ふのは大間違ひである。同一の事でも十年前に聞いたことを十年後に聞いて見ると、事實に齟齬があり年代に相違がある。それゆへ、歴史的事實を聴き取るには多くの準備智識を要する。同時代の出來事には同時代各種の人物を知らねば其事實の眞を得ることが出來ない。たとへば先日田中鶴吉氏に再渡米の年月を聞いたところが明治十八年だと云ふ。然し、私は同氏の再渡米は明治二十年なることを知る。其これを知れる譯は、同業者塚本松之助、井上角五郎の實話と、鶴吉氏が明治二十年一月小笠原島より東京府知事に上申せる記

録をもつていたので是等の事實を綜合して其再渡米は明治二十年なりと決定したのであった。

故に歴史を精確ならしめんとするには其時代々々の事を知れる多數の人を必要とする。一人の存命者を捉へて舊事を記さんとするは寧ろ大なる誤謬に陥ることが多い。

○ ○ ○ ○

凡そ記事文の難しとするところは其出來事について眞を傳ふることの難きにある。現場の出來事に關してすら三人の記者は三人とも同一の記事をもたらすことは望み難きことである。況んや過去の史實に關しては其記述には想像力を多量に働かすの必要あるが故に想像力の微弱なる者は驚くべき誤謬に氣附かずして文を行ることが多い。私は篠田君の行文について此缺陷を指摘し得る。

歴史的事實を記述するには、先づ其時代と場所と人物とを明瞭に記すべきである。更に其出來事の眞を傳ふるためには其時代の環境を考慮しなければならぬ。是等の諸要點を閑却して記述せる記事は則ち稗史小説である。自己の小説氣のために漫に他人の記録に妄評を逞ふするは、極めて不眞面目なる態度と云はねばならぬ。

〔日米〕No. 8916 August 29, 1924

△勝木市太郎氏、加州醫科大學卒業、現住布哇ホノルル市。

△中村雄次郎氏、骨董家、西洋料理の名人。

△東ヶ崎菊松氏、リバイブルの主唱者、現共同消費會社長、パークレー在住。

△山口彌太郎氏、農園ボスの古老、現サンデーゴ市附近農場。

△坂部朝雪氏、遠征社創立人、現ロースアンゼルス市在住。

右は私の記憶に浮かびし人々を記したるに過ぎず。遺漏あらば御教示を仰ぎたい。此他日本其他にありて活動せる人は

△武藤山治氏、實業同志會々頭、此人は渡米後卷タバコ職人と

して働き、後甲斐商店に働き、明治二十年、野田の醬油を米國に輸入するの企てを起し同志高島小金治を米國に招き、醬

油の配達を自らせし活動家なり。

△青柳郁太郎氏、南米ブラジル移民の先驅者、現ブラジル在住？

△早川龍助氏、東ヶ崎菊松氏と同船、桑港其他に於いて苦學し、歸朝後衆議院議員となる。

〔日米〕No. 8917 August 30, 1924)

(五〇)

學生の大渡航

明治十八年の渡米者

▲柳澤佐吉、美山貫一。右兩氏は再渡米也。柳澤佐吉は明治二

年スネールと同伴せる第一期の移民。美山貫一は明治七年？の渡米にして福音會の創立者、現に日本鎌倉に在り。

▲榎引弓人。始め福音會に入り、後東部に赴き、シカゴ大博覽會（明治二十六年）の時より博覽會經營の受負ひ人となり、博覽會其他興業等の大家となり本年日本にて死亡す。

▲鶴飼猛、三谷雅之助。高野讓造始め福音會に入り基督教の熱心家となり、今日日本基督教界の重鎮となる。

▲神田佐一郎。始め福音會に在り。後東部に至りユニテリアンを學び、歸朝後日本にユニテリアン教會を創設す。

▲亘理篤治。奥州亘理の大名の二男、愛國同盟創立者の一人、後洗濯屋を經營し桑港震災後パークレーに働き、大正十年歸朝死亡。桑港新聞の創立者。

▲敷津淋潔。醫師、愛國同盟員たり。明治二十八年歸朝。

▲岡見ケイ女。醫學研究の爲に渡米、日本婦人にして醫學研究の爲め渡りしもの此婦人を以て嚆矢とす。

▲園輝女。渡米後福音會に入り傳道に従事す。豪氣堂々として四邊に人なく。當時の學生は輝女の前に顔色なく、後女學校を起すの計を立て、東部に於て二萬弗の醸金を集めたる由なるが目的を果さず。其の後消息不明なり。

▲大倉文二（舊姓佐藤）。越後水原の人、福音會に入り歸朝後大倉孫兵衛の養子となり大倉紙店を開業して成功す。先年死亡す。

▲岡部次郎（號天行）。福音會に入り熱心の基督教徒たりしが、

再渡米の後、「日米」櫻府支社に在り。其後消息不明。

▲杉田定一。桑港に少しく滞在、後東部に至り、歸朝後政友會の重鎮となる。

▲清水泰藏。福音會に入り熱心の基督教信者となり、祈禱の時は涙瀧の如く、朋黨これにカッパの仇名を附す。歸朝後の消息不明。

▲廣田善朗。始め美以教會に入り、後牧師となる。現サクラメント市美以教會牧師。詩文に長ず。

▲内藤彦一。愛國同盟員、歸朝後東京今川橋松屋呉服店の總支配人となる。

▲山村椽次郎。愛國同盟員、在米日本人最初の齒科醫となり、歸朝後政治、實業の各方面に活動し、現時ヒリッピン島に於て椰子園の大經營をなす。

▲池田有親。最初福音會に在り、後アラスカ金礦探検、池田灣を發見す。幽明なる冒險事業家なり。

▲荒井達彌。始め桑港にありて學僕生活をなし、後シアトルに至り、東洋銀行を創立し、歸朝後政界に活動して死す。

▲高尾鶴松。始め福音會に入り、現住桑港。

▲檜原昌藏。横濱正金銀行桑港出張所の開祖也。

▲脇本勤、西本長太郎。水夫として桑港に上陸、脇本は後サンタフィー鐵道人夫請負ひ人となり、西本長太郎はスタクトン街に水夫宿を開く。西本は桑港にて死し、脇本は歸朝後塗料商となる。

▲中畑六郎。青森縣人、始め福音會に入り、明治二十二年頃地方農園に活動し、同廿四年フレスノ遠征の先發隊となる。加州中原ボスの古參也。

▲竹川藤太郎(號默轉)。或は十九年の渡米なるやも知れず。假に十八年組に編入す。遠征社創立の一人。文筆に長じ且諸種の事業を企つ。明治廿六年シカゴ博覽會の時、日本より大人形を取寄せて會場に陳列せり。當時事業家として文士として有名の人。

▲右の外十八年組はなほ多い筈ですが、私の記憶だけを列舉しました。

正誤——本題(四八)三行目の松本となるは松平の誤り。又(四九)安孫子久太郎氏の歸米十九年とあるは十八年の誤植。

〔日米〕No.8918 August 31, 1924)

(五二)

學生大渡航(二)

明治十九年頃の渡米者

明治十九年には政治的有志家が澤山渡米した。先づ其筆頭としては……

▲菅原傳、勝沼富藏、大和正夫、安倍屠龍、石坂公歴、井上敬次郎、井上平三郎、畑下熊野(舊姓山口)、日向角太郎(後輝武)、糟谷義三(舊姓橋本)。

以上の人々は桑港に於て愛國同盟なる政社を結び、本國の政治を改革せんとし、演説により文章により熾に氣焔を揚げた。

又宗教的色彩を帯びたるもの及び福音會に屬したるものは……

▲大澤榮三、米山梅吉、松原廣、佐藤信忠、丹森太郎、松野菊太郎、服部綾雄。

▲中島秀三郎。川下デルタ地方開拓の卒先者。

▲北與三吉。明治十八年渡米、現サリナス在住。

▲駒井松吉。明治十九年大澤榮三と同船にて静岡茶を米國式に製造する目的にて渡米せり。

▲馬場辰猪、大石正巳。此兩人は桑港を通過して東部に至り、米國各處に日本政府の攻撃演説をしたと傳へられている。

明治十九、二十年頃に渡りたる人の中其年代が詳でないものが可なり多い。比較的確實と思はるゝ、明治二十年に渡りたる人は……

▲馬場小三郎。現オクスナード美以教會牧師、明治二十一年代より約十五年間農園のボスとして各地に活動せり。其事蹟は後章に書く。

▲田中鶴吉（再渡米）、塚本松之助、井上角五郎、守田某。

右四人は加州土地開拓の目的にて渡米す。此事蹟も後章に書く。

▲高尾庄太郎。農園開發の卒先者、サリナスにて死亡す。

▲丹正之。洗濯業の卒先者として塚本松之助と共に歴史古し。

▲稻澤謙一、故野田音三郎。

野田氏は加州中原開拓元老の一人として飛躍を試み、後モントレイ漁業の元祖。稻澤氏は基督教青年會に入り牧師となり、サリナス會館の創立者。

▲故加藤誠六。龜の子加藤の名高し。龜の子のおもちゃを輸入し、後國産社を起し、北米貿易會社創立の一人。

▲西龜之助。紀州の人、バカビル地方に働きたる古老、後美術雜貨商となる。

▲東ヶ崎夫人。舊姓を忘れた。渡米後教會に入り熱心なクリスト教信者。

▲渡邊治作。熊本縣七人組をたよりにて渡米。

▲間山武一。教會派に屬す。渡米年代未詳。

▲青木瓢齋。醒猩狂齋の門人にて渡米後畫房を開く。早川雪洲夫人ソル子の養父。

▲久能芳三郎。現加州大學教授、渡米年月未詳、かりに廿年渡米に編入す。

明治二十一年に渡米せる者にして私の知れる重なる人は……

▲竹崎犀吉、西博夫、松岡謙、峰島儀一、村山信次郎、渡邊四郎、右の諸氏は加州農園開拓の卒先者として傳ふべきことが多い。後章に詳記す。

▲牛島謹爾。デルタの開拓者、薯王として有名、後章に詳也。

明治二十一年までの渡米者は以上記憶のまゝを列擧した。これ等の人々は或者は日本に歸りて各般の中堅人物となり、或者

は米國に止まりて諸般事業の卒先者となつてゐる。其光景實に燦爛たるもので、之を開展したるものが即ち在米日本人史の大部分を形成するのである。

○ ○ ○ ○

今日世に成功者として謡はる、は多くは明治三十年以後に渡米したもの、中に見ゆるやうだ。併し是等の成功者を出すには其れ以前に澤山の犠牲者があつた。前記人物は其生活の大半を犠牲に供したと言ひ得る。

何事によらず人類の事業は急速に成功するものでない。成功に達するまでには慘澹たる犠牲者を多く出すものである。而して其犠牲者となる者は自ら其犠牲者たることを自覺せずして卒先開拓の業を進めたのであつた。恰も兒を持てる母親が其兒の犠牲たることを自覺せずして人間愛の止むに止まれぬ本能から其兒を育てあげると同じき趣である。

斯く考へて見るとき、我等は其の先人に對して無限の尊敬が湧く。而して其の事蹟はあくまでも正確なるものを書き遺す必要があると信するものである。

〔日米〕No. 8919 September 1, 1924

(五二)

東部の學生

米國出身の學生が、明治維新後日本建設の大業に参加したことは何人も知るところである。政治、教育、實業、いづれの方面を見ても、米國に學んだ書生の馥ひの這入つていないものは一つもないといふてよろしい。米國は七十年來日本のお師匠様であつた。

此お師匠様の國たる米國は近年師匠様の尊嚴を失ひはじめた。誠に悲しいことだ。蓋し此國の社會的學校に歐羅から参つた我利々々亡者が殖えたからであらう。併し我利々々亡者が其國の尊嚴を潰したのは、それは米國の全部でない。

日本人が米國を學ばんとして正式に入國したのは、勝小鹿及び其従者として米國に留學せる富田鐵之助、高木三郎、及び之れと同伴せる高橋是清、鈴木知雄の五人である。此五人組が米國留學生として始めて公然旅行券を携えて來たものであつた。事の序でに一行中高木三郎の旅券を掲げて見る。

第六十六號

限五ヶ年

海軍奉行勝安房守家來

生國出羽

高木三郎

年齢二十六歳

口常體

身丈五尺三寸

面丸き方

眼の大きさ

鼻常體

書面の者、安房守領小鹿從者總として亞國へ罷越度き旨願
に因り此證書を與へ候間、途中何れの國にても無故障通行
せしめ危急の節は相當の保護有之候様、其國官吏に願入候。

慶應三丁卯年四月七日

日本外國事務局

米國に向つて公然留學生を出したのは、此時が始めてである。
之れを筆頭として、黒田藩から、平賀義質、井上良一、本間英
一郎、船越某が出で、久留米藩から、山田稻安、拓植善吾、岡
山藩から、花房義質、佐賀藩から國友次郎、白峰駿馬（紐育に
て造船學を研究し歸朝後白峰造船所を設立せる人）

又外山捨八（後正一と改め歸朝後大學總長、及び文部大臣と
なる）、服部二三（歸朝後貴族院議員となる）

エール大學には原六郎、田尻稻次郎、山川健次郎、ハーバ
ード大學に目賀田種太郎あり。

金子堅太郎、神田乃武、團琢磨、平岡瀨、牧野呻顯、松本莊
一郎、林薫、田中貞吉（後ペルー移民の先驅）等は明治三十四
年の留學生で、或者は森有禮に従ひ、或者は岩倉公に従ふて渡
來したのであった。

當時（明治五年頃）米國公使にして日本學生監督の任にあり
し森有禮氏がボストン教育課長チャールズ・フリント氏に伴は

れて國語學校を視察せる時、校長ファイルロック氏は森公使等を
顧みて一場の挨拶を述べ且曰く。

「此學級は三十有餘人を收容し居れり、而も勉強無比の日本
學生を級長とす。元來米人生徒は勉學を悦ばざる風あり、希く
は日本より毎年優良なる學生二三人宛を送り之を各級に配置せ
ば自ら米人學生の模範たるを得て、吾國語教育の發達に資する
所多大ならしむ」

○ ○ ○

小村壽太郎、鳩山和夫、菊池武夫、齊藤修一郎等は明治七年
文部省第一回官費留學生である。

珍田捨巳、齊藤愛磨は明治十年の留學たることを曾て述べし
通りである。

女子學生としては名高いのは、岩倉大使と同行した五人組で
時は明治四年、其姓名は

津田梅子（八歳）

永井しげ子（九歳）

吉益りょう子（十四歳）

山川捨松（十一歳）

上田てい子（十四歳）

右列學の人々は或は政府の要路に立ち、或は教育界に、實業
界に英名を輝かしていることは世人の知る所である。

〔「日米」No. 8920 September 2, 1924〕

日米貿易の卒先者

(五三)

日米貿易家としての卒先者は、佐藤百太郎である。百太郎は醫科大學の基礎をなした佐藤尙中の男で、慶應三年頃既に桑港に在住し、高橋是清に働き口を周旋したほどの古參である。此人最初の紐育領事たりし富田鐵之助と交はり、次いでポストン

工藝學校に學び、明治八年歸朝するや米國に於ける商業貿易の有望を説き、福澤先生等の賛成を得、先生の門人森村豊（男爵森村市左衛門の實弟）及び新井領一郎（群馬縣養蠶家の兒）増田林藏、伊達忠七、鈴木東一の五名と共に明治九年紐育に渡つた。五名の目的とする處を列舉すれば：

▲新井領一郎。生糸貿易の目的を抱きて渡米し、後生糸貿易の開祖となる。

▲増田林藏。狭山の製茶貿易の目的を抱きて渡米し、茶貿易の開祖となる。

▲森村豊。兄市左衛門の志をうけ日本雜貨貿易の目的を抱きて渡米し、森村組米國貿易の開祖となる。

▲伊藤忠七。三井組の店員として美術骨董貿易の目的を抱きて渡米し、斯業の元祖となる。

▲鈴木東一。丸善書店々員として書籍及び藥品類貿易を目的として渡米し其開祖となる。

而して右五名の渡米を誘導したるものは實に我佐藤百太郎氏

であつた。彼が日米貿易の率先者たることは永く後世に傳ふべき價値がある。

森村組中興の偉人村井保固は明治十二年に渡米し、甲斐織衛は生糸貿易商會の支配人として明治十三年紐育に現れた。甲斐は後桑港に於いて美術雜貨商店の開祖となる。

以上數回わたり、明治初年頃から同廿一年まで太平洋沿岸に現れたる學生、水夫。東部に現れたる學生及び商人の開祖及び加州中原の開拓者の姓名を列舉して見た。是より後六年間即ち日清戰爭までの間に澤山の學生が渡米し、就中明治廿四年頃から布哇に於ける官約移民の年期のあけた者、日本から友人をたよつて渡米した農民階級などが年と共に米國に渡り、北はピクトリア、シアトル、ポートランドに、南は桑港に上陸する日本健兒は漸く多くなつた。是等の人々の種類は千差萬別で、最早私のチビ筆一本では書切れないほどの繁雜に達した。そこで私は私の知れる數十人を擧げて其事業を記述すると同時に、私といふ一個の日本人が如何なる運命に弄ばされて米國に在住せるかを書いて見る。私を書くことは即ち其周圍の日本人の生活を記述することであり、同時に在米日本人問題の解決であると信ずるのである。

私は在米三十餘年間、幸か不幸か文筆に關係をもつて今日に及んだ。此三十餘年間の歴史において多くの先輩諸君を知り、

而してその庇護の下に今日の我れを全うして來た。本稿は其報恩謝徳の一文である。

本題の「主人公」

吾輩の位置（一）

本稿を進むる便宜上、私の特質及び其由來の概略を左に掲ぐ。

(一) 私の産地——亞細亞大陸の東方にある日本帝國（英語のジャパン、羅典語のジャパングー）越後の國三島郡飯塚村字中島、酒造家に生る。

(二) 生年月——慶應元年八月十七日（陰曆）耶穌紀元一八六五年。

(三) 家柄——家譜の示す所によれば、天津兒屋根ノ尊の後裔、大織冠藤原鎌足の末孫、天正時代藤田と改稱し、上杉謙信の幕僚となり能登守と號す。慶長五年越後の田舎に蟄居す。元禄年間隣村鷲頭家より養子を迎ふ。曹洞宗菩提寺及び鷲頭の姓を持込む。以來約二百年五十年間、鷲頭の姓を名乗る。

(四) 家什——行基菩薩作、觀世音の木像、國定の太刀（但し贗物？）

正誤——本稿第五二回に明治三十四年の留學生とあるは明治三、四年の誤り。

〔日米〕No. 8921 September 3, 1924

(五四)

本題の「主人公」

吾輩の位置（二）

(五) 藏書。曲亭馬琴著「珍説弓張月」「夢想兵衛胡蝶物語り」兼行法師著「徒然草」——これは寫本。「武將感情記」「民

谷坊太郎一代記」「朝露姫再來記」「繪本太功記」「梅ごよみ」「四書五經」「法華經」「文部省板、小學讀本」「福澤論吉著「學問のすゝめ」「山陽詩集」

(六) 私の育ちたる所は十二月より雪降り、三月まで降りつゞけて積雪十尺に達す。春四月雪消えて此時より農業に従事す。

(七) 私の家は山林、田畑を併せて約十町歩ほどの地主で、小作人約十七戸、作得米一ヶ年五十石ほどであった。

(八) 宗教——不動澤村、満光寺といふ曹洞宗の檀越。此禪寺には我家より曾て二人の同族修道して住職となりし事あり。

(九) 明治六年始めて文字を習ふ。教課書には「古文孝經」の無點。

(十) 明治六年小學校に入り、はじめて「いろは」及「單語篇」を習う。

(十一) 明治十年西南の役あり。此時の春より新聞といふものを知る。東京日日新聞、朝野新聞を読む。

(十二) 明治十一年隣村の素封家の娘に初めて戀す。此娘は當時十二歳位なりき。

(十三) 明治十二年三里を隔てたる小千谷町越後上布問屋の家に見習ひ奉公す。居ること五ヶ月にして正家に歸る。

(十四) 明治十四年小學校授業生となる。

(十五) 明治十四年秋同郡大川津村酒造家白倉家の養子となる。後來妻となるべき娘當時九歳、此時より佛敎を研究す。

(十六) 明治十六年星亨の政談演説を聞く。此時より自由民權の志を抱く。

(十七) 明治十七年内務省土木局及び新潟縣廳土木局工事材料の請負ひをなす(酒造業廢業)。

(十八) 明治十九年四月、砲兵第十二聯隊に徵兵せらる。

(十九) 明治二十年聯隊書記に選拔せらる。妻死亡す。

(二十) 明治廿一年歸休を命ぜられ縣尙武會より賞與せらる。

(廿一) 明治廿一年自由黨に入る。

(廿二) 明治廿二年最初の國會議員選舉の際第五區選舉長に擧げらる。

(廿三) 明治廿三年新潟縣會議員となる。時に二十五歳五ヶ月。

(廿四) 明治二十四年道路工事の請負ひをなす。此請負ひ工事に於て大失敗を招き産を傾く。

(廿五) 同年國會解散。次いで全國を遊説す。長岡市の藝妓に戀す。

(廿六) 明治二十五年政敵の爲に陥れられ、東京に於て捕縛せら

れ、七十二日間監獄に拘禁せられ、無罪の宣告を受く。獄中禪學を研究す。

(廿七) 明治二十六年北海道に赴く。女學生に戀す。

(廿八) 明治廿七年日清戰爭に際し徵集せられたるも病を以て免役せらる。

(廿九) 同年再び北海道に赴く。先の女學生に戀して成らず。同年養家を離脱。

(三十) 明治廿七年秋米國に渡る。

○予が渡米の動機

私が米國に渡れる動機は、失戀の結果だと解する人が多いやうである。尠くとも私の舊友の數人は斯く解していることを私は知っている。併し私は失戀したけれどもそれが爲めに失望して米國に渡つたのではない。失戀は失戀として忘却した。渡米の動機は別に故があつたのであつた。

〔日米〕No. 8922 September 4, 1924)

(五五)

渡米の動機及び

失戀の事情 (一)

私が明治二十七年渡米せる以前北海道に放浪生活を送つたことがあつた。明治二十六年工事請負ひ大失敗の後、北海道に赴き新天地を開拓せんとした。處が是まで内地に於いて多少の地

位あるを自負して北海道に旅した私は、彼の地に渡るや否や全くの素浪人たることを自覺した。私の北海道生活は何等の背景がなかった。若しありとすれば幾らかの教育と健全の身體とである。然るに此の教育は新開地たる北海道には何等の用をなさなかつた。健全の身體も其の實勞働の経験なきため何等の用をも爲さなかつた

此當時中流階級の子弟が新開地に放浪するとき、有害にして無益なるは郷里の家門と其受けたる悪習慣とであつた。私は日本中流階級の家に生れ育ち、無経験の事業に手を染めて失敗した。而して其経験として餘す所は、藝者買ひ、茶屋遊び、天下國家の放言高論、金錢を浪費すること等であつた。併し私は十五歳の頃から讀書癖があり、舟車奔走の間と雖も、いまだ書物に離れたことがなかつた。漫讀、浪讀手あたり次第にあらゆる書物を亂讀した。而してその亂讀の間に何物かを得たのであらうが、私は常に自分の無學をはぢた。今日もなほ然感している。

私が北海道放浪の時函館に「北海民報」といふ日刊新聞があつた。社主兼主筆は石塚三五郎といふて中江篤介氏の友人で自由黨の名士であつた。石塚君は内地を喰ひ込めて北海道に渡り「北海民報」を創立したのであつたが、當時創業の際として財政頗る困難のやうに見受けた。

私は此の時「北海民報」紙上に「内地人は宜して北海道に移住すべし」といふ一文を投じた。此論文は日本内地の人口過剩論を説き北海道の沃野開拓すべき餘地があるを述べたのであつ

た。而して特に婦人の移住を高潮した。此の一文は當時の讀書界に可なりの反響があつたらしい。石塚君私に語りていふ「君の論文は内地に反響があつたと見え、各地から北海道移住の事を問合せて来る。一々手紙を出すのは面倒だから、今度北海道といふ一欄を設けるつもりだ」

私は此の頃友人の紹介にて越後出身の事業家上杉君（假名）の未亡人の許を訪問した。此の未亡人は愛媛縣某藩士の女で上杉君と結婚し三女一男を儲けたが、上杉氏は五年前に物故したといふ話であつた。

事業家たる上杉君に死に別れたる未亡人は四十七歳にして四人の子供を抱貧乏の生活を續けていられた。

長女千代（一八）、次女愛（二五）、三女桃（一一）、長男俊男（八つ）。

長女と次女とは函館遺愛女學校の校費生として就學していた。

此長女千代さんといふのが私の戀愛の「主人公」であつた。事の起りは下の如くである。

明治二十六年夏、私は病を得て函館病院に入院した。丁度此とき遺愛女學校は夏季休業となり、お千代さんは家に戻つて見えた。母は私が病を得て入院していることを娘に告げたらしい。娘は母の友人たる私を病院に見舞ふてくれた。

寂寞無人の郷と思はる、旅人の病室に時ならぬ美人が枕頭に現れた。あどけない北海道なまりの娘が、西洋直譯の言葉で、

私を慰めてくれた。

「神さまは、あなたをお助け下さるでありませう。あなたの病氣は、神の力で癒して下さいませう。オー神様！願はくは私の愛する兄弟をおめぐみ下さい」

私はツト病床から立上がった。

「上杉さん、ありがたう。私の病氣は神様の力よりも、あなたの方で癒ります」

上杉嬢は、はづかしさうに私を見た。その魅力ある眼。其のふくよかな身體。其の品のよき容姿。

わたしは、さながら電氣に打たれたらん如く恍惚として彼女をながめた。彼女はハンカチーフを見つめていた。

彼女は初対面の病客を見舞へるにも拘らず、二時間以上とやかに話して別れた。

〔「日米」No. 8923 September 5, 1924〕

(五六)

渡米の動機及び

失戀の事情 (二)

上杉千代子嬢は翌日また私を見舞ふてくれた。既に舊知の如き心持で四方山の話が長く交換された。

此日は三時間も語りつづけた。受持ちの老看護婦は病室をはずして隣室の看護婦と語る。

彼女は斯くの如く毎日私を見舞ふてくれた。

私は二週間の後病院を出た。入院料を拂ふことが出来ず、借金のみ、に出た。身に附くものは木綿の單衣一枚、麥藁帽子一つであった。

これより先友人を國元に送り阿兄に必要な金を請はしめた。友人は阿兄より得たる金を以て遊蕩に費し、私の處へ送つてくれなかつたことが後に阿兄の手紙で分かつた。

知らぬ旅で一文無しになることは寂しいものである。私は生れてこの方、金といふものを尊いと思はなかつた。然るに新開地に來て見れば金なくして一日も生活することが出来ないことを悟つた。そこで故郷の知人細川といふのが青柳町の長屋にあるをたより、此家に泊つた。

知人の住んでいた長屋といふのは函館の貧民窟であつた。一軒の家を三つに仕切り、各室八疊敷である。入口の方には蝙蝠傘の直し屋、中間に細川、其奥が「はじけ豆賣り」夫婦が住んでいる。前後兩方の人々は兎に角職業をもっているが、中間の我々兩人は無職の素浪人である。

或日細川は江差の漁場に人夫を募集するといふ話を聞いてきた。私は直に細川をして此漁場の人夫たらんことを申込みしめた。そして兩人とも募集所の親方の前に出た。親方曰く……

「おめへ達は漁場に働く氣なら手を出して見せねい」兩人は親方の前に兩手を出して見せた。

「だめだめ、そんな手をしている奴が漁場に働けるもんか」

我々の手はこれまで箸と筆との外堅いものを握ったことがなかったのであった。一目のもとに漁夫試験に落第したのも其苦である。

長屋に歸った私は、其晩を此家に明かさんとした。蚊が澤山襲ふて來た。しかし蚊帳がない。居爐に木を燻し其のまゝ寝轉ぶと今度は蚤が猛烈な勢ひで刺す。とても安眠することが出来ないの、家を飛出して海岸に到り、波にむかつて苦吟し一夜を明かした。

細川と相談の末、彼は八卦を立てることを覚えて居るので占師になることを勧めたが、私の職業は見附からない。先づ第一に考へたのは法螺祭文だ。私が子供の時村に來る祭文讀みを聞いて其眞似をすることが上手であつたから、これなら田舎者に聞かせる位の藝當が打てさうだと思ふた。しかし苟くも祭文讀みで御座いといふには法螺貝と錫杖が必要である。所がこんな品物を賣っている店は函館になかつた。更に浪華節語りをやつて見やうと考へて見た。之にも三味線引が入用だ。私のやうな素人藝人にくつついて巡業するやうな物好き女は北海道くんだりに居らない。止むをえず講談師にばける事に決した。

そこで古本屋で松林伯圓の講談本やら、三遊亭圓朝の落語本などを四、五冊買ふてそれを暗記し、長屋の連中、隣の妻君などを呼んで來て、講談の試演をやらかした。處が、聽衆は大に感動した様子に見えた。私は尠くとも漁夫階級の聽衆を喜ばせることが出来るとの確信をもつた。細川は占い師、吾輩は講談

師兼落語家となり、直に漁場に出張することに決し、此旨をお千代さんに告げた。

お千代さんは吾輩の此企てに多大の興味をもつてくれた。彼女は母に隠して祕藏のラケットを賣り白布を買入れ、それを股引に作るべく學校に持行き、半日も掛つて裁縫してくれた。其の上風をひくとわるいからとの親切から、下着を一枚拵へてくれた。私は感謝の涙を流した。

函館から江差までは十七里の山路である。吾輩は先づ此漁場をさして旅立つた。

湯の川温泉を通り過ぎて三里ほど行くと、私は非常に疲勞を覺えた。道ばたの茶屋に腰を下すや否や一步も運ぶことが出来なくなつた。宿痾の脚氣が再發したのである。同行の細川は大に驚いた。そして一先づ函館に引返すこととし、通行の荷車便をかりて私を乗せ、再び函館の人とした。

〔「日米」No. 8924 September 6, 1924〕

（五七）

渡米の動機及び

失戀の事情（三）

病餘の私は講談師として一回の講談をも漁人の前に演ぜずして中途から函館に引返したのであつた。私の最も尊敬せるお千代さんは、私の顔の蒼いのを見て同情の驚きを以て迎へてくれ

た。

「あなたは、まだ健康が恢復しませんから御静養なさいませ」

「私は静養する所がありません。一文なしの旅人ですから……」

彼女は貧窮の母に説いて私を其家に静養すべく迎へたのであつた。お千代さんの母曰く……

「お互にね、二膳のめしを一膳にしたとて、人間は飢えるものでありませんから、あなたは其心持ちで私の家にお泊りなさい」

お千代さんは輝いた眼で私を歓迎してくれました。

「二本のパンで千人の人を養ふたことは奇蹟でないと思へます。人間は地上に食物のある間は、餓死しないと思へます。」

「お千代さん、ありがたう。私はあなたに、何うして酬いませう」

お千代さんは吾輩の先生のやうに神々しき姿を示した。

「まあ、御安心遊ばせ」

私は家郷の阿兄に旅費の送金を待つあひだ、上杉未亡人の家に客となつた。お千代さんは毎日私の話し相手であつた。

お千代さんは新しい氣分に充ちたそれは、世間に得難い才女であつた。私は彼女が暑中休暇の間に睦み合い語り合ひ、人

知れぬ大仲よしとなつた。

或夜お千代さんの女の友達菊さんと私と三人で公園に散歩したことがあつた。私は卷タバコの火を求めつゝ、千代ちゃんにマッチを乞ふた。此時提灯を携へて此公園を横切る人があつた。千代ちゃんは、氣輕に私の卷タバコを手にして其提灯の主に火を乞ふた。

「火をつけて來ましたよ」

彼女は其卷タバコの火の附きしものを私に渡した。

此提灯を持てる男は、クリスチャンであつた。

アメリカの基督教徒は可なり廣い氣分を持つてゐるが、日本のクリスチャンは形式的な、偽善的な偏狹的なものが多い。彼等多くのクリスチャンは獨立の思想がない。アメリカの傳道から生れた一種の孤兒の姿であつた。我愛する純粹無垢なるお千代さんは、私の卷タバコの火を偏狹なるクリスチャンから貰ふために、計らざりき大問題を醸した。

明治廿六年九月一日、「北海民報」紙上に「アーメン女學生の艶聞」といふ續物が現れた。

お千代さんの學校では天來の霹靂の如く驚いた。

この艶聞の主人公と目される、お千代さんは學校から禁足され、舎監から色々審問を受けた。

此新聞が艷種として七回ほど續きたる時、お千代さんは三分の外出を許されて私に面會した。彼の女は涙ぐみつゝ、新聞の記事を苦にしていた。私は笑い乍ら……

「面白いぢやありませんか、あなたのいふロマンスを文藝的に現したもので、一種の藝術品と見ると、面白いぢやありませんか」

彼の女は最早藝術も文學も考へる暇なきほど其母校から非難を受けたりしい。彼の女は蒼ざめたる顔をして言ふ……

「どうか、北海民報の記事をやめさせて下さいませんか、わたし、ほんとに困りますから」

「私は頗る面白く読んでいますが、併しあなたがお困りなら止めるやうに話します」

此日私は、北海民報主筆石塚三五郎君を訪問した。そして續物の「アーメン女學生の艷聞」の當の色男は僕であることを告げた。

石塚夫婦は轉げるやうに笑ふた。そしてその翌日から、色男たるべき私の記事は中止された。

此の記事の出所は石塚主筆は笑ふばかりで詳しいことは私に話さない。それは新聞經營者として當然である。併し後に聞くところによれば、お千代さんには澤山の經師屋があり、その經師屋が私共の仲よしを妬んだ結果だと知れた。

△正誤—本題（五〇）中、岡部次郎（號天行）とあるは岡部健太郎の誤り也。岡部次郎師は明治十八、九年頃渡米にして

ジョン・ビー・アイリシの家に働きて信任を得、後布哇に傳道し、滿洲新報主筆憲政會長長野縣選出代議士參政官、現代議士也。（本記事の誤りを指摘せられたる伴武君の好意を謝す）

〔日米〕No. 8925 September 7, 1924

（五八）

渡米の動機及び

失戀の事情（四）

國元の阿兄から再び旅費を送つて來た。十月のはじめ私は郷里の人となつた。

クリスチャンの悲しさ、お千代さんは私を見送るべき機會を得なかつた。

私が國元に着いた後、七日目にお千代さんの手紙が届いた。

此手紙は熱烈猛烈の戀をのべたものであつた。其一節に曰く

……

「學校から疑ひの眼を以て見られ候まゝ、戀しき人の旅立ちにも手を握ることを得ざりしを悲しく思ひ候。女の一念、神も御照觀あるべく候。あなたは妾をお忘れ下さるまじく候。妾は一年の蛇となりて、御身に卷つき候はんつ。覺えていて下さいますか。お忘れなされば恨みますよ……」

○ ○ ○

吾輩はお千代さんの交際に於いて右様の手紙を受取るべき關係をもたないのであった。成る程、夏の夜の蚊帳を同じうして睡ったこともあった。すれつ、もつれつ月夜の公園に遊んだこともあった。そして「あなたは私の妻になって下さらぬか」と口説いたこともあった。併し彼女は家庭の都合上、私の妻たることを承諾しなかった。

「あなたは神にかけて愛しますが、あなたの妻たるの資格がありません」

「なぜ」

「妾の家は貧しく、兄弟姉妹が多いからです」

「その兄弟姉妹を私がお世話したら……」

「だって、大變なツラブルですわ」

「そのなことは總て承知しているのです」

○ ○ ○

吾輩が北海道の放浪生活から郷里に歸つたのは、明治二十六年の秋であった。お千代さんから毎月四、五度の消息があった。そして青春妙齡の熱情が其手紙にこもっていたのであった。或一節に曰く

「あなたが函館を立去り玉ひし時、妾は手の中のある寶を失ひし心地いたし候。天地ために寂寞、誰に向つて此心を訴ふべきや。右も左も妾を解しくる、人はなし。無人の郷に在りて、遙かに君の面影を心に浮べて

…泣くべきか、泣くべからずか、ほと、ぎす…

はじめて發句らしきものを思ひ浮かべ候。お笑ひ下さるべく候」

○ ○ ○

明治二十六年から廿七年のはじめ方まで、我等兩人の間に毎月數回の消息をかはした。或時は手紙の中に花をしのばせ、或時は香をしのばせたこともあった。そして女の手紙にこんなことを書いてあつた……

「昨夜あなたを夢に見候ところ、たくさんの娘共があなたのそばに寄りたかり、あなたの首にからみつき、あなたの口にキッスし、萬歳を唱ふる光景を見て、ねたましく存じ候ひき。妾はあなたを妾一人のものとしたく候。あなたは妾をあなたの一人の女と見て下さるべしや」

○ ○ ○

吾輩は其返事を認むべくあまりに其道に無學であつた。十九歳の女學生が感興に乗じて書きし此手紙に對して如何に答ふべきかを知らなかつた。併し私は漫然として左の返事を認めた。其の一節に曰く……

「曾てお話をされ候エマソンの哲學に——手につかんでいゝ一個の世界は、藪の中にある二個の世界よりも價值がある。吾人をして本當の男や女と交際せしめよ、煙のやうな不確な幽霊とは一切關係してはならぬ——貴嬢の夢が、何程貴嬢を動かせじや知らず候へども、…あなたを妾一人のものとしたく、妾をあなたの一人の女と見て下さるべしや…との御言

葉、私には徹底いたさず候。藪の中にある二羽の鳥は私には不用に御座候。私はあなたを的確につかみ得れば満足に候。文章の往復では到底あなたをつかみ得ず候」

○ ○ ○ ○

私はお千代さんの引力のために再び北海道の客となった。男ほど女にのろいものは無い。

私はお千代さんの的確につかむ爲めに北海道に馳参じた。私はお千代さんをつかむつもりで再び北海道に渡ったものであった。併し實の處、お千代さんにつかまへられて北海道に引きずられたのであった。

女の髪の毛をもて作りたる繩は、大象をもつなぐと昔のひぢりが言ひ遣してある。私はお千代さんの髪の毛一本に引きずられて再び北海道に旅立ったのであった。これが男の人生だ。

〔日米〕No. 8926 September 8, 1924)

(五九)

渡米の動機及び

失戀の事情 (五)

男が女に戀することは難事業である。之に反し女が男に戀することは閑事業である。女は男に對して頗る有利の地位に立っているものである。女は受身であるが同時に吸引力がある。一瞥の流眼、謎のやうな言葉、不用意な態度、それで男を捕へ得

る魅力をもつ。

男は進撃的である。隙だらけの女を目掛けて其隙を狙はんとして進撃し、途中で煩悶する。どこからでも打込んで行ける筈の女を見て、どこからでも打込んで行けないのが男といふ奴の愚昧だ。若し世間に馬鹿者といふ奴の代表者を求むるならば、男と女に對する時の態度である。

男から言はしむれば女は實に横着である。女は戀に關して少しの努力をもしない。男だけに氣をもませて、そして笑ふている。男が戀すればするほど女は心の中で笑ふている。男の盡す親切は當然の權利として受けている。もとより報恩謝徳の念なぞ無い。

私は五十年この方、澤山の戀を試みた。而して其九分九厘まで四九尻った。

女から言はしむれば、男は實に馬鹿者である。女は男を選択する權利がある。澤山の男が女の前に降頭平伏して其愛顧を乞ふべき筈である。女は馬鹿野郎の中の一人を選んで結婚の恩恵を授ける。そして淑徳貞操といふ道徳は、兒を育てるために其夫を縛りつける道徳である。若女が兒を生まないならば貞操の道徳などは起らない筈だ。

貞操といふことは、男と女に要求する道徳では無い。女が男に標榜する道徳だ。貞操の道徳は看板だ。産兒の養育を完全ならしむるための看板だ。

思はず理屈が過ぎて脱題いたしました。これから本文に取掛

ります。

○ ○ ○

私は再び北海道にお千代さんを訪ふた。お千代さんは驚きもしない。喜びもしなかった。彼女は戀に對して私よりも人間がしっかりしていた。

「來なくてもいいのにね、妾色々計畫して、あなたの處に往くやうに運動しているのよ。あなたが此處に來ると、かへつて面倒になるの」

「なぜです」

「妾の學校はクリスチアンの學校でせう。クリスチアンといふものは、自分の世界しか知らないんですから、あなたのやうな佛教哲學から生れた人を理解する雅量がありません。そこで妾の學校では妾とあなたの關係を非常に恐ろしく考へているのです」

「私を泥棒くらいに考へていますか」

「泥棒とは考へていません。人殺し位に考へています」

お千代さんとの會話中「人殺」の一句は、藝術的の挿話として私は面白く聞いたのであった。其故は「都々逸」の文句に……

「手にかけて、殺すばかりが殺すぢゃないよ、焦がれて死なすも人殺し」

といふのがある。社交から生ずる人殺と、藝術から來る人殺しの二派あることを解する吾輩は、お千代さんの「人殺」の意味

を藝術的に解したのであった。

併し日本のクリスチアンは文字通りのクリスチアンであつた。異端の私が、クリスチアンの校費で養はれたお千代さんとの關係に就いて、彼等は文字通りの「人殺」と見たらしい。

斯ういふ異端の私が、クリスチアンの娘を戀するといふことは、寧ろ驚くべき非望であつたらしい。

或時、私はお千代さんに向つて

「私は佛教徒に近い信仰をもつてをります。あなたはクリスチアンです。こんな兩人が結婚することに就てどう考へますか」

女曰く……

「クリスチアンが異教徒と結婚することはクリスチアンの宣傳を行ふためにも有効であると教へられました。妾があなたと結婚して、あなたがクリスチアンになれば、妾が神から受た福音が、一人の男に傳はる譯であります。それですから、妾はあなたの異教徒たることを厭ひません」

お千代さんは理解の正しい女であつた。併しクリスチアンの先輩たちは、大々の頑固であつた。

人間の問題は立場々々の問題に過ぎない。

〔「日米」No. 8927 September 9, 1924〕

（六〇）

渡米の動機及び

失戀の事情（六）

クリスチアンの娘と異端の男との縁談は、遺愛女學校幹部の大問題であつたらしい。此の縁談は殆ど絶望であつた。或日お千代さんの母は、其事の到底不可能なる旨を述べ「これまでの關係は腐れ縁とあきらめて下さい」と涙ながら私に話した。お千代さんは泣いていた。私も泣いた。そして私は綺麗に別れた。

〇 〇 〇

別れてから三日ほど後、お千代さんの母は私の寓居に見えられた。來意に曰く……

「先日別れ話があつてから、娘は何だか放心したやうですから、どうかこれまで通り交際してやつて下さいませんか」

私は交際することに何等の異議がない。「いつでもお遊びに入らっしゃるやうに」と答へた。

千代さんは其翌日、私の寓居に見えた。顔色が少しく蒼ざめて平生の快活味がない。始終うつむいて、多く語らなかつた。私も多く語るべき興味が起らなかつた。併し私は言ふた……

「あなたは何の爲めに今日私を訪問なさいましたか」

「……………」

「私の戀は破れました。破れた戀人を眼前に見るのは私の

苦痛です」

「……………」

「あなたの學校では異教徒との婚姻を許さないと察します。私はあなたを愛します。併し私は私の良心にそむいてクリスチアンになることが出来ません。私は世間を欺く言葉をもっています。併し自分を欺く言葉をもっていないません」

娘は漸くにして口を開いた。

「妾は此ま、あなたと別れることは出来ません。あなたは正しいクリスチアンでいらつしやると思ひます。妾とあなたは、同じい宗教をもっていると思へます。それがクリスチアンか佛教か或は回々教か知りませんが」

お千代さんの哲學は私によく理解が出来た。彼女は到底形式のクリスチアンでなかつた。

「然らば、あなたは何故に形式に捕はれて、私と結婚するところが出来ないのですせう。學校に對する義務はお金を拂つたら濟みさうなものです。私は喜んで其金を拂ひます」

「學校ではお金なんか取りませんのです。たゞ義務傳道があるばかりです」

「然らばあなたは、義務傳道をなさればよいです。あなたが私と結婚なすつても、私はあなたの傳道を妨げません。あなたは基督教、私は佛教、それで夫婦となつても差支がないでありますか。抑も宗教といふものは、畢竟自分の内にある神を信ずることに外ならぬと思ふのです」

「はあ」

○ ○ ○

お千代さんに別れてから三日目に、澤といふ未亡人で私共のお友達が見えた。澤夫人は、世間ずれた婦人で、私とお千代さんの間柄をよく知っている人である。

澤未亡人は大吉報を齎した様子であった。

「チョット、あなた、妾の家へ来てご覧よ。面白いものがあるのよ。直ですよ。一緒に入らっしゃい」

「なんですか」

「なんでもいゝです。あなたの好きなものを見せてあげます」

あの、ものゝ言ふ間もなく澤夫人は私の手を取って引立てた。此女はそれしやの果てと知っている。私は好奇心に驅られ乍ら澤夫人と同行した。

澤夫人の家に入ると、其座敷に端然と座っている婦人があった。それは我お千代さんであった。

○ ○ ○

お千代さんの語るところによれば、學校の方でも私共兩人の結婚を是認したといふことである。そこで早く結婚したいといふのであった。私は失った玉を再び取返したやうな心地がした。

翌日お千代さんの母に面會し、結婚の承諾を得た。

長い間の懸案たりしお千代さんと私との戀は成就した。私は

國元に歸つて、友人總代を迎ひの爲めに遣はすことを約し、六月末樂しい夢を抱きながら新潟に着いた。

〔日米〕No. 8928 September 10, 1924)

(六一)

渡米の動機及び

失戀の事情(七)

私と婚約したお千代さんは、明治二十七年夏學校を卒業し、次いで義務傳道のために江差に赴いた。江差着後の手紙は随分長いものであった。渡航の船が風浪にあひ、難儀したことや、同舟の人の親切な介抱を受けたことやを記し且曰く……

「豫てお約束申上げ候とほり、あなたの方より、どなたにても御信任の御方迎ひに來て下さり候へば、妾は御同伴いたすべく其日の一日も早からんことを祈りあげ候」

私は新潟の友人と協議し、直に迎ひの使者として友人内山氏を函館に向はしめ、お千代さんの母親を訪問せしめた。内山氏函館着後三日目の手紙には左の事が記してあった。

「君のお嫁さんになるべき御本人は唯今旅行中の由なるが、小生數度千代君の母親を訪問し同伴すべき事を話し候も要領を得ず、頗る怪しみ申候。小生の察する處によれば、クリスマスアンといふ者は陰險にして信を措くに足らず。恐らく君もクリスマスアンに一杯喰はされたるにあらずと存じ候。堂々

たる吾輩の面目は相立ち申さず、憤慨此事に候」

此の手紙によれば色男たるべき私は何だか怪しくなつて来た。同時に神聖なる戀人お千代さんに霧がかゝつて来た。

内山氏の第二信に曰く……

「先便申上げ候後、各所にて聞知する所によれば、君のお嫁さんたるべき人は江差において二週間以前某といふクリスチアン青年と結婚いたし候由、狐につま、れし心地いたし候。母親は相變らず要領を得ざる返事のみいたし候ゆえ、僕は空手で歸國することに決し候」

私の函館にある友人加瀬氏が同地より送れる書に曰く……

「御友人内山先生上杉嬢お迎ひのため、御來函遊ばされ候ところ、嬢は先週江差に於て結婚せられ候由、奇怪至極に候。

越後男子が夷の娘に欺かれ候とありては、大兄は兎も角、我々越後人の一分相立ち申さず候ゆえ復讐いたすべく候」

加瀬君は内山君以上に憤慨して御座る。併し私は是等の諸報を半信半疑していた。依つて室蘭なる友人栗林五朔氏に文通して其實否を糺すべく依頼した。栗林氏は室蘭に商店をもち、當時既に富豪として有名なる人であつた。一週間の後、栗林氏から返事が来た。

「君の愛人たる上杉嬢は小生の調査によれば、江差において結婚せるが如し。別紙同地教會よりの端書相添申候。君の愛する上杉嬢が他に結婚せることは意外にして、予の想像像以上にあり。併しながら人生はこんなものなるべく候。僕は君

の爲めにモットい、娘を捜し申すべく候間失望してはいけな
いよ」

江差の基督教會から栗林五朔氏に宛たる端書は左の如し。

「御問合せの件、先週當教會において某女と某氏との結婚これあり候。右御返事申上候」

クリスチアンの手紙はすべてこんなものである。其手紙に姓名を記さず「某女と某氏」とは何たる曖昧の態度であらう。しかし栗林氏はクリスチアンの下卑でいることを先刻承知していた。

「抑も日本においてクリスト教の學校に學ぶものは其多くは貧民である。貧民必ずしも不可ならず。貧民の中より英雄を出し候こと古來其例尠からず候へども、古來より女性にして貧民中より偉人を出したるためし之無く候。もし偉人を出したりとすれば、高橋お傳、鬼神お松横節のお富くらいに候。貧民の子、上杉千代女史か君との約束を異變しクリスチアンの青年と結婚せる如き、これ即ち日常の茶飯のみ、深く意にとめなさるな。天下に女多し」

天下に女の多いことは私は知っている。しかし天下に私の心を知っている女は一人もない。上杉嬢のみ私の心を知ってくれたと思ふた。而して此上杉嬢は右様のしだらであつた。

……泣くべきか、泣くべからずか
ほとゝぎす……

千代ちゃんが處女作の俳句は今の私の身につまされたので

あった。私は北海道友人の報知を得るたび泣き明かした。

「千代さん、千代さん、あなたはもうしたの、あなたは、ほんとうに他の青年と結婚したの？私はどうしても夫を信じられない」

〔日米〕No. 8929 September 11, 1924)

(六一)

渡米の動機 (一)

日清戦争

友人は笑った。

私は泣いた。

時は明治二十七年七月二十一日であった。

此時、日本と支那との國交は空前の危機に瀕した。七月廿五日、豊島附近に於いて日清海軍の衝突が起り、吉野、浪速、秋津洲の三艦は、清艦濟遠、廣乙と戦ひ、清兵千二百名溺死し、日清兩國砲火を交ゆるに至った。

私は、陸軍砲兵隊の後備下士官であった。

宣戦の詔勅は明治二十七年八月一日に下った。

宣戦の詔勅

「天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ、忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス。

朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヒヲ宣ス。朕ガ百僚有司ハ宜シク朕ガ意

ヲ體シ陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ交戦ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ目
的ヲ達スルニ努力スベシ。苟クモ國際法ニ戻ラザル限り各々權
能ニ應ジテ一切ノ手段ヲ盡スニ於テ必ズ遺漏ナカラムコトヲ期
セヨ。惟フニ朕ガ即位以來茲ニ二十有餘年。文明ノ化ヲ平和ノ
治ニ求メ事ヲ外國ニ構フルノ極メテ不可ナルヲ信ジ、有司ヲシ
テ常ニ友邦ノ誼ヲ篤クスルニ努力セシメ幸ニ列國ノ交際ハ年ヲ
逐フテ親密ヲ加フ。何ゾ料ラム清國ノ朝鮮事件ニ於ケル我レニ
對シテ着々隣交ニ戻リ信義ヲ失スルノ舉ニ出デムトス。

朝鮮ハ帝國ガ其ノ始メニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨
立ノ一國タリ。而シテ清國ハ毎々自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ、
陰ニ陽ニ其ノ内政ニ干渉シ其ノ内亂アルニ於テ口ヲ屬邦ノ極難
ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ。朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ、兵
ヲ出シテ變ニ備シメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將
來ニ保タシメ東洋全局ノ平和ヲ維持セムト欲シ先ヅ清國ニ告グ
ルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ翻テ種々ノ辭柄
ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ。帝國ハ是ニ於テ朝鮮ヲ勸ムルニ其稅政ヲ
釐革シ内ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセム事ヲ
以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清國ハ終始陰ニ居テ
百方其ノ目的ヲ妨碍シ剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其
ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其ノ力ヲ以テ其ノ
欲望ヲ達セムトシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ、我艦ヲ韓海ニ要撃シ
殆ド亡狀ヲ極メタリ。則チ清國ノ計圖タル明カニ朝鮮治安ノ責
ヲシテ歸スル所アラザラシメ帝國ガ率先シテ之ヲ諸獨立國ノ列

二伍セシメタル朝鮮ノ地位ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙
晦ニ付シ以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲシテ永
ク擔保ナカラシムルニ存スルヤ疑フベカラズ。熟々其ノ爲ス所
ニ就テ深ク其ノ謀計ノ存スル所ヲ揣ルニ實ニ始メヨリ平和ヲ犧
牲トシテ其ノ非望ヲ遂ゲムトスルモノト謂ハザルヘカラス。事
既ニ茲ニ至ル。朕平和ト相終始シテ以テ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣
揚スルニ專ラナリト雖モ、亦公ニ戰ヲ宣セザルヲ得ザルナリ。
汝有衆ノ忠實勇武ニ依頼シ速ニ其ノ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝
國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス」

色や戀やの閑事業は、平和の時のすさびである。日本男兒の
血は國家の危急存亡に關しては其閑事業を抛擲せしむるほどの
因習を有つ。私は進んで軍國のために盡さんとして召集に應じ
た。私の實兄も同じく召集に應じた。

私は三本杉孫六の名刀を携えて友人に送られながら八月五日
に新潟市を出發した。見送りの人は棧橋を圍んで萬歳を三呼し
た。私は小蒸汽船に乗った。關矢夫人と内山氏は私を葛塚と云
ふ所まで送つて下さった。

私の心機は日清戰爭の爲めに一轉した。密のやうな戀から一
躍して軍國のために身を捧ぐべき武勇の兵卒と化した。

○
車にゆられながら仙臺に着いて直ちに軍醫部に出頭して身體
検査を受けた。私の宿痾はまだ全癒して居らなかつた。検査の
末、免疫の札を渡された。

〔日米〕 No. 8930 September 12, 1924

（六三）

渡米の動機（二）

桑港上陸

宣戰の詔勅既に下り、我軍豊島成歡に於て勝利を占む。國民
は勇躍奮起して報效を期し海内競ひて軍事公債の募集に應じ、
壯丁の志願兵たらんとするものあり、義勇團編成の認可を請ふ
ものあり、國民士氣の激越實に空前と稱せらる。

九月十三日大本營を廣島に進めむ爲め、天皇陛下東京を發し
給ふ。十四日西京に着せられ、先帝の御陵を拜し給ひ、十五日
廣島に入り、第五師團司令部を大本營に充て、其中に行在を定
め給ふ。

九月十六日夜平壤の捷報あり。同日十九日黄海の捷報達す。
龍顏殊に麗しく、海陸兩軍に賞譽の勅語を賜ふ。

十月十五日臨時帝國議會を大本營の下に召集し、七日間の開
會を命じ給ふ。衆議院議員は一人の缺席者なく、劈頭一億五千
萬圓の軍事費を可決し、後又内閣大臣に對し「他國の干涉の爲
めに終局の大目的を沮廢せざらんことを建議するに決し」尋い
て天皇陛下に「頌徳表」を上るの議を可決した。

○ ○ ○
海内擧げて報效のために働く。而して私は如何にして報國萬

分一を盡すべき乎。

當時我國の憂ふる所は、戦争に於いて支那を恐るゝところは無い。唯その恐るゝ處は他國の干渉であつた。帝國議會が殊に内閣大臣に對し「他國ノ干渉ノ爲ニ終局ノ大目的ヲ沮廢セザランコトヲ建議」せるは禍根の此處に潜むを憂ひたからであつた。而して他國の干渉は如何にして起るべき乎。そは日本參戰の目的を了解せざるより起るのであらう。私は一念茲に思ひ到り、對岸の米國——此處には我舊友知己が多く在留している。我不肖と雖も日本參戰の目的を直解す。此事情を先づ米國在留の同胞及び米國一般の民衆に告げざるべからずと感じた。

○ ○ ○ ○ ○

私は直に旅装を整へ、當時の農商務大臣たる榎本武揚子に其目的を告げ、當時桑港領事たりし珍田捨巳氏に紹介を請ひ、十月廿日米國郵船オシアニック號に搭乘し翌十一月桑港の客となった。

今日の人々は、よく國民外交の言葉を使用する。國民外交とは政府の手を離れて各自が他國人と了解し合ふことである。若然りとすれば、私が渡米の目的は國民外交の先驅者だとも言へる。

私は參戰の事情を傳へるために幻燈映畫を百枚ほど携帯した。石油ランプの幻燈器も持参した。そして桑港、ポートルランド（ポートルランド萬國博覽會）及オークランド、サンノゼの各市でその映畫を米國人に縦覽せしめた。

私の携帯した映畫は今日から考へると實に滑稽を極めたものであつた。其多くは支那人と日本人とが喧嘩をしている浮世繪であつた。唯寫眞として黃海々戰の遠望——それも砲火を開いている畫ではなかつた——其他は田舎の兒供に見すべきほどのもので、寫眞術の進歩した米國ではお話にならぬ俗惡なものであつた。

併し各所の映畫會では可なり多くの人が集まつた。入場すべて無料。

○ ○ ○ ○ ○

私は桑港に着するや、領事館に珍田氏を訪ふた。然るに珍田氏は十月桑港を立つて歸朝せられた。太平洋の眞ン中で行違ふたのであつた。

菅原傳、井上敬次郎の諸氏は布哇に去つた。

此當時澤木吉三郎（後東洋汽船文書課長）は桑港新聞に、日向輝武氏は金門日報社に永井元氏を援けて記者生活をしていた。私は兩氏に通譯を頼んだ。

◎美人記者の訪問

この頃桑港にはエキザミナー、クロニクル、コールの三新聞が活動していた頃であつた。何れの新聞も日清戰爭の記事で紙面を賑していた。

私が桑港に着いた翌日、日向氏は一人の白美人を私のルームに連れて來た。それはコール新聞の女記者であつた。彼女は一時間ほど私の話を聞き、翌日の新聞に肖像を入れて二欄ほどの

戦争談を載せた。日向氏の語る處によれば、此記事は一種の英雄小説で、君を戦争の士官として取扱ひ、負傷した爲に米國に渡つたと書いてある。

私は始めて米國新聞の誇張の記事に驚かされた。

〔日米〕No. 8931 September 13, 1924)

(六四)

渡米當時の失態

私は澤木君の周旋でゼシー街に住む白人の家に一室を借受た。古つぼけた裝飾のしてあつた室であつた。主婦は獨逸人だといふ話だ。五十格好の親切な女であつた。此室には日向君(輝武)と澤木君とが代る／＼尋ねて通譯の勞を執つてくれた。それから故郷の人では松村信太郎といふ人が時々見舞ふてくれた。此の人は英語の達人ださうである。

或日、日向君は私をカリフォルニア街の方に案内してくれた。ジヨンス街から坂を登つていつたのであつた。其日は小春日和で、暖であつた。坂の途中で私はフロックコートを脱いだ。すると日向君驚き乍らいふ……

「桑港でフロック姿の紳士がコートを脱ぐものはない」

と叱るやうにたしなめる。

「併し暑いから脱ぐのに不思議はあるまい」

「イヤ脱いでいけない。アメリカでそんな風をすると巡査

につかまるよ」

止むを得ずコートを着、大汗になつてカリフォルニア街に上りついた。

アメリカといふ國は自由國だと聞いていたが、暑くても上着を脱ぐことすら許されていないとあつては實に不自由極まる國柄だと思ふた。

〇 〇 〇

或日松村君が私の室に尋ねて見えた。室内に入るや否や「君もやっぱりやつたな」と言ひながらクス／＼笑っている。

何がおかしいのか私には解せない。

「さあ君、アップルを二つたべ玉へ」

と陶器の中に盛つたのを勧めた。松村君はアップルたべないで笑っている。

「君何がおかしいんだ」

松村は言ふ……

「君この入れ物は小便壺だよ」

「エッ」

松村はアップルを盛つた器物の講譯を始めた。そして僕も渡米當時、同じ失策をしたといふ話をした。

私の室にあつた便器なるものは實に美しいものであつた。白地の陶器の外部に美麗な金の模様が出来出され、蓋も同じい模様である。

私はベッドの下から此の名器を見つけたしたのであるが、こ

れが小便壺なることを知らう道理はない。日本などならば先づ床の間に安置すべき名品であると思ふた。

○ ○ ○ ○ ○

ある日澤木君とオークランドに同行した。私はタバコを好む癖があつて、夜があけてから寝るまで始終煙と親んでいる男である。ある友人は私を煙突(チムネー)と仇名したほどの喫煙家である。そこで、王府行の汽車(此當時桑港の市街鐵道は大部分がケーブルカーであつた。マーケット其他が電車になつたのは桑港震災後の事である)の中で、私は、其當時流行していた「カメオ」という巻タバコをふかした。然る處、背後の椅子にある某白人が私の肩をつゝく。ふり返つて見ると何だか譯の分らぬことをいふ。澤木は驚いたやうな體で私に話すには「此汽車の中でタバコをふかしてはいけないので、注意されたのだ」といふ。イヤハヤ米國という國ほど窮屈な國はない。吾輩の如き自由の日本に育つたものは到底此國には住めないと思ふた。

○ ○ ○ ○ ○

ゼシー街の借室に歸つた所が、主婦は風呂呂に入るべく私を待遇してくれた。澤木君は其趣を通譯してくれたので、裸になつて、浴室に入った。左のネジが湯、右のネジが水が出るといふ。なるほどネジると其通りだ。そこで程よく湯と水とを浴槽の中に入れ、ザブザブと湯を使ふた。其の湯と水とはどこにもはけ場がないと見えて、溢れながら次の室に氾濫した。主婦は驚い

て何か大きな聲で怒鳴る。何だか解らない。一浴の後室に歸ると、澤木君は青くなつていた。

「君アメリカの入浴は最初から湯壺の中に入るもので、外にいて湯などかぶるものぢやないよ」

誠に恐れ入つた國だ。湯さえ録にあびることが出来ない。アメリカの文明といふ奴は、人間を無理に型に打込む文明で、不自由を自由といふ言葉でしる國だと思ふた。

〔「日米」No. 8332 September 14, 1924〕

(六五)

浪人の生活の事

永井元君

大和正夫君

日清參戰の目的を世界に報告すべく渡米した私は、太平洋沿岸で少しばかりの宣傳をした。その宣傳が何程の効果があつたか、無かつたか證明しがたい。併し少許の旅費を懐中にして渡米した私は、二、三ヶ月桑港に滞在している間に費し盡した。

私は當時桑港に發刊せる『金門日報』(永井元君主宰)、『桑港時事』(大和正夫君主宰)に往來して先輩諸君の指導を仰いだ。此人々は政治的有志家で堂々なる評論家であつた。同時に貧乏の大家であつた。

此當時の新聞生活ほど面白いものはない。『金門』『桑港時事』

稀有に屬するのである。併し佐藤君は此の患者を恭しく待遇した處より察すれば、此青年は可なりに豊なる男であると思ふた。後に聞いて見ると此人は小池實太郎といふ甲州人で某白人の家庭に働いているといふことであつた。

私は明治二十八年の春から、桑港新聞の筆工生となつた。私は記者とはいはない。何となれば當時の新聞は石版刷で、コロンペーパーに毛筆を以て版下を書き、それを石版ずりにしていたのであつた。社長大和正夫君は石版ずりの職工兼主筆、兼料理人であつた。私は記者兼筆工生、兼時々配達もやる「フロツク姿の配達夫は君が最初だらう」と笑う。

○ ○ ○ ○

此當時の新聞生活は、全く元始的の生活であつた。一日三度の飯といふ言葉はあるが、吾輩人間には一日一度やら二度やら、しっかりとしていない。或時は三度、或時は一度、或時は食はないこともあつた。私は食ふ金のないときは仕事を濟ましてから大概高島多米治といふ齒科醫の所で浪人仲間と碁を打つた。水の呑んで碁を打つことは餓えをしのぐ妙法なることを此とき悟つた。

〔日米〕No. 8933 September 15, 1924)

(六六)
田園生活の事

齊藤徳三郎君

明治二十七年頃の在米日本人間の新聞生活は今日の人が想像にも及ばざるほどの貧窮であつた。新聞社長は一番長時間の勞働を續ける。記者なるものは、素より有給の者など一人もない。それゆえ着物が破れ、靴に穴があき、下着の着換へがなくなると、白人の家庭に働き口を求めて若干の金を得る。而して其若干の金を受取り新聞社に遊びに來たが最後、ピーアをおごらせられる。レストランに連れて行かれて支拂はせられる。苟くも新聞社に出入りする者はポケットを叩く度胸がなければ寄り附けないのであつた。

私なども小さくなつていたら、一年位下宿屋に籠城するほどの金があつたのだが、有志家的文士の群に飛込んだが爲め、半年ならずして持物まで賣こかし、御陰で天下の大浪人となつて仕舞つた。

今日になつて考へて見ると、私はこの大浪人になつたことが幸福であつたと思ふ。なまじケツチンの隅ツこでエスマン／＼を續けシミタれた端した金で小店などを持たなかつたことがよかつたと思ふ。

人間男子と生れたる以上、浪人の生活の長いほどありがたい譯だ。浪人一度風雲を得れば蛟龍の如く登天する。

明治二十八年八月、私と齊藤徳三郎氏はサンノゼ附近の果物摘採の仕事に同行した。齊藤氏は私より一年前に渡米し、桑港新聞の手傳ひをしていた。前申す如く新聞社は財政困難にして多くの浪人を養ふの資力が無い。居れば居るほど痩せて行くばかりである。既に此春、八木原長治氏は栄養不良の爲め眼病を患ひ歸朝した程である。

そこで兩人は相談の結果、サンノゼに旅行した。此處には竹川藤太郎（黙囀子）が下宿屋を始めていたので心強い。

滞在五日ほどの後、プルム拾ひの口が掛った。一噸の拾ひ賃が一弗五十仙位と記憶する。兩人は山口縣人藤川某と共に小農園に入りプルム拾ひを始めたが、藤川一人でする仕事は我等兩人でやりきれない。何でも一日掛りで我等は一噸ほどしか取れない。即ち一人當り一日七十五仙、それに手前口である。

此頃農園の食料は多く團子汁で、それに少しばかりのペーコンを浮べるのであったが、我々は仕事は頗る下手なれども、口はなか／＼味さ、の名人である。毎日團子汁では到底我慢がしきれぬ。そこで卵を買ふ。牛肉もたべる。米や醤油なども小買する。咽喉が乾くといふので水瓜を買ふ。こんな具合だから一日七十五仙は食料及び買食ひで消費される。十日程で仕事が終わる。サンノゼに歸った時は被服の破れと、くたびれ儲けであった。齊藤氏は僻易して再び桑港新聞に歸り、私は居残った。いはゞ下宿屋に質に居たような形である。

○ ○ ○

其後また葡萄つみの仕事が掛った。竹川君は私をボス各に推薦し、十五、六人の書生及布哇轉航の労働者と共に十五哩ほど南方の農園に赴いた。然るに此葡萄園は甚だ貧弱なクラブであった。仕事慣れた労働者は先づそのクラブの貧弱なるを見て、逆も引合はないと申出し、就働を拒絶して他に去った。そして我等四人の書生だけ取残されたが、人数が足りないので働き口は失敗に歸した。此四人連は徒歩旅行をなし、道々働き口を求めたが雇ふ人がなかつた。同行四人で僅五十仙しか持合せがない。中飯はドーナツとソーヂを買ふた。後は途中で無一文となり、秋の日は原野の中で暮れた。

ある農家の厩に一泊を乞ひ、翌日道々食を乞ふたが四人連の多勢では食が得難い。其日の夕刻に上松隆人といふ信州の人が葡萄園に人を供給している處を偶然見附出し、其キャンプにのめり込んだ。翌日此葡萄園に働くことにした。上松君は私の舊知であった。

私は始めて葡萄をつむべく農園に入った。小さな鎌を渡された。プルム拾ひの失敗もあるから今度は大奮發して働いた。處が切るべき筈でない指や手のひらを切る。血が流れる。ハンカチで繃帯する。又切る。又繃帯する。午前二時間ほどに七ヶ所ばかり手を負傷した。

「モーやめだ」

上松君は氣の毒氣に笑ふ。私は其日負傷兵の資格でサンノゼに舞戻った。

〔日米〕 No. 8934 September 16, 1924)

再び記者生活に入る

(六七)

サンノゼに戻って竹川黙囃子の下宿屋に滞在していると、ある日某園主の許からブルーム拾ひの日傭働きが入用だとの口が掛って来た。所要人員は三十人である。

日傭働きは請負ひ仕事と異なり、一日一弗だけは屹度貰へる。其労働者が役に立たぬと認められるれば追出されるまでの事である。私は日傭働きの最初の試みをやって見た。

同行者は森島某といふ青年の外二十五人ほどであった。

森島青年は廣島縣の産で、其頃十八、九歳の極めて快潤な男であった。一同午前六時に農園に入り、午後六時に終るのである。森島青年は此日傭人の親分のやうな勢ひを示していた。

仕事が始まる。銘々がバケツを携へてブルームを拾ふのである。白人の監督者が一人水壺を携へて見廻りをしている。

森島は時々日本語で號令をかける……。

「休めー！」

「来たぞー！」

と怒鳴る。それは監督者が遠方に行つて我々の目の届かぬ距離になると「休めー」と號令し、監督が近傍に来ると「来たぞー」と號令するのである。此頃のデーウォークは監督者の目を盗

んでなまける風が一般労働者間に存在したのであった。

○ ○ ○

私は或日、森島青年に向つて言ふ……

「貴様は人が頼みもしないのに監督者の番をして時々號令をかけるが、あれはよくない事だ。他人は知らぬが僕はデーウォークをする時、實に日が長く感じる。此長い日を短く働く方法は仕事に興味をもつことである。僕はブルームを手鞠と心得、其鞠をバケツの中に手早く拾ひ込み、今日は幾つ拾つたかを勘定するのが長い時間を短くする唯一の方法だと考へている。然るに貴公は、監督者を見張りながら時々號令をかけて人の興味を邪魔する。それは善くない考へだ」

森島は言ふ。

「だって働いても働かないでも一日一弗は取れるのだ。働くだけ損です」

「馬鹿なことを言ふな。人間は過勞でない限り、働くことが樂しみの一つだ。ホームンの目を盗んで働きをなまけるなど最も卑しむべき苦痛だ」

「日本人はアメリカに於いて是から大發展をしなければならぬ。大發展をするには労働が基礎になる。その基礎たるべき労働界に不信用を招いたならば日本人の立場はあるまい」森島青年は私の説を謹聽していた。そして翌日から號令をかけた。彼は善良の素質をもっている青年であった。併し布哇から轉航した労働者は概して奴隸の根性に慣らされていた

のであった故容易に其悪弊から脱することが出来なかつた。

ピース・ウォークの時は人二倍の働きをして金を多く儲けんとあせり、過勞して粗食する。之に反しデーウォークの場合には半人前の仕事しなしないで、うまい物をたべやうとする。實に見下げた心掛けである。

私は日本人勞働界の空氣が如何にも其日暮しの腰掛的なるにあきれた。日本移民の數は年々歳々増加する。而して其九分九厘までは鐵道人夫にあらざれば水草を逐つて轉居する人々である。少數のスクールボーイを除くの外は前途に望みを囑するに足るべき根底がない。

私は二ヶ月間の田舎生活から桑港に歸つた。再び桑港新聞の筆工生兼記者となつた。而して相變らず貧乏の生活をつゞけた。此冬、桑港新聞を手傳ふ傍河原愛嬌、岡田溪水氏（依三郎）氏の發起になれる『東洋』といふ雜誌の記者になつた。

此時野口米次郎（現慶應大學教授、英詩人）がパロアルト地方から桑港に見えた。彼は此時十八歳の青年であつた。

一日彼と會し、雜誌『東洋』の翻譯記者たらんことを勧めた。彼は快諾して私と共に『東洋』の編輯に従ふ事となつた。

雜誌『東洋』もやはり新聞同様財政は貧弱であつた。支配人岡田君は車輪の如く働いていたやうであるが、三人の糊口は容易でなかつた。野口青年は腹へらしの名人である。時々ひもじいと不平が出る。岡田は出たまゝ、三日位歸つて來ない。一日五仙のブレッド一本で兩人は天下國家の議論を書いた。

〔日米〕 No. 8935 September 17, 1924

（六八）

新聞雜誌生活の事

雜誌『東洋』を野口と私とが編輯したのは約二回ほどで遂に自滅した。自滅の原因は収支相償はず衣食の料を之れによりて得る能はざるが故であつた。

明治二十八年『桑港』『金門』の兩新聞は貧乏世帯の持合ひで合併した。永井元君は他に職を求め、山田作太郎（鈍牛又は寧留村と號す）は『桑港新聞』に入り、同二十九年大和正夫君は歸朝し、『桑港新聞』は私と齊藤徳三郎君とが其の後を引受けたが、財政いよく窮乏し、同年夏頃遂に廢刊した。

私は曾て在米邦人、新聞雜誌の古記録を按じ『日米』紙上「七千號の回顧」中に左の事を記している。

「在米邦人間に新聞の始まつたのが、明治二十一年の春で『蒸汽船』といふミニミオグラフ刷のであつた。此發起人は大澤榮三、松野菊太郎、米山梅吉であつた。其の翌年明治廿二年の春頃『十九世紀』といふのが愛國同盟から發行された。

雜誌の初めて現れたのが明治二十四年の春で『遠征』といふのであつた。『十九世紀』は現在日本政界で名の知れて居る菅原傳、山口熊野及大和正夫、巨理篤治等自由黨に關係のある連中が起したものだ。

其當時桑港の所謂浪人組は愛國同盟といふ政社を起して熾に日本の壓制政治に反抗したもので、最初ミミオグラフの新聞を發行しそれを本國同志の間に配布したのだが、すべて發賣禁止を喰ったのであった。日本官憲は其新聞といふも名ばかりの小紙片が横濱の埠頭へ着くや否や發賣禁止を命令したものだ。

『十九世紀』が明治廿三年に日本から活字を取寄せて、愛國同盟の浪人連が總掛りで、第一號(月刊)を發行した。恰度今の『北辰』位の頁數であつた。其書いてある事は元氣のいゝもので、流石は發賣禁止を喰ふだけ夫れだけ、日本政府を罵倒したものであつた。

何分十七、八歳から二十八、九歳の連中が、自由の氣魄を發揮したのだから、ビスマークでもビーコンシルドでも一呑みの元氣で外交論はやる。政體論はやる。領事攻撃もやる。其鋒當るべからずであつた」

○ ○ ○ ○

『新世界』は在米日本人日刊新聞中最古の活字新聞である。明治二十七年本國より活字を取寄せ、此當時ヘイト街基督教青年會(長老派に屬し、ドクトル・ストージ氏開基)に在りし副島八郎君中堅となり、活版職工としては石川福太郎(舊姓中澤)梅田某など東京秀英舎の一等職工等が工場を受持ち同年四月三日に第一號を發行して以來、貧乏世帯を持ち續けた。

『桑港新聞』『金門日報』が廢刊せる明治二十九年には、邦字

新聞は『新世界』一つとなつた。

○ ○ ○ ○

私は明治二十九年春、浪人共を集めて『梁山泊』と稱する一社を起した。其機關として『腮はづ誌』なる滑稽諷刺、俗文藝を内容とせる月三回の雑誌を發行した。これが在米邦人中、滑稽雑誌の嚆矢である。

此雑誌は各新聞記者、詩人、畫家、小説家などが匿名で思ひ切つたものを書くのであつた。可なり世間は面白がつて讀んだやうであるが、總収入は一ヶ月廿五弗位しかない。然るに居候は三人位あるルーム代を拂ふて四人のものがたべて行かうといふのだから、慘狀を極めたものだ。

『腮はづ誌』社は其頃ボスト街のラージングの一室を月四弗で借て居つた。此室にはスリー・クワターのベッドが一つ据はつてをつた。此室には三人の居候があつた。居候兼記者兼配達人である。年長者が五月女哲といふ都々逸の作家、渡邊寛信といふ川柳の作家、小林明十郎といふ十八歳の青年配達夫、それに社長たる僕を加へての四人が、此ルームに起臥するのである。明十郎は私のベッドにくさい足をもぐり込む。五月女と渡邊とはフロアの上に枕を並べて寝る。其上此のルームの中で自炊をする。尤も自炊道具は頗る簡單なもので、一本心のオイル・ストーブが一個、カップとソーサーが四組、スプーンが四本、ブリキ鍋が二個、これが勝手道具の全部である。此品々は私がハーワード街の古道具屋で五十仙で買入れたものであつ

た。

雑誌は私が版下を書いて、それを石版に印刷する。私は既に
桑港新聞で石版ずりの技術を覚えていたのであった。

ある日此雑誌に大變な事が持ち上がった。其次第は下の如く
である。

〔日米〕No. 8936 September 18, 1924)

（六九）

新聞雑誌生活の事（二）

『臆はづ誌』社同人等は此其日の食事費を如何に工面すべき
か、大問題であった。

ある日、私は木村明十郎に雑誌廣告料を集めさせた。徴収す
べき額十餘弗のビルを持たせて出した。時に午後四時頃であつ
た。

ルームには我々三人が明十郎の歸るを待ち夕食の買物をしや
うと計畫していた。我等は今朝より粥一碗しか食べていない。

○ ○

我々は雑誌紙上で可なり太平樂を並べ、社會を嘲り、事物を
諷し、勝手な理屈を捏ねまわしたり、「人間は自然を征服すべし」
などと大言壯語はしているもの、自分等の腹に對しては全く
權威がない。「人間は自然を征服する」ことが出来るかも知れ
ないが、胃の腑を制駁し「お腹がすいてもひもじゆうない」と

いふ處にまでは徹底し兼ねる。渡邊寛信は先づ嘆聲を洩らし始め
た。五月女は「尻とり都々逸」の手をやめて大あくびをする。

明十郎は午後七時、に漸く歸つて來た。

彼の顔を見ると眼はトロリとして酒氣を帯び、呂れつも亂れ
ている。

「どうした、金はいくら集まった」

「五弗ばかり集まった。併し道で舊友に出くわして、久し
ぶりで千代志に行つて、皆んなで飲んで仕舞ふた」

明十郎は平氣である。私は非常に驚いて其不埒を詰責した。

「おい、明十郎、我々三人は今朝から碌に食べないで貴様を
待っているのだ。それに集金を飲んで仕舞ふたでは濟むまい
が」

彼れは私の詰責にあふれて低頭していたが、奮然と立つて外
へ出て行つた。

自殺でもするんぢやないかしらと一同は少しく不安の心持を
していると、二十分程して明十郎は歸つて來た。彼れは大きな
サツクを擔いでいた。それをドサンと下に置いて、其サツクの
中から色々の品物を取出す。

「サア、これがベーコン、これがハム、ブレッドも澤山ある
んだ」

一同は呆れながら其品物を見ると、すべてが切れ端しである。
中に優勢を示しているのは一斗ばかりの米であるが、其米の中
には鼠の糞が二割程混じっている。

明十郎は私から小言を云はれたので、直に友人の白人家庭に働き居るのを尋ね、其家で不用の残品を貰ふて来たのであった。

一同は安堵の眼を輝かした。

渡邊君は、其残物を一々整理し鼠糞入りの粥を炊いた。そして夕飯を済ました。

渡邊君は丹精の人であつた。毎日米の中に鼠糞を選び分けるのに全力を傾注して御座る。そして其米を一本心のオイルストープでそろ／＼と炊くのであつた。同君の説に従へば粥といふものは水の分量ほどに殖えるもので一八といつて米一合に水八合を入れて炊くのが理想的だといふことである。併し我々は之を粥と呼ばずして糊と呼んだ。

「また糊を嘗めようかな」

などと、ふざけて居た。

渡邊君は梁山泊の大膳職の形であつた。彼れは決して他人に飯を炊かせない。其故は、他人に炊かせると米を澤山使つて不経済だといふことである。こんな経済家が日本に澤山あつたら米騒動などは起らず、外國へ向つて逆に米を輸出することであらうと思ふた。(因に記す、渡邊寛信君も五月女哲君も物故せられた。木村明十郎君は其後歸朝し、日本に納まらずに朝鮮に渡つたそうであるが、其後の消息を聞かない)

○ ○

「日米」の前身

ジャパン・ヘラルド

『臆はづ誌』は十二號まで續けたが、總収入一ヶ月十五弗では如何しても食い切れぬ。此時、曩に『東洋』を廢刊した岡田溪水は、突然『ジャパン・ヘラルド』といふ日刊新聞を起すといふ企が熟し社員には、米田實(元東京朝日外報部長?、法學博士) 横川省三(後日露戰爭の際、滿洲に入り鐵橋を爆破し、露軍に捕へられて銃刑せられたる快烈の士) 及び高田米華、川島天涯(現フレズノタイムス社主) 等で、私にも参加せよとの勧誘を受けた。『臆はづ誌』で食べ切れぬ私は、再び日刊新聞生活に入った。時は明治二十九年の秋頃であつた。

『ジャパン・ヘラルド』は四ページ大の新聞であつた。桑港には日刊が二つになつた。

〔「日米」No.8937 September 19, 1924〕

(七〇)

新聞雜誌生活の事(三)

岡田溪水 米田實 横川省三 川島天涯 高田米華

『ジャパン・ヘラルド』の經營は御多分に洩れず頗る困難であつた。嘗て「七千號の回顧」にいふ…

「支配人たる岡田は車輪の如く外交をやつたが、時々支那人の石版屋から印刷を斷られた。此とき一ヶ月の印刷費は

僅々二十弗であった。日刊新聞の印刷費としては實に廉價のものであったが購読料、廣告料を合して一ヶ月五十弗に足らぬ収入であるから逆も遣り切れたものでない。我々は一日一回カーネー街の五仙ミール（此頃カーネー街には五仙ミールがあり肉、ブレット、カヒー、ポテトを食はせた安いレストラン）があつたが、引合はぬ爲一年足らずで廢業した）を食ふのが樂みであつた。所が或時、高橋孤泉の話に岡田は今日支那飯を一人でパク付いて居たといふ。私は岡田に何故左様な大金を支那飯で使ふかと詰責すると、岡田は目を白黒して答へるにはアレは五仙しか掛らぬといふ。馬鹿を言へ五仙で支那飯が食へるかといふと、ナニ五仙の飯にフリーの菜汁が付いてくる。其菜汁を飯にかけて掻込むので五仙で上がるのだと説明されて大笑ひとなつた事がある」

「日米新聞のグラントバーに當るジャパン・ヘラルドが筆戰と貧戰とを續けていた明治三十年の夏、久しく會はなかつた福音會長安孫子久太郎氏が新聞發行所たるマーチャント街の五階に私を訪問された。シミでひかつた服、膝坊主の處が突出しているパンツを穿いて、コニ／＼した顔でやって來られた。來意を問ふと、今度福音會中の有志が「金門舎」といふ下宿屋を設立したから、其看板を書いてくれといふ事である。私は渡米以來未だ曾て揮毫を頼まれたことがない。無論私が字を書くか書かぬかさえ知る者なき桑港で、突然この依頼を受けたのだから少しく驚いたが、心の中では「彼予の造

詣を知れり」と非常なる愉快と誇りとを覺えたのであつた。早速快諾はして見たが、此大書家たる乃公筆を所持して居らぬ。少々當惑の體で筆が手許にありませんからと言ふと、生氣輕に階段を降りゆき、支那人町で大筆一本を買つて來た。やがてインキ壺を傾けて筆を染「金門舎」と三字を認めた。字の乾く間いろ／＼な話の序でに談新聞事業に及んだ。私は安孫子君に向つて「新聞は社會の木鐸萬民の燈明臺也」と述べ立てたが、内輪の苦難——ブレットがたべ切れぬ話はしなかつた。越えて數日の後、安孫子君は再び訪問せられたが、今度は新聞を出して見たいから相談に來たとの事であつた。私は直に「此新聞を買収したらドーです」といふと、「いくら位で買はれますか」といふ。「左様、社の全財産二十五弗でよさ、うだ」と答へると、先生驚いたやうな様子で「廿五弗は少々高いやうだが月賦十ヶ月拂ひなら引受けてもよいと思ひます」といふ。そこで支配人たる岡田君に話すと、「よからう、二十五弗で手を打たう」と十分間で譲與の話がまとまり、私は大和社長に教さした石版印刷の技師長格、米田切水は編輯長の格、岡田は外部係、森本市太郎（福音會員にして現今ペルー國に商社を所有する人）が事務係、安孫子君が總監督で、ジャパン・ヘラルドを『日本新聞』と改題して、明治三十年六月ゴールデンゲート街金門舎の二階の一屋から第一號を發刊した。これが安孫子君の新聞に首を突ツ込んだ初めてある。

「私は既に新聞に苦い経験をもっていたから、此新しい日本新聞でも矢張り飯は食はれぬと覺悟し、新聞を手傳ふ傍一時休刊していた『腮はづ誌』を第十三號から再興して、又もや天下の浪人共を集めた。イヤ集まった。天才畫家高橋孤泉、野口米二郎、川島天涯、水井東眼などの連中を始め、社友としては石丸喜一、山田亮、西博夫、深瀬孤舟、渡邊寛信、大岡陽太郎、上田恭輔（現在南滿鐵道局總裁文書課長？）などがあって、梁山泊は再び盛大と貧乏とを極めたものだ。私は此の雑誌の主幹であつた爲、大王の尊號を奉られたが、實は甚だ悲しむべき大王で、居候共の飯をたくのが大王の仕事であつた」云々。

〔日米〕No. 8938 September 20, 1924)

(七一)

『腮はづ誌』の青年

野口と高橋

雑誌『腮はづ誌』は此當時色々な問題を惹起した。元々滑稽雑誌といふものは簡單なる小文字の間に大なる含蓄をもつ。特に其諷畫の如きは一幅の畫、數十萬言の文章よりも効果を奏するものである。

『腮はづ誌』は諷刺文、狂畫、俗謡、俳句等を内容としていた。其の中狂畫、諷刺畫においては近世稀に見る處の高橋孤泉とい

ふ十八歳の天才がいた。

野口米次郎と高橋孤泉とは同年輩の青年で、此時代に私を最も手古摺らせた青年である。この兩青年は一は文學に、一は繪畫に其天才を發揮したのであつたが、其我儘の程度は同様であつた。彼等は決して他の先輩の言に従はない。従はないのみならず、年長者に喰つて掛り、喧嘩の末腕力沙汰を演ずる。米次郎は腕力家でなかつたが孤泉は弱い癖に腕力家であつた。彼はジャパン・ヘラルド時代に於いて支配人たる岡田溪水に喰つて掛り、溪水にねぢふせられたのが残念だといふので、出刃庖丁を取出して溪水に立向ふたことがある。此時米田實は振へあがつて私に其の由を告げに來て喧嘩を差止めるやうに哀願した。

「高橋、何をするか、馬鹿野郎！」

と一喝して喧嘩の中に入り、其庖丁を奪ひ取り、一室に引ッぱつて來て説諭すると

「わかつたよ」

といふ。此青年は何うした譯か知らんが、私の言ふことには決して反抗しない。あらゆる友人に喧嘩をした揚句、私の所にやつて來る。そして私とは決して争はない。そして彼等のもてる天才を私の處で發揮することに努めたようだ。

私は是まで青年に向つて教育がましいことを決して言ふたことがない。私の所に集まる青年にむかつて其缺點を責めない。

私は青年の缺點は直に其の青年の長所であると考へていた。今もさう考へている。此觀察法は誤りなきものと思ふている。私は青年のふしだらを道學先生の如く決して咎めだてたことがない。「後によくなる」と思ふて可愛がつていた。

私の經驗によれば、道學先生の如く、クリスチアンの如く一にもいけない二にもいけないで、いけない盡しで教しへては決して有爲の人材を作ることが出来ないと思ふ。道學先生や、クリスチアンの人々等が、イケナイといふことは果してイケナイのであらう乎。恐らく「イケナイ」といふ型を以て萬人の青年に臨むのではあるまい乎。

「イケナイ」「イケナイ」といふ人の許から離れて來た所謂不良青年は我等の所において善良の天才たることが出來たのであった。

野口米次郎、高橋孤泉の如き、眞田清吉（現東京靴型會社技師長）の如き、すべて當時十八、九歳の青年で、世の俗人には仕末におへぬ青年と目されていたのであったが、其仕末におへぬ餓鬼共は後來一廉の人物になったのであった。

俗人がわるいといふ青年の中によいのが出來、俗人が信用するよい青年の中にはヘボ牧師と店番と金持と、利己主義の實業家とを出している。我等は神の下せる人類にむかつて善惡の裁判を下す權能は決してない。



『臆はづ誌』時代の文品は、蓋し北米に於ける當時代の日本民

族の心持を最もよく現したものである。私の發行したる小雑誌は、實に見すばらしいものであった。併し其の内容に於ては今より見て驚くべき佳什が含まれているやうに思ふ。日本文學を基礎とし、それにアメリカ生活を織込んだ所に言ふべからざる趣味が現れている。

野口米次郎の英詩は、日本流の思想がアメリカ人を驚かしたのであった。

高橋孤泉の繪畫は日本流の思想が洋畫として現れたのであった。

彼等が米國に於いて名を成したのは、竹に木をついだやうなものであった。



竹に木をつぐといふことは今日植物學上不可能の事である。

若之に類似せる發明があるならば、世界萬人の視聽を集めること容易である。而して我野口と高橋とは日本の竹に米國の木をついだ天才者であった。

〔日米〕No. 8939 September 21, 1924)

(七二)

山田鈍牛の事 (一)

臆はづ誌の文品

『臆はづ誌』の寄稿家には面白い人が多かった。中にも山田

鈍牛(本名作太郎、寧留村とも號す)は滑稽文の名家であつた。彼は無口な男で、大酒家であつた。酒を飲んで酔ふたが最後、どこにでも小便をする。どこにでも寝る。彼は酔ふて大道に寝るが如きは珍しくない。彼は時として酔ふて他人のベッドに横はり、夫婦者を辟易せしめたこともあつた。あるとき、某料理屋の日本座敷の床の間に向つて放尿し主人に蹴飛ばされたこともあつた。

私は山田鈍牛を十返舎一九の再來だと思ふたこともあつた。彼の作品として私に今も覺えているのは狂詩「英美詩九首」である。左にこれを抜載して見やう。

(一) 祝腮的再興

貴社益々御繁A

諸君骨折全準B

再興腮的十三號

眞之天下好雜C

(二) 寄記者及投書家

世上人事無拘D

面白可笑遺如E

泣暮笑過同様事

死後共到一冥F

(三) 同

拙者元來乏文G

空虛腦漿難絞H

漸事綴出此戲作

諸君勿笑無他I

(四) 日本現今之狀勢

増税々々又増J

細民訴飢苦活K

堪憎奸商汚吏輩

乘此機私巨利L

(五) 下手投書家

燈下獨座嬌々M

自期必一等賞N

忽驚手片爲水

勇氣頓挫心快O

(六) 桑港紳士

腹虫促夕飯泣P

其實囊中常窮Q

槍粟算段僅繁命

氣取紳士裝金R

(七) 洋行歸先生

洋服嚴敷腰掛S

切裝文明開化T

先生高説問如何

得意捫髮法螺U

(八) 生臭坊主

和尚納主均苦V

陽氣敲鐘唱網W

試向彼等問心意

由彌陀功德世X

（九）彌次馬連

路傍人立叫YY

其癖事件小針Z

非矢火又非喧嘩

女乞食捕風渡&

（漢詩型にABCの韻を踏んだものは山田鈍牛を以て最初とする）

◎ ◎ ◎ ◎

『腮はづ誌』中の「理屈一口ばなし」にこんなものがある。

甲「ちよいと、湯をわかして下さい」

乙「なに、湯ならわかさなくとも、わいているから湯と言ふんぢやねーか、「水わかせ」と言へなよ」

◎ ◎ ◎ ◎

甲「飯をたいて呉れまへ」

乙「たけているから飯といふんぢやねーか、「米をたけ」と言へなよ」

◎ ◎ ◎ ◎

患者「お医者さま、私はお腹の中が悪ふございます。ぞうぞ見

て下さい」

医者「お腹の中がわるいと、そりや見ることはお断りぢや」

患者「オヤそれまたどうした譯で」

医者「お腹の中を見るには殺した後に、解剖しなければ見えな
い」

◎ ◎ ◎ ◎

甲「火を燃やして下さい」

乙「燃えているから火と言ふんだ、「木をたけ」と言へなよ」

◎ ◎ ◎ ◎

客「床屋さん、頭を一つ刈って下さい」

床屋「へい、馬鹿言っちゃいけませんよ」

客「なぜ」

床屋「頭を刈っちゃ死んで仕舞ふわ、それよりか髪刈ってはど

うかね」（空々山人）

◎ ◎ ◎ ◎

狂歌百人一首もぢり歌

「これでもう三月ばかりも湯にいらす、垢つきばかり、うき
ものはなし」（寧留村）

狂句

「二階から落た座頭が鼻廻し」

「汽車でひる屁は一丁も續くなり」

都々逸（題天地）

天に一つの眞如の月も

地には田毎の月となる

(尺魔)

〔日米〕No. 8940 September 22, 1924)

(七三)

山田鈍牛の事 (二)

山田作太郎(鈍牛)は明治三十年の春何に感じたか知らんが、漂然として北に向かふた。彼れは飲めば頗るだらしなき男であるが、常識の發達した江戸ッ兒であつた。

彼れはビクトリアに滞在して相變らず飲み暮したらしい。時々、『臆はづ誌』に寄稿して來た。彼の文品は私が最も敬服する處であつた。

彼れは其後ビクトリアからシアトル市に移住した。其滑稽文の天才を抱いてシアトルに移り、明治三十八年頃「ドンチキ」といふ滑稽雜誌を發行した。

其當時私は、要務を帯びてシアトルに旅したことがある。此とき鈍牛と大に飲み大に語つた。

此當時彼れは妻君を持つていた。此妻君はどこから貰ふて來たのかわらない。丸顔のぽつてりとした女であつた。

「オイ、どこから女を拾ふて來たんだ？君には少々よすぎよ」

山田君曰く……

「フ、ン」

彼れは決して人と争はない。議論などは決してしない。人の言ふがまゝに言はして置く。そして萬事無關心の態度で酒をぐいぐい飲んでゐる。併し彼れが當代の人物を評するに至つては頗る辛辣を極めたものであつた。彼曰く……

「荒井と平出」

「話にならん。シアトルでは山岡音高が一番人物だ」

「あいつは法螺ふきだといふじゃないか」

「法螺ふきだ。しかし山岡の法螺は自分を售るために吹かん」

「僕はまだ山岡にあはないから知らんが、彼れは鈴木音高といふ時代から自由黨の壯士で有名であつた」

彼れは表情の明かでない眼で私を見た。

「君、古屋にあふたか」

「尋ねたけれども、不在であつた」

「あれは甲州人だ。甲州人を代表している特徴がある。服部(綾雄)がモ―少しエライと古屋もいんだがね。服部といふ奴は學者ぶつた無學者で、古屋を生かし切らん」

「古屋といふのは、ドンナ人間か」

「甲州人だよ」

「甲州人の特徴は信玄の特徴だ。君等のやうな、上杉謙信ぢやないよ」

「謙信の遺鉢を受けているから僕等は貧乏しているんだ」

「謙信は貧乏ぢやなかつたであらう。信玄こそ、貧乏であつた」

たと思ふ」

「そこで」

「だから謙信は器宇が大きいし信玄は細心周到であった」

「そんなことは別問題だ。私は古屋政次郎といふ人はドンナ人かと問ふたんだよ」

「だから、甲州人だと答へたんだよ」

「甲州人がどうした」

「まな飲みたまへ。僕はまだ古屋といふ人の値打を知らない」

「だから、君は貧乏しているんだ」

「若僕が古屋の値打ちを知ったなら、僕は一層貧乏するんだ」

「どうして」

「君は相變らずシスコイ男だ。僕なんかは世の中にだん／＼友達がなくなつて来て、金に縁のある人間など寄りつきもしないし、僕もまた金のある奴に寄りつきたくない。「輕が故に勘平腹をきり」など、地口口っているのが僕の慰安だ。世の中の人物は皆んな知っているつもりだが、自分は其人物の中に入りたくない」

○ ○ ○

彼は滑稽趣味の雑誌を一人で書いて、世を茶かしていた。然るに女はほかの男を拵へて他に走つた。さすがの鈍牛先生も落膽したらしい。

數年の後、私は再びシアトルに旅した。北米時事の宮崎徳風君にきくと、鈍牛翁は女が他に走つてから意氣が衰へたやうで、あまり世間に顔を出さないといいふことであつた。

○ ○ ○

鈍牛ほどのエライ滑稽文をかいて、それが酬いられずに貧乏のしつ／＼けをして死んだとあつては、在米同胞の讀書界は如何にも見すばらしいものである。幸運と不運とは時と場所とである。

彼は數年前に紙屑だらけの一室を残してお先に冥土へ旅立つた。

〔日米〕No. 8941 September 23, 1924)

(七五)

米津彌吉君と其時代

現在、桑港運送會社を經營している米津彌吉君は明治十六年十月十三日の渡米である。桑港在留日本人現存の古參者として或は最古の人であらう。彌吉君は安政五年十一月三十日生れである。序に桑港に於ける安政五年者を記せば

(一) 故小川多吉 (岡山縣人にして小川ホテル創立者)

(二) 吉本寅吉 (兵庫縣人にして桑港料理屋千代志の繼承者、現、櫻府千代志の持主)

(三) 堀川菊次郎 (和歌山縣人、俗稱菊さんといひ現小川ホテル)

ルの料理人

此安政五年者の中に米津は先輩で小川は明治二十五年の渡米、吉本は同廿六、菊さんは明治廿九年の渡米である。

彌吉君は在米四十二年間、色々面白い歴史談をもつていらる、特に四十餘年間桑港を中心として生活していらる、ので、桑港通として一個の權威である。

彌吉君は渡米以來、桑港王府の各所で家内の労働に従事し、明治三十六年桑港に於て運送業を始め今日に及んでいる。彼の語る處によれば明治十六年頃には桑港附近の日本人總數は八九十人に過ぎず、それも多くは水夫、學生であつたといふことである。

此當時、白人に連れられて渡米し家内の労働をしていた者の重なるものは、赤羽根忠右衛門(妻帯者) 高橋七五郎(無妻) 秋山磯吉(妻帯者) 高須清太郎(妻帯者) 柳澤佐吉(妻帯者) 學生として伊達多仲、根本正、吉池寛、田村直臣、美山貫一、吉田法順くらいなものであつた。女性として見えたものは少數の妻君を除くの外、多くは水夫が東洋各港から引かけてきた半妻半娼の者が多かつた。

此頃桑港に於いて姉御株で有名であつたのは支那人アケンの妾として香港邊から渡つたお清婆さんであつた。この婆さんはデンボ肌の姉御で在米日本人の集會所の形で一家をクレイ街九百七番に持ち、毎晩花ガルトを遊んで水夫御ざれ、賣笑婦御坐れ、書生御ざれで、一個の梁山泊を築いていた。

お清婆さんの亭主アケンは賭博場に關係を持ち、其方面の親分株であつた。

此當時、日本人の集合する場合は、

(一) 支ミッシヨンのベスメント

これはワシントン街九百十六番に在り宣教師ギブソンの司どる所、福音會は明治十年このベスメントに於いて基督教的青年、小谷野啓藏、美山貫一等によりて創立せられ、基督教に屬する青年は此處を本據としていた。

(二) 川口水夫ボーディング

之は明治十九年新潟縣人川口喜三郎(俗稱川口ヂャッキといひ、水夫上がり)がクレイ・アベニュー三番に始めて水夫宿を開業し、教會に屬せざる人々は多く此の家に集まれり。

(三) お清婆あさん

之は明治十六年頃よりクレイ街九〇七番に居住し、同胞婦人の集會所の形をなし、且水夫等も出入す。

明治十九年以前には右の外に日本人の集會所といふべきものがなかつた。

△戀の悲劇

前節に述べし如く明治十六七八年頃には在留日本人にして妻帯するものは暁天の星の如くであつた。彌吉君渡米がせる十六年頃には僅かに四五人の妻帯者あるのみであつた。而してこの當時、日本の賣笑婦は甚だ少なかつた。勿論支那人の賣笑婦

各國人の賣笑婦は桑港に可なりの數であつたが多くの日本人は同族の血の香ほりを好んでいた。茲に戀の悲劇が起るのは當然である。

明治十九年春に起つた戀の悲劇はその當時の同胞をして一驚を喫せしめた。事の起りは下の如くである。

柳澤佐吉は明治二年、獨逸人スネールに率いられて第一回の米國移民として渡米せる歴史ある人で群馬縣の産である。此の人は明治九年に妻なみ子を迎へて結婚し、翌年一女を儲けた。斯くて十年間同棲する間に、明治十八年頃、桑港に在留し白人家庭のウエターをなせる林兼次郎といふ青年と戀の情を通じた。然るに、なみ子夫人は時々桑港に出でてお清婆さんと懇意になるに随ひ、此家に出入する三谷萬吉といふ獵船の射手と又候懇意になつた。

なみ子夫人は放埒な、氣前のいい女であつた。男が云ひよれば理屈なしに其要求を容れる自然の兒であつた。兼次郎を愛した心持で萬吉をも愛した。併し兼次郎はなみ子を獨占したつもりであつた。茲に戀の大悲劇が起る。

〔日米〕No. 8989 November 10, 1924

（七六）

戀の悲劇（二）

柳澤佐吉は妻なみ子のふしだらを知り、女を自分の許に養ひ、

夫婦隔離の態度を採つていた。なみ子は多く桑港のお清婆あさんの處にいつてカルタを遊んでいた。兼次郎を出し抜いて萬吉とふざけていた。兼次郎はこれまで、なみ子に可なりの金使ふてその觀心を買ふた。

「米津さん五弗貸して下さい」

米津は心よく五弗を貸した。兼次郎はその金でなみ子を誘ふて芝居に行き、歸路支那めしを御馳走した。そしてお清婆あさんの處へおなみを送り届けた。

お清婆あさんの家には獵船の射手萬吉がなみ子を待受ていた。この夜、なみ子は萬吉と共に眠つた。それが電光石火の妬心をもつ兼次郎の耳に入つた。

「兼さんは馬鹿だと、他人の妻君に金を使ふて馬鹿にされて、女はかへつて萬吉に押さへられているんだから」

自分の愛する女に弄ばされて馬鹿呼ばはりをされるのは男として堪へ得る處でない。

「ほんとう乎」

「町内で知らぬはお前ばかりなり」

「誰が、そんなことをしているの乎」

「誰でも知つている。若しお前が知りたいなら、現場を見せてやらうか」

「ウン」

兼次郎の眼は血ばしつていた。

○ ○

翌日、兼次郎は、お清婆あさんの家の脇に潜んでなみ子と萬吉の動勢を監視した。なみ子は萬吉と共に手を組みながらお清婆あさんの家に入って行くのであった。

「あらいやだ。兼さんなんて云ふておくでない。あんなウエターなんかしているエクジなしは妾だいきらいよ。それよりか、ラッコを打ちとめる鐵鉋打のほうがいいよ。……あなた何疋くらいラッコを打ちとめたの?」

「覚えていませんが、航海のたびごとに五十疋くらいは打ます」

「一疋どのくらいするの?」

「五百弗もする」

「大層儲かるのね」

「ウエタさんよりは儲かるけ」

なみ子と萬吉はお清婆あさんの處に這入っていった。兼次郎の悪口を言へながら這入っていった。

温厚なる林兼次郎は此光景を目撃して一念の鬼と化した。彼は直にカネー街に到りピストルを買ふた。其ピストルは舊式の一發銃であった。彼れは六連發を買ふほど心に餘裕がなかったと見える。(或は懷中に餘裕が無かつたかも知れぬ) 彼れは其單發銃を提げてクレー街に急いだ。おなみさんの生命は風前の燈である。

この時、おなみさんは、お清婆さんのケチンで花合せをしていた。新しき情夫萬吉も此座に混じていたのであった。

兼次郎は、きわめて落付いたる態度を裝ふて

「おなみさんに一寸あいたい」

と申入れた。取次ぎに出たのはお清婆さんである。「あら兼さん、まあおあがりよいそがしそうにしてどうしたの? なみさんは奥にいるよなみさん兼さんが用があるといふとよ入らっしゃい」

なみさんは、片一方スリッパ、片一方草履のだらしない姿で入口に出て來た。

ズドンと一發を放した。

なみ子は卒倒した。

警笛頻聲、四邊の動亂、兼次郎は、直に警官に捕へられた。

兼次郎のピストルを検するに更に一發の銃丸がこめられてあった。此一發は彼れがなみ子を殺し更に情敵萬吉を殺さんと企てたのであるか、或はなみ子を殺して自殺せんとしたのであるか詳でない。彼れは加州上等裁判所に於て終身懲役の宣告を受けた。弁護士は彼れの戀を高潮しなみ子と情死する考へなるを述べた。戀の殺傷には謀殺はない筈である。可愛女を殺すのは自分の死を賭すること固よりである。米國の裁判が戀に關する刑罰を死刑に處せざる多くの理由は茲に存じている。

○ ○
兼次郎は終身懲役に處せられたがサンクインテン収治監に十三年五ヶ月在獄の後に放免され歸朝の後妻を迎ひ五人の兒を産み家運長久の由を聞いた。

米津彌吉君に借た五弗の金は兼次郎が出獄後お禮をいふて返済したそうである。以て兼次郎の物堅い氣象がわかる。

〔日米〕No.8990 November 11, 1924〕